

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

大原社会問題研究所では、積極的に研究・社会連携・社会貢献にかかわる活動をおこない、多彩な出版物を刊行し、Web サイトを拡充するなどして、その研究・教育活動を外部に発信している点は高く評価できる。

本研究所の研究機能、アーカイブズ機能、研究情報センター機能、地域貢献および国際交流の4つの柱をさらに発揮・拡充させ、その機能をもって地域社会のみならず国際社会に貢献することを期待したい。

そのためにも、2019 年度の 100 周年記念事業の具体的な計画を策定して着実にその準備を進めてほしいが、既に仮の案として複数の企画が検討されているようであり、おおいに期待される。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

- ・研究所の柱となる刊行事業（『日本労働年鑑』『大原社会問題研究所雑誌』）を継続した。
- ・研究情報センター機能の柱である WEB サイトをリニューアルし、ナビゲーションの利便性を向上させ、検索インターフェースを改善した。
- ・ILO 駐日事務所、労働資料協との共催シンポジウムと2回の「シネマ・フォーラム」の開催により社会貢献、地域貢献活動を継続した。また、環境アーカイブズは、スモン関係資料をリバティ大阪で開催された展示会に貸し出し協力した。
- ・労働科学研究所移転に伴い、岨崎義等関係資料や労研戦前期資料を受贈し、アーカイブズ機能を拡充した。
- ・国際交流では、大原社研主宰の研究会（環境・労働問題研究会）が国立台湾大学の准教授を招聘し、研究会での講演に加え、上智大学での国際講演会にも協力し、研究者の国際交流に貢献した。
- ・研究所 100 周年記念事業の準備については、所長および専任研究員から構成される「研究所 100 年史編集委員会」「100 周年記念事業準備委員会」を立ち上げ、15 年 11 月、16 年 1 月および 3 月に 3 回会合をもった。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

①第 6 回大原社研シネマ・フォーラム（主催：大原社研、2015 年 5 月 20 日、於：多摩キャンパス・エッグドーム 5 階ホール、参加者 36 人）「メトロレディブルース」「続・メトロレディブルース」

内容：非正規労働者の労働条件を改善する闘いについての映画の鑑賞後、出演者（地下鉄売店で働く非正規労働者）3 人および監督（松原明、佐々木由美氏）とトーク&ディスカッションを行った。

②第 28 回国際労働問題シンポジウム：中小企業とディーセントで生産的な雇用創出（共催：大原社研、ILO 駐日事務所）（2015 年 10 月 15 日、14 時～17 時 10 分、於：市ヶ谷キャンパスボワソナード・タワー・スカイホール、参加者約 70 人）

内容：2015 年 6 月に開かれた第 104 回 ILO 総会の第 4 議題「中小企業とディーセントで生産的な雇用創出」をテーマとし、第 1 部では ILO 総会の討議に参加した政府および労使の代表からの報告を受け、第 2 部では中小企業の専門家 2 人による報告・意見交換を行った。2 部構成は 2015 年度から。

③労働資料協第 30 回総会記念シンポジウム（共催：大原社研、社会・労働関係資料センター連絡協議会）「社会労働資料活用の可能性と未来」（2015 年 11 月 26 日、15 時～17 時 30 分、於：100 周年記念館国際会議場、参加：82 名）

内容：熊沢誠氏の基調講演「私の労働研究とアーカイブズ」の後、労働史・社会運動史に携わってきた研究者、アーキビストが資料保存の現状・課題についてパネルディスカッションを行った。

④第 7 回大原社研シネマ・フォーラム（主催：大原社研、2015 年 12 月 2 日、17 時～19 時 15 分、於：多摩キャンパス・エッグドーム 5 階ホール、参加者 39 人）

内容：赤城修司氏（福島市在住、高校教員）による「僕の見た福島」をテーマとした写真スライドショーを行い、その後、原発事故後の福島市民の日常について赤城氏と参加者でディスカッションを行った。なお、同氏の写真展「Fukushima

Traces」を11月18日～12月2日まで多摩図書館2階エントランスで開催した。

- ⑤国際交流講演会：Hwa-Jen Liu (National Taiwan University) “Reverse Sequencing of Labor and Environmental Movements: Taiwan and South Korea (主催：上智大学比較文化研究所、後援：法政大学大原社会問題研究所) (2015年12月8日、18時30分～20時、於：上智大学四谷キャンパス、参加者の多くは上智大学教員、院生、学部生、東京に滞在している外国人研究者)

内容：Hwa-Jen Liu 氏 (大原社研主宰の環境・労働問題研究会が招聘) の著書 *Leverage of the Weak : Labor and Environmental Movements in Taiwan and Korea* に基づいた報告、質疑・ディスカッションを行った (英語)。

- ⑥15年度に活動が行われた大原社研専任研究員、兼担研究員主宰の研究会・研究プロジェクト：

「社会問題史研究会」(代表：榎一江)、「社会党史・総評史研究会」(代表：五十嵐仁[名誉研究員])、「環境・労働問題研究会」(代表：鈴木玲)、「女性労働研究史研究会」(代表：藤原千沙)、「大原社会政策研究会」(代表：藤原千沙)、「環境・市民活動アーカイブズ資料整理研究会」(代表：清水善仁)、「子どもの労働と貧困プロジェクト」(代表：原伸子)、「労働政策研究会」(代表：相田利雄[名誉研究員])、「環境政策史の学際的研究プロジェクト」(代表：西澤栄一郎)、「労務供給の多様化研究プロジェクト」(代表：浜村彰)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各イベントのチラシを参照(PDFファイル)。
- ・②の記録については、『大原社会問題研究所雑誌』2016年4月号を参照。
<http://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/oz/contents/?id=2-001-0000011>
- ・③の記録については、『大原社会問題研究所雑誌』2016年5月号を参照。
<http://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/oz/contents/?id=2-001-0000012>

②対外的に発表した研究成果 (出版物、学会発表等)

※2015年度に刊行した出版物 (発刊日、タイトル、著者、内容等) や実施した学会発表等 (学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等) の詳細を箇条書きで記入。

(研究所の集団的作業による刊行物)

- ①『日本労働年鑑』第85集、2015年版 (旬報社、2015年6月25日)：研究所所員 (所長、専任研究員、一部の兼任研究員) から構成される編集委員会が編集作業、本文執筆 (一部の章および節) を行った。また、特集1「労働市場のジェンダー構造」は藤原専任研究員により、特集2「生活保護法改正と生活困窮者自立支援法」は布川兼担研究員により執筆された。
- ②『大原社会問題研究所雑誌』(678号[2015年4月号]～689号[2016年3月号]、683、684号[2015年9月・10月]は合併号) 法政大学出版局：本雑誌の編集委員会は、所長、専任研究員、兼担研究員より構成されている。編集委員会は、2ヵ月に一回開かれ、雑誌編集計画、特集案、査読論文の状況、書評本選定について審議する。15年度に刊行された雑誌の特集は以下の通り。「第27回国際労働問題シンポジウム ディーセントな雇用創出と雇用制度改革」(4月号)、「境界地域における『国民統合過程』と人々の意識」(5月号)、「フェミニズム運動と反貧困運動」(6月号)、「若者労働問題の新局面(1)」(7月号)、「若者労働問題の新局面(2)」(8月号)、「新自由主義とジェンダー平等—政治学の観点から」(9・10合併号)、「社会保障・税一体改革後の医療・年金・子育て支援政策」(11月号)、「朝鮮人強制連行研究の成果と課題—『戦後70年』の現在から考える(1)」(12月号)、「朝鮮人強制連行研究の成果と課題—『戦後70年』の現在から考える(2)」(1月号)、「職業能力の間主観的構造(1)—訓練、資格、報酬」(2月号)、「職業能力の間主観的構造(2)—入職、選抜、処遇」(3月号)。
- ③法政大学大原社会問題研究所叢書 (大原社会問題研究所／相田利雄編)『サステナブルな地域と経済の構想—岡山県倉敷市を中心に』、2016年2月25日、御茶の水書房：大原社会問題研究所・労働政策研究会 (代表：相田利雄名誉研究員) により実施された調査・研究成果をまとめたもの。
- ④法政大学大原社会問題研究所監修 立本紘之 (兼任研究員) 解説『占領期日本社会党機関誌集成』(柏書房) 第Ⅲ期 (15年4月)、第Ⅳ期 (15年10月) が刊行され、復刻が完了した。
- ⑤ワーキングペーパー「持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.5—岡山県の産業政策と介護、倉敷市の地域医療調査報告」：大原社会問題研究所・労働政策研究会の中間報告。
- ⑥2013年に大原社研主催で実施した国際会議 “The Role of Organized Labor in Civil Society in East Asia: Comparisons between Korea, Taiwan and Japan” で報告された論文のうち3本がソウル大学 The Institute for Social Development and Policy Research が刊行する英文ジャーナル、*Development and Society* (44巻2号、2015年9月) の特集 “Union-CSO Coalitions in East Asia” に掲載された。掲載されたのは、” Changing Cross-movement Coalitions between Labor Unions and Civil Society Organizations in South Korea” (Byoung-Hoon Lee), ” The Changing Relationship between Labor

Unions and Civil Society Organizations in Postwar Japan” (Akira Suzuki), “Building Regional Networks between Labor Unions and Communities in Korea (Minjin Lee)である。

(研究所研究員[所長および専任研究員]の主要な個人業績)

原伸子兼担研究員 (所長)

- ・『ジェンダーの政治経済学—福祉国家・市場・家族』(有斐閣、2016年2月)
- ・“Unpaid Labor and the Critique of Political Economy in Home Economics and New Household Economics: From the Feminist Economics Perspective,” *The History of Economic Thought*, vol. 57.1, The Japanese Society for the History of Economic Thought (forthcoming).

鈴木玲専任研究員

- ・“The Changing Relationship between Labor Unions and Civil Society Organizations in Postwar Japan,” *Development and Society* (Vol. 44 No. 2, September 2015): 219-246.
- ・『『ブラック企業』の普遍性と多面性—社会科学的分析の試み』『大原社会問題研究所雑誌』(682号) 2015年8月、30～43頁。

榎一江専任研究員

- ・「法政大学大原社会問題研究所と社会運動研究」『歴博』192、2-5頁、2015年9月。
- ・「書評加藤千香子著『近代日本の国民統合とジェンダー』」『社会経済史学』81-4、611-613、2016年2月。

藤原千沙専任研究員

- ・「労働市場のジェンダー構造——男女雇用機会均等法成立30年の現状」法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑 第85集/2015年版』旬報社、2015年、38-71頁。
- ・「社会保障と社会福祉」男女共同参画統計研究会編『男女共同参画統計データブック—日本の女性と男性—2015』ぎょうせい、2015年、117-132頁。

清水善仁専任研究員

- ・「環境アーカイブズの拡がりを目指して」(『法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ・ニューズレター』創刊号、2016年3月)
- ・「環境問題関連資料の公開に向けた取り組みについて」(『法政大学サステナビリティ研究所 Newsletter』第7号、2016年3月)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

以下のURLを参照

- ①http://www.junposha.com/catalog/product_info.php/products_id/1008
- ②<http://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/oz/backnumber/>
- ③<http://www.ochanomizushobo.co.jp/cgi-bin/menu.cgi?ISBN=978-4-275-02031-4>
- ④<http://www.kinokuniya.co.jp/03f/book/9784760145195.pdf>
- ⑤<http://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/research/publication/wp/>
- ⑥<https://www.dbpia.co.kr/Journal/ArticleList/V0IS00242366>

③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所の刊行物に対して2015年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2015年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)の詳細を箇条書きで記入。

- ①2015年度に刊行された、2013年度大原社会問題研究所叢書の書評は以下の通り
 - ・上野継義「書評 榎一江・小野塚知二編著『労務管理の生成と終焉』」『経営史学』50-1、62-64頁、2015年6月。
 - ・山下充「書評と紹介 榎一江・小野塚知二編著『労務管理の生成と終焉』」『大原社会問題研究所雑誌』680、85-88頁、2015年6月。
 - ・金子良事「榎一江・小野塚知二編著『労務管理の生成と終焉』、日本経済評論社、2014年、iv+362頁」『歴史と経済』57-2、43-45、2015年1月。
- ②2015年度に刊行された、2010年度大原社会問題研究所叢書の書評は以下の通り
 - ・今井順「書評 法政大学大原社会問題研究所・鈴木玲編『新自由主義と労働』」『日本労働社会学年報』26号、125-130頁、2016年1月。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学術誌を参照。なお、『大原社会問題研究所雑誌』掲載の山下充氏の書評については以下を参照。

http://oisr-org.ws.hosei.ac.jp/images/oz/contents/680-10.pdf
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 現在、外部評価を受けていないが、2.1 内部質保証システム（下記）を通じて研究所諸活動の情報共有や課題の意見交換を行っている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 （15 年度に採択を受けたもの：研究代表者で採択されたもののみ記載） 〈科学研究費助成事業〉 ・基盤研究（C）「両大戦間期イギリスにおける家族手当構想と福祉国家の起源」（2014～16 年度）研究代表者：原伸子兼任研究員（所長）（2015 年度 70 万円） ・基盤研究（C）「労働運動と環境運動の連携関係の日米比較」（2015～17 年度）研究代表者：鈴木玲専任研究員（2015 年度 50 万円） ・基盤研究（C）「戦時期の労働と生活に関する基礎的研究」（2012～16 年度）研究代表者：榎一江専任研究員（2015 年度 80 万円） 〈厚生労働省科学研究費補助金（「医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業」） ・「薬害資料データ・アーカイブズの基礎構築に関する研究」研究代表者：鈴木玲専任研究員（2015 年度 450 万円） （15 年度に応募したものの不採択だったもの） ・基盤研究（B）「社会問題の史的変容と研究機関の役割に関する総合的研究」榎一江専任研究員が応募、不採択。 ・基盤研究（C）「環境アーカイブズの基盤整備に向けた研究」清水善仁専任研究員が応募、不採択。 ・若手（B）「戦前・戦時期における社会政策の基礎的研究」金子良事兼任研究員が応募、不採択。 ・若手（B）「パート労働者の賃金と社会保険制度の連関に関する実証研究」畠中亨兼任研究員が応募、不採択。 ・基盤（C）「家族介護に関する地域統計の拡充の試み」橋本美由紀兼任研究員が応募、不採択。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・研究開発センター「2015（平成 27）年度 法政大学 公的研究費採択者一覧」を参照

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・大原社会問題研究所は 2019 年に創立 100 周年を迎える。100 周年記念のプロジェクトとして、『大原社会問題研究所 100 年史』の編纂・刊行、研究所所蔵資料の整理・分析に基づいた叢書の刊行、大原ネットワーク関連のシンポジウム等について検討をしていく。「100 周年記念事業準備委員会」と「100 年史編纂委員会」が 2015 年度に設置された。 ・「国際労働問題シンポジウム」（ILO シンポジウム）の構成について、ILO 駐日事務所と折衝を行い、15 年度のシンポジウムから 2 部構成とした。具体的には、第 1 部が ILO の討議に参加した政労使代表による報告、第 2 部が研究者、実務家の報告と意見交換である。これにより政労使代表の報告が円滑に行えるようになった。 ・WEB サイトのリニューアル（デザイン的大幅変更、検索インターフェースの改善、独自サーバーから大学サーバーへの移転）を行い、利用者の利便性やデータの保全を図った。	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・研究所創立 100 年記念事業（『大原社会問題研究所 100 年史』や叢書の刊行など）の準備を着実に進める。
- ・資料整理や復刻事業を着実に進めること。DB 化された資料の WEB サイト公開を進めること。
- ・国際講演会やシンポジウム等国際交流事業を最低年 1 回開催すること。
- ・定期刊行物（『大原社会問題研究所雑誌』『日本労働年鑑』）の刊行準備を着実に進め、必要に応じて編集・執筆作業の見直しを行うこと。
- ・大原社蔵資料の調査を進めるための外部資金の獲得を目指す。

【この基準の大学評価】

大原社会問題研究所では研究・教育活動として 2015 年度は 5 本のシンポジウム、講演会等が開催され、10 人の専任、兼任研究員が研究会・研究プロジェクトを開催し、積極的な活動を行っているとして評価できる。研究成果も大原社会問題研究所雑誌を毎月刊行しているほか、多数の論文が発表され、発表実績は高く評価できる。科研費については 2015 年度 6 件の申請を行ったが採択は 1 件にとどまり、科研費全体の平均採択率である約 30%と比較すると低いが、積極的に申請を行う姿勢を評価したい。2019 年の創立 100 周年記念事業の成功に向けた努力に期待したい。

2 内部質保証

（１）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・運営委員会：専任、兼任研究員（合計 12 人＋事務方オブザーバー）から構成される研究所意思決定機関であり、8 月を除き毎月 1 回（計 11 回）開催された。研究所の活動計画、諸シンポ・イベントの内容、研究プロジェクト、出版計画、研究員や研究補助員（RA）の委嘱、研究所規程の改正等が審議され、また研究所通常業務やイベントについて報告が行われた。15 年度の運営委員会の平均出席率は 71%であった。
- ・研究員総会：毎年 2 月末に開催され、専任・兼任・名誉・兼任・客員・嘱託各研究員および RA が出席する。15 年は 2 月 24 日に行われ、36 人が出席した。所長より活動報告が行われ、それに対し意見交換が行われた。
- ・研究員会議：所長（兼任研究員）、専任研究員、兼任研究員により構成される会議で、8 月を除き毎月 1 回開催された。所長が運営委員会報告を行い、各研究員が担当している業務の進捗状況を報告した。また研究所の業務遂行における課題について意見交換をした。
- ・環境アーカイブズ定例会議：専任研究員、RA、環境アーカイブズの臨時職員より構成され、3 ヶ月に 1 回開かれた。各担当者の資料整理状況、広報活動の状況等の報告と、業務上の課題について意見交換を行った。
- ・事務会議：事務会議は、所長、副所長、専任職員、嘱託職員、臨時職員から構成される「拡大事務会議」と専任研究員（副所長を含む）、専任職員、嘱託職員から構成される「事務会議」の 2 種類がある。どちらも 8 月を除く毎月 1 回開催された。前者は、全職員に研究所全体の方針や動向について情報共有し、同時に閲覧対応や資料整理等の実務上の課題について意見交換した。後者では、研究所運営の具体的な課題（予算執行、資料受贈の可否、資料整理の方法等）について意見交換が行われた。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・15 年度より、専任研究員、嘱託職員、臨時職員により構成される「資料事務会議」が設置された。資料整理、DB 作成、資料の扱い方法等の実務的課題に対し機動的に対応することが目的である。原則、毎週水曜日（運営委員会開催日を除く）に開催される。	

【この基準の大学評価】

大原社会問題研究所では質保証を専門に検討する委員会は設置されていないが、運営委員会をはじめとする各種委員会が研究所の諸活動の企画・運営等について定期的に質保証を行っている。特に 2015 年度から原則毎週「資料事務会議」が開催されており、質保証がより確実に実施されることが期待される。

各種委員会では、研究員、事務職員がそれぞれの担当分野で個別に円滑に運営されており、その一環で質保証に関する

活動が行われている。それぞれの業務は広範囲で質保証活動として別途切り出すことは困難であることは理解できるが、一方で質保証活動が適切に活動していることを外部に対して示すことも求められている。議事録の見出し一覧の表などから議事内容へ辿れるようにするなど、足跡がわかる様に記録を残しておく必要がある。

【大学評価総評】

大原社会問題研究所は間もなく創立 100 周年を迎える伝統ある研究所であるが、現在も積極的に研究・社会貢献・社会連携活動を推進し、研究成果を広く発信するなど、その活動は高く評価される。

現在、科研費による研究成果はオープンアクセスジャーナルで発表することが推奨されている中、大原社会問題研究所は成果の学外発信も活発で、同研究所のウェブサイトより成果資料の一覧リスト及び、ジャーナル等刊行物資料の一部の全文を公開している。さらに、所蔵資料のアーカイブ化を実施中で、順次公開していることは高く評価される。

また、質保証活動は全学一体となった取組であり、PDCA サイクルを回すとともに、各種委員会における質保証活動の内容が見えるよう、資料の整備なども期待したい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

イオンビーム工学研究所設置の目的・理念に応じて高い専門性を持つ研究活動が活発に行われ、シンポジウムや刊行物により社会への還元がなされるなど、その教育・研究活動により研究所の社会的役割を十分に担っている。

懸案であった欠員の補充が実現し今後の研究活動に弾みがつくことが期待される。

第三者による研究所活動のチェックなど、いわゆる質保証システムについては一層の充実が期待される。一方、大学評価委員会として施設老朽化問題について意見を述べる立場にはないが、施設の更新についての働きかけには期待したい。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

研究所の活動について十分評価して頂いている。欠員補充については評価委員会からの肯定的な評価も参考にして頂いたのか、任期付きではあるものの欠員の補充が実現し、今後の研究を活発に進めることが可能となっている。設備の老朽化についても以前から運営委員会では指摘しており、また評価委員会においても同様の認識を持って頂いている。今後とも関係機関に対して更新についての働きかけを行っていききたい。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ・2015 年 12 月 9 日のシンポジウム開催のため、大学や関連研究機関に案内状、ポスター送付を行い、応用物理学会誌や物理学会誌へ案内の掲載依頼を行った。またホームページへも案内を掲載した。今年度は以下の 3 名に招待講演をお願いした。原史朗氏（産業技術総合研究所）「超小型半導体生産システム ミニマルファブ～その概念と市場、及び開発」、平子敬一氏（株式会社 IHI）「衛星搭載用小型地球センサ ～民生エアコン用赤外検出器を応用して～」、豊川弘之氏（産業技術総合研究所）「高エネルギー光子ビームを用いた非破壊検査技術に関する研究」。一般講演件数は 27 件で、シンポジウム参加者は 114 名（学外 19 名、学内 95 名）となり、例年と同規模であった。またシンポジウムプロシーディングスを刊行した。 ・2016 年 3 月 4 日には学部学生、院生を対象とした公開セミナーを開催した。明治大学講師の吉野理貴氏に「高誘電率絶縁膜を用いた高耐圧縦型 GaN ダイオード」、今年度で定年退官される法政大学の中村徹教授に「シリコンバイポーラと GaN デバイス」と題して御講演頂き、52 人の参加者があった。 ・NHK に実験協力した原子衝突模擬実験の内容が高校生向け番組「NHK 高校講座」（化学基礎第 7 回「原子核と電子」としてネット配信されている。 ・2015 年 4 月 25 日に実施された放射線業務従事者のための教育訓練講習会の開催へ協力を行った。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・第 34 会法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウムに関するポスター、案内状、プログラム、アブストラクト集 ・刊行物「Proceedings of the 34th symposium on materials science and engineering research center of ion beam technology」 ・イオンビーム工学セミナーのポスターや受講者名簿 ・NHK http://www.nhk.or.jp/kokokoza/library/tv/kagakukiso/archive/chapter007.html ・放射線安全取扱講習会のポスターや受講者名簿、記録ビデオ等
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ● T. Yamashita, S. Kuwano, K. Kuriyama, and K. Kushida, Optical band gap of Li_8SiN_4 with disordered structure as a cathode material of lithium secondary batteries, Optical Band Gap and Bonding

Character of Li_5SiN_3 , *Physica Status Solidi (C)*, 12, pp.845-848 (2015).

- K. Kushida and K. Kuriyama, Crystallization mechanism of sol-gel synthesized spinel LiMn_2O_4 , *Physica Status Solidi (C)*, 12, pp.549-552 (2015).
- T. Kaida, K. Kamioka, T. Nishimura, K. Kuriyama, K. Kushida, and A. Kinomura, Hydrogen interstitial in H-ion implanted ZnO bulk single crystals: Evaluation by elastic recoil detection analysis and electron paramagnetic resonance, *Nucl. Instrum. Method Phys. Res. B* 365, pp.171-174 (2015).
- A. Shinkawa, Y. Shibasaki, T. Nishimura, C. Tanuma, and K. Kuriyama, Hydrogen ion-implantation induced low resistive layer in KNbO_3 bulk single crystal: Evaluation by elastic recoil detection analysis, *Nucl. Instrum. Method Phys. Res. B* 371, 283-285 (2016).
- T. Nakamura, N. Nishikata, K. Kamioka, K. Kuriyama, and K. Kushida, Proton irradiation induced defects in GaN: Rutherford backscattering and thermally stimulated current studies, *Nucl. Instrum. Method Phys. Res. B* 371, 251-253 (2016).
- Y. Takeuchi, T. Yamashita, K. Kuriyama, and K. Kushida, Synthesis and charge-discharge performance of Li_5SiN_3 as a cathode material of lithium secondary batteries, *J. Solid State Electrochemistry*, in press (2016).
- Hiroshi Ohta, Naoki Kaneda, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tomoyoshi Mishima, and Tohru Nakamura, Vertical GaN p-n junction diodes with high breakdown voltages over 4 kV, *IEEE Electron Device Letter*, 36, 1180-1182 (2015).
- Takuya Oikawa, Yusuke Saijo, Shigeki Kato, Tomoyoshi Mishima, and Tohru Nakamura, Formation of definite GaN p-n junction by Mg-ion implantation to n-GaN epitaxial layers grown on a high-quality free-standing GaN substrate, *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B*, 365, 168-170 (2015).
- Kazuki Nomoto, Bo Song, Zongyang Hu, Mingda Zhu, Meng Qi, Naoki Kaneda, Tomoyoshi Mishim, Tohru Nakamura, Debdeep Jena, and Huili Grace Xing, 1.7 kV and $0.55 \text{ m}\Omega\cdot\text{cm}^2$ GaN p-n Diodes on Bulk GaN Substrates with Avalanche Capability, *IEEE Electron Device Letter* 37, 161-164 (2016).
- Kenji Shiojima, Shingo Murase, Shingo Yamamoto, Tomoyoshi Mishima, and Tohru Nakamura, Two-dimensional characterization of ion-implantation damage in GaN Schottky contacts using scanning internal photoemission microscopy, *Jpn. J. Appl. Phys.* 55, 04EG05 (2016).
- Moe Naganawa, Toshichika Aoki, Tomoyoshi Mishima, and Kenji Shiojima, *Jpn. J. Appl. Phys.* 55, 04EG06 (2016).
- Michitaka Yoshino, Fumimasa Horikiri, Hiroshi Ohta, Yasuhiro Yamamoto, Tomoyoshi Mishima and Tohru Nakamura, High-k Dielectric Passivation for GaN Diode with a Field Plate Termination, *Electronics* 5, 1-7 (2016).
- Tomoaki Nishimura, Computer simulation program for medium-energy ion scattering and Rutherford backscattering spectrometry, *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B* 371, 97-100 (2016).
- J. Ribeiro-Soares, M. E. Oliveros, C. Garin, M. V. David, L. G. P. Martins, C. A. Almeida, E. H. Martins-Ferreira, K. Takai, T. Enoki, R. Magalhães-Paniago, A. Malachias, A. Jorio, B. S. Archanjo, C. A. Achete, and L. G. Cançado, Structural analysis of polycrystalline graphene systems by Raman spectroscopy, *Carbon*, 95, 646-652 (2015).
- 2) V.Yu Osipov, A. E. Aleksenskiy, K. Takai, and A. Ya. Vul', Magnetic studies of detonation nanodiamond with surface modified with gadolinium ions, *Physics of the Solid State*, 57, 2314-2319 (2015).
- Y. Takeuchi, T. Yamashita, K. Kuriyama, and K. Kushida, Synthesis and charge-discharge performance of Li_5SiN_3 as a cathode material of lithium secondary batteries, 第 8 回先端技術のための材料国際会議 (ICMAT2015), シンガポール, 6月 28 日—7 月 3 日 (2015)。
- A. Shinkawa, Y. Shibasaki, T. Nishimura, C. Tanuma, and K. Kuriyama, Hydrogen ion-implantation induced low resistive layer in KNbO_3 bulk single crystal: Evaluation by elastic recoil detection analysis, 第 22 回イオンビーム分析国際会議 (IBA2015) BP-15, クロアチア・オパティヤ, 6月 14 日—19 日 (2015)。
- T. Nakamura, N. Nishikata, K. Kamioka, K. Kuriyama, and K. Kushida, Proton irradiation induced defects in GaN: Rutherford backscattering and thermally stimulated current studies, 第 22 回イオンビーム分析国際会議 (IBA2015) BP-24, クロアチア・オパティヤ, 6月 14 日—19 日 (2015)。
- Tomoyoshi Mishima, Kazuki Nomoto, Tohru Nakamura, Evaluation of GaN Epitaxial Layers grown on Free-standing GaN Substrates by Fabrications of p-n Diodes, 2015 MRS Spring Meeting & Exhibi, San Francisco, USA, 4/6-10 (2015)。

- Hirofumi Tsuge, Yusuke Saijo, Shigeki Kato, Takuya Oikawa, Tomoaki Nishimura, Tomoyoshi Mishima, and Tohru Nakamura, Evaluation of highly Mg-ion-implanted GaN layers grown on free-standing GaN substrates, 22nd International Conference on Ion Beam Analysis, Opatija, Croatia, 6/14-19 (2015).
- Kenji Shiojima, Shingo Yamamoto, Yuhei Kihara, Tomoyoshi Mishima, Non-destructive Imaging of Buried Interfaces of SiC and GaN Schottky Diodes by Scanning Internal Photoemission Microscopy, the Compound Semiconductors Week 2015 (ISCS-IPRM), Santa Barbara, USA, 6/30 (2015).
- Moe Naganawa, Toshichika Aoki, Tomoyoshi Mishima, and Kenji Shiojima, Electrical Characteristics of Au/Ni Schottky Diodes on Cleaved m-plane Surfaces of Free-standing n-GaN Substrates, 2015 International Conference on Solid State Devices and Materials, Sapporo, 9/27-30 (2015).
- Kenji Shiojima, Shingo Murase, Shingo Yamamoto, Tomoyoshi Mishima, and Tohru Nakamura, 2-Dimensional Characterization of Ion-implantation Damage in GaN Schottky Contacts Using Scanning Internal Photoemission Microscopy, 2015 International Conference on Solid State Devices and Materials, Sapporo, 9/27-30 (2015).
- Michitaka Yoshino, Fumimasa Horikiri, Hiroshi Ohta, Tomonari Furuya, Tomoyoshi Mishima, Yasuhiro Yamamoto, Tohru Nakamura, CeO₂ Dielectrics Passivation for GaN Diode with a Field Plate Termination, The 2015 E-MRS Fall Meeting and Exhibit, Warsaw, Poland, 9/15-18 (2015).
- Kazuki Nomoto, Kengo Takahashi, Takuya Oikawa, Hiroshi Ogawa, Tomoaki Nishimura, Tomoyoshi Mishima, Huili Grace Xing, and Tohru Nakamura, Ion Implantation into GaN and Implanted GaN Power Transistors, The 228th ECS Meeting, Phoenix, USA 11/11-15 (2015).
- K. Nomoto, M. Zhu, B. Song, Z. Hu, M. Qi, R. Yan, V. Protasenko, E. Imhoff, J. Kuo, N. Kaneda, T. Mishima, T. Nakamura, D. Jena, H. Xing, GaN-on-GaN p-n Power Diodes with 3.48 kV and 0.95 mΩ·cm²: A Record High Figure-of-Merit of 12.8 GW/cm², 2015 IEEE International Electron Devices Meeting, Washington, DC, USA 12/7-9 (2015).
- T. Nishimura, Computer simulation code for medium energy ion scattering and Rutherford backscattering spectroscopy, 22nd International Conference on Ion Beam Analysis, Opatija, Croatia, 6/14-19 (2015).
- Yusuke Shiina, Tomoaki Nishimura, Tohru Nakamura, "P - type Graphene on Ion - Implanted 4H - SiC by CF₄ Plasma Treatment", International Conference on Silicon Carbide and Related Materials 2015, Th - P - 57, (2015).
- F.M. Shakhov, K. Takai, S.V. Kidalov, V.T. Lebedev, D.V. Shamshur, A.A. Krasilin, E. Lähderanta and A.Ya. Vul', Boron Doped Diamonds Produced at High Pressure with Metal Catalyst, 9th International conference on New Diamond and Nanocarbon (NDNC2105), Japan, Shizuoka, Shizuoka GRANSHP, 24-28, May, 2015.
- K. Nakamoto, T. Akatsu, K. Takai, Host-Guest interactions on epitaxial graphene, 9th International conference on New Diamond and Nanocarbon (NDNC2105), Japan, Shizuoka, Shizuoka GRANSHP, 24-28, May, 2015.
- T. Umehara, K. Takai, Effect of hydrazine adsorption for electron transport properties on graphene, 9th International conference on New Diamond and Nanocarbon (NDNC2105), Japan, Shizuoka, Shizuoka GRANSHP, 24-28, May, 2015.
- Kenta Kogane, Hidekazu Touhara, Yoshiyuki Hattori, V. Yu. Osipov, N. Romanov and Kazuyuki Takai, Effect of Thermal Annealing and Fluorination on the Structure and Magnetic properties of Nanodiamond, 9th International conference on New Diamond and Nanocarbon (NDNC2105), Japan, Shizuoka, Shizuoka GRANSHP, 24-29, May, 2015.
- K. Takai, A. Izumiyama, Influence of the surface structure of substrate for proximity effect on Graphene, 9th International conference on New Diamond and Nanocarbon (NDNC2105), Japan, Shizuoka, Shizuoka GRANSHP, 24-29, May, 2015.
- T. Yamashina, T. Isaka, K. Inoue, Y. Matsuo, K. Takai, Correlation between spin magnetism and chemical activity in graphene oxide / nanographene, 9th International conference on New Diamond and Nanocarbon (NDNC2105), Japan, Shizuoka, Shizuoka GRANSHP, 24-29, May, 2015.
- T. Isaka, T. Yamashina, K. Takai, Elucidation of the Interlayer structure of water-introduced graphene oxide, 9th International conference on New Diamond and Nanocarbon (NDNC2105), Japan, Shizuoka, Shizuoka GRANSHP, 24-29, May, 2015.
- N. M. Romanov, V. Yu. Osipov, J.-P. Boudou, T. Hayashi, K. Takai, High resolution TEM and infrared absorption studies of commercial polycrystalline nanodiamonds with twinning boundaries, 12th International Conference

Advanced Carbon NanoStructures, Russia, St. Petersburg, St Petersburg Academic University, 29, June - 3, July, 2015.

- T. Umehara , K. Takai, Fermi energy dependence of charge transfer kinetics in molecular adsorption on graphene, NT15 Satellite Symposia GSS15, Japan, Nagoya, Nagoya University, 28, June, 2015.
- T. Umehara , K. Takai, Gate-bias modulation of charge-transfer rate in hydrazine-adsorbed graphene, The Sixteenth International conference on the Science and Application of Nanotubs (NT15), Japan, Nagoya, Nagoya University, 29, June - 3, July 2015.
- A. Suzuki , K. Takai, Magnetic interactions between nanographene host and guest molecules with localized d electron, The Sixteenth International conference on the Science and Application of Nanotubs (NT15), Japan, Nagoya, Nagoya University, 29, June - 4, July, 2015.
- A. Izumiyama , K. Takai, Influence of the surface structure of substrate for proximity effect on Graphene, The Sixteenth International conference on the Science and Application of Nanotubs (NT15), Japan, Nagoya, Nagoya University, 29, June - 4, July 2015.
- Tomoki Yamashina, Takuya Isaka, Kadumi Inoue, Yoshiaki Matsuo, Kazuyuki Takai, Correlation between spin magnetism and catalytic activity in graphene oxide / nanographene, The Sixteenth International conference on the Science and Application of Nanotubs (NT15), Japan, Nagoya, Nagoya University, 29, June - 4, July 2015.
- Koichi Kusakabe, Gagus Ketut Sunnardianto, Naoki Morishita, Isao Maruyama, Kazuyuki Takai, Toshiaki Enoki, A theoretical proof for electrically enhanced desorption of hydrogen chemisorbed on graphene, The Sixteenth International conference on the Science and Application of Nanotubs (NT15), Japan, Nagoya, Nagoya University, 29, June - 4, July, 2015.
- Naoki Morishita, Gagus Ketut Sunnardianto, Koichi, Kusakabe, Isao Maruyama, Kazuyuki Takai, Toshiaki Enoki Strong exchange scatterings of low-energy quasi-particles at the Dirac point by the zero mode of graphene, NT15 Satellite Symposia GSS15, Japan, Nagoya, Nagoya University, 28, June, 2015.
- Naoki Morishita, Gagus Ketut Sunnardianto, Koichi, Kusakabe, Isao Maruyama, Kazuyuki Takai, Toshiaki Enoki, Temperature dependence of momentum distribution in a correlated Dirac sea with the zero mode of a hydrogenated graphene vacancy, The Sixteenth International conference on the Science and Application of Nanotubs (NT15), Japan, Nagoya, Nagoya University, 29, June - 4, July, 2015.
- K. Takai, T. Umehara, K. Nakamoto, A. Izumiyama, Molecular-based proximity effects in graphene, The International Chemical Congress of PACIFIC BASIN SOCIETIES 2015, USA, Honolulu, Hawaii Convention Center, 15-20, DECEMBER, 2015.
- T. Umehara , K. Takai, Tuning molecular adsorption kinetics in graphene by gate-bias voltage, The International Chemical Congress of PACIFIC BASIN SOCIETIES 2015, USA, Honolulu, Hawaii Convention Center, 15-20, DECEMBER, 2015.
- K. Nakamoto , K. Takai, T. Akatsu, Bromine adsorption effects on epitaxial graphene, The International Chemical Congress of PACIFIC BASIN SOCIETIES 2015, USA, Honolulu, Hawaii Convention Center, 15-20, DECEMBER, 2015.
- T. Yamashina, T. Isaka, K. Inoue, Y. Matsuo, K. Takai, Correlation between spin magnetism and chemical activity in graphene oxide / nanographene, The International Chemical Congress of PACIFIC BASIN SOCIETIES 2015, USA, Honolulu, Hawaii Convention Center, 15-20, DECEMBER, 2015.
- Kenta Kogane, Hidekazu Touhara, Yoshiyuki Hattori, V. Yu. Osipov, N. Romanov and Kazuyuki Takai, Fluorination of Nanodiamond / Nanographene-Shell Structure, The International Chemical Congress of PACIFIC BASIN SOCIETIES 2015, USA, Honolulu, Hawaii Convention Center, 15-20, DECEMBER, 2015.
- 鶴岡遼太郎, 新川輝, 西村智朗, 田沼千秋, 栗山一男, 串田一雅, “水素イオン注入 KNbO₃ パルク単結晶中の水素の挙動: 弾性反跳分析評価” 63 回応用物理学会春季学術講演会, 21p-P8-5 (2016 年 3 月).
- 村瀬 真悟, 太田 博, 三島 友義, 塩島 謙次, 電圧ストレス印加により劣化した n-GaN ショットキー電極の 2 次元評価, 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋
- 西城 祐亮, 柘植 博史, 加藤 茂樹, 西村 智明, 三島 友義, 中村 徹, Mg イオン注入 GaN 層の微視的評価, 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋
- 小田 惟巧, 金田 直樹, 山口 世力, 大平 圭介, 三島 友義, 中村 徹, p 型 GaN 層の SiN_x パッシベーション膜の検

討, 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋

- 堀切 文正, 成田 好伸, 吉田 丈洋, 太田 博, 三島 友義, 中村 徹, 自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードの初期耐圧不良解析 (1), 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋
- 成田 好伸, 堀切 文正, 吉田 丈洋, 太田 博, 三島 友義, 中村 徹, 自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードの初期耐圧不良解析 (2), 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋
- 太田 博, 金田 直樹, 堀切 文正, 成田 好伸, 吉田 丈洋, 三島 友義, 中村 徹, 4.7 kV 耐圧を有する自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオード, 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋
- 金澤 翔, 太田 博, 金田 直樹, 堀切 文正, 成田 好伸, 吉田 丈洋, 三島 友義, 中村 徹, GaN 基板上縦型 p-n 接合ダイオードにおけるメササイズの検討, 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋
- 椎名裕亮, 中村徹, 西村智朗, CF4 プラズマ処理を用いた 4H-SiC(0001) 上グラフェンの特性評価, 応用物理学会講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年秋
- 林 賢太郎, 太田 博, 金田 直樹, 堀切 文正, 成田 好伸, 吉田 丈洋, 三島 友義, 中村 徹, 自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードにおける順方向電流集中領域の検討, 応用物理学会講演会, 東工大, 2016 年春
- 永縄 萌, 青木 俊親, 三島 友義, 塩島 謙次, 自立基板の劈開面に形成した n-GaN ショットキー接触の評価 (2) -- 表面処理の影響--, 応用物理学会講演会, 東工大, 2016 年春
- 塩島 謙次, 田中 丈士, 三島 友義, 徳田 豊, GaN 基板上低キャリア厚膜 n-GaN ショットキー接触の DLTS 評価, 応用物理学会講演会, 東工大, 2016 年春
- 菅又 滉大, 金田 直樹, 三島 友義, 中村 徹, 自立 GaN 基板上イオン注入 MISFET のノーマリーオフ動作, 応用物理学会講演会, 東工大, 2016 年春
- 吉野 理貴, 堀切 文正, 太田 博, 山本 康博, 三島 友義, 中村 徹, 高誘電率絶縁膜を用いた FP 電極を有する縦型 GaN ダイオード, 応用物理学会講演会, 東工大, 2016 年春
- F. M. Shakhov, K. Takai, S. V. Kidalov, V. T. Lebedev, D. V. Shamshur, A. A. Krasilin, E. Lahderanta A. Ya. Vul', Boron Doped Diamonds Produced at High Pressure with Metal Catalyst, 第 34 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 東京, 小金井, 法政大学, 12 月 9 日, 2015
- 泉山 彰里, 高井和之, グラフェンの近接効果における基板表面構造の影響, 34 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 東京, 小金井, 法政大学, 12 月 9 日, 2015
- 梅原太一, 高井和之, グラフェンにおけるゲスト分子吸着速度のゲート電圧依存性, 第 34 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 東京, 小金井, 法政大学, 12 月 9 日, 2015
- 鈴木大輔, 高井和之, グラフェン/電解質溶液の界面における電気化学相互作用の解明, 第 34 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 東京, 小金井, 法政大学, 12 月 9 日, 2015
- 岩渕倭己, 西村 智朗, 高井和之, SiO₂ 基板への Au イオン照射によるグラフェンへの影響, 第 34 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 東京, 小金井, 法政大学, 12 月 9 日, 2015
- A. Suzuki, K. Takai, Host-Guest interactions between nanographene host and magnetic guest molecule, 理研シンポジウム: ミュオン科学応用の最先端, 埼玉, 和光, 理化学研究所, 2 月 16 日, 2016
- Kenta Kogane, Hidekazu Touhara, Yoshiyuki Hattori, V. Yu. Osipov, N. Romanov and Kazuyuki Takai, Fluorination and annealing effects on magnetism and structure of nanodiamond, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Bunkyo, University of Tokyo, 19, February, 2016
- Tomoki Yamashina, Takuya Isaka, Kentaro Tajima, Yoshiaki Matsuo, Kazuyuki Takai, Evaluation of spin magnetism and chemical activity for graphene derivatives, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Bunkyo, University of Tokyo, 19, February, 2016
- Akira Suzuki, Kazuyuki Takai, Host-Guest interactions between nanographene host and magnetic guest molecule, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Bunkyo, University of Tokyo, 19, February, 2016
- Daisuke Suzuki, Kazuyuki Takai, Electrochemical Interaction at the Interface between Graphene and Electrolyte, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Bunkyo, University of Tokyo, 19, February, 2016
- Takuya Isaka, Tomoki Yamashina, Kentaro Tajima, Yutaka Ohta, Kazuyuki Takai, Evaluation of Graphene Oxide Catalyst regarding Organic reaction in Aqueous media, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Bunkyo, University of Tokyo, 19, February, 2016
- 鈴木 大輔, 高井 和之, グラフェン/電解質溶液の界面における電気化学相互作用, 第 63 回応用物理学会春季学術

講演会，東京，大岡山，東京工業大学，3月19-22日，2016
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して2015年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2015年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・2015年度の被引用件数は61件で活発に引用されていた。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・Web of Science を用いた引用文献調査
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400字程度まで）※2015年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 専門家による外部評価は受けていない。公的な外部資金を受けて運営する研究所では期間により、中間および最終の専門家による評価があるが、大学の予算により運営されている本研究所では制度としてない。今後、外部から大型設備の補助を受けた場合、外部評価を受けることは考えられる。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2015年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 採択中 ・環境省「未来のあるべき社会・ライフスタイルを創造する技術イノベーション事業」（6000万円） ・受託研究（（株）サイオクス(50万円)） ・受託研究（（株）日立製作所(100万円)） 応募したもの ・文部科学省「省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発」（1000万円） ・科研費1件(400万円)
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・任期付きではあるが欠員が補充され研究活動が活発になった ・バンデグラフ加速器の老朽化対策のひとつとして偏向電磁石用電源改良のための予算申請を行い認められた。	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・2016年度中に偏向電磁石用電源の老朽化対策を実施する。

【この基準の大学評価】

イオンビーム工学研究所ではシンポジウムを中心に、公開セミナーや講習会開催への協力など幅広い活動を行ない、また、対外的に発表した研究成果も70件を超えており、こうした研究所としての活発な研究活動は十分評価できる。 論文等の研究成果に対して被引用件数が61件に上っていることは、高いレベルの社会的評価を受けているとことを示している。 外部資金の採択は、現在3件6,150万円に達しており、申請中の件数は文科省の資金に1件、科研費に1件となってい
--

る。今後、公的な大型の外部資金を受けるためには、外部からの組織評価が必要であるが、現段階ではそのための対応ができていない。外部から大型設備の補助を実現するために、ぜひ外部からの組織評価を受けられる体制作りを進めていただきたい。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

放射線取扱施設であるため、法令に基づいた厳格な運用を行っている。当研究所及び学外の放射線使用施設利用者（教員、学生）のために「放射線取扱講習会」を毎年実施し、放射線取扱についての知識及び安全教育を 80 人を目標に行っている。また国内外の学術論文誌への発表を奨励しており、使用者には「イオンビーム工学研究報告」への執筆を義務づけて研究水準を維持している。シンポジウムでは発表件数 15 件（招待講演者を含む）を目標にして開催し、学内外の交流を通じて学外者の意見を取り入れている。大学評価委員会の自己点検評価を通じての内部質保証も行っている。これらを PDCA サイクルに対応させると、イオンビーム工学研究所の運営委員会、小委員会、将来計画委員会において計画(P)（中・長期計画、放射線講習、シンポジウムの開催、セミナーの開催、研究所報告、その他）をたてて年度目標に反映させる。これらの実行(D)後に運営委員の意見のみならず大学評価室からの意見も参考にして評価(C)を行い、計画を練り直している(A)。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

イオンビーム工学研究所では質保証活動のために、運営委員会、小委員会、将来計画委員会が設けられ、それらが中心になって PDCA サイクルを回す体制が確立している。毎年シンポジウムを開催することを柱に、放射線取扱講習会を行うなど教育面での取り組みがみられ、質保証活動は適切に行われていると評価できる。

【大学評価総評】

概ねイオンビーム工学研究所の目的や理念に即した活発な活動を維持していると評価できる。シンポジウムなどを中心に社会に対する情報発信がなされ、被引用論文数などに見るように社会的な評価も高い。学生の教育や研究活動といった研究所としての役割を十分に果たしている。

今後は設備の老朽化への対策が大きな課題となると思われるが、大型の公的な外部資金への申請に期待したい。そのためにも、第三者による研究所活動の点検・評価体制の構築が望まれる。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

情報メディア教育研究センターでは、組織全体として継続的に定量的達成指標を示す姿勢が徹底されており、自己評価の仕組みや成果の達成度が第三者にとっても理解し易くする努力が顕著である。このことは高く評価できる。

技術革新がめまぐるしい中での適切な情報教育の重要性が益々高まることは明らかであり、同センターの教育研究の成果ができるだけ広く社会へ還元されることへの期待は大きい。この意味でも、教育・研究の多様化・グローバル化の視点をより強く意識した取り組みへの発展を期待する。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

高い評価をいただいた自己評価の仕組みと達成度の数値化による管理方法を 2015 年度も継続し、所長、副所長、3 名の専任教員からなる所員会議による 3 ヶ月毎の自己点検および運営委員会による半年毎の自己点検を行った。結果として期首に計画した 2015 年度のプロジェクト活動は、期中に追加されたプロジェクトもあり、期首の計画を上回る 104%を達成した。

教育・研究の多様化・グローバル化を意識した取り組みについては、主として専任教員が獲得した科研費により実施した。教育支援では心理学科におけるビデオを活用した反転学習、デザイン工学部におけるモバイル端末を活用したアクティブラーニングなどの新たな教育方法を支援した。また、研究面では大学教育用オープンソースソフトウェアの翻訳を通じ、スペインなど 3 ヶ国の研究者らとグローバルなプロジェクトを実施できた。これらの成果は国内外の学会への論文投稿およびセンター主催のシンポジウムを通じて社会還元を行った。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ・情報メディア教育研究センターシンポジウム(3 月 10 日、小金井キャンパス、IT を活用した新たな教育方法の実践、13 名の発表者による 8 件の報告、参加者 60 名) ・情報メディア教育研究センター研究プロジェクト (25 プロジェクト)
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ http://www.media.hosei.ac.jp/symp2016/ ・ http://www.media.hosei.ac.jp/research/project_2015/
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ・情報メディア教育研究センター研究報告(Vol. 29、2015 ISSN 1882-7594) (13 件) ・公表論文は多数になるため根拠資料を参照 (51 件)
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ http://www.media.hosei.ac.jp/vol29/ ・ http://www.media.hosei.ac.jp/research/paper_2015/
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・情報メディア教育研究センター研究報告 ページビュー数 12,600 (参考：2014 年度 12,467)
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・情報メディア教育研究センターWeb サイトアクセスログ

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 学外の有識者による外部評価は実現できていないが、所長、副所長、3 名の専任教員といったセンター内部の教員が所員会議を毎月開催し、研究活動に関して Plan、Do、Action を行い、センター外部の教員が 6 名含まれる運営委員会がその研究活動を年 2 回の自己点検プロセスとして Check することによって、運営委員会が第三者評価機関と同等の役割を果たしている。また、年度末に開始された本センター主催のシンポジウムを通じて本センターの研究成果が学外の参加者に報告されている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ 2015 年度中期目標・年度目標達成状況報告書に添付した 2015 年度自己点検
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 ・ 採択を受けた科研費：基盤(B) 1 件（4,468 千円）、基盤(C) 2 件（3,640 千円、500 千円）
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ 平成 27 年度科研費交付申請書

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・ 特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・ 特になし

【この基準の大学評価】

情報メディア教育研究センターでは毎年継続的に充実した研究プロジェクトが行われていることは、高く評価できる。また研究報告が順調に蓄積され、1997 年以降の報告が Web 上で常時閲覧することができる状態になっており、特筆に値する。公表論文が多数であることも評価できる。総じて、研究活動と成果発表は充実していると言えるが、それに対する社会的評価が研究報告の総ページビュー数だけでは充分に把握できないので、ページビュー数の多かった研究報告を分析するなどの手法の検討が望まれる。年度末に開催しているシンポジウムによって、研究成果の報告を学外の参加者に対しても行っていることは、優れた取り組みである。科研費の採択を計 3 件受けていることも評価できる。

2 内部質保証

（１）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。
①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。
【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。 ・ 所長、副所長、専任研究員 3 名から構成される所員会議は 10 回開催された。うち 4 回は自己点検レビューを議題として含んでいる。 ・ 運営委員会は 7 回開催され、うち 2 回は自己点検レビューを議題として含んでいる。 ・ 3 月に主催したシンポジウムは学外への研究成果報告を通じた研究の質保証という役割を含んでいる。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

情報メディア教育研究センターでは、所長、副所長、専任研究員による所員会議で定期的に自己点検を行い、また所属の異なる教員もメンバーとなっている運営委員会でも定期的に自己点検を行っていることで、質保証活動は適切に実施されていると認めることができる。またシンポジウムの開催によって、研究活動の質保証も行っていることは、高く評価できる。

【大学評価総評】

情報メディア教育研究センターでは、これまで高く評価されてきた、組織全体として定量的達成指標を徹底して提示する姿勢を継続し、定期的な自己点検を行う委員会体制が効果的に機能し、高い水準のプロジェクト活動を維持している。そのことは特筆に値する。

時代が要請する、情報教育の重要性に応じた教育・研究の多様化・グローバル化を意識した取り組みについては、科研費を獲得した研究活動によって適切に実行されており、2015年度大学評価委員会による評価結果への対応は、充分になされている状況だと認められる。今後もますますそうした取り組みが充実し、その成果が適切に社会に還元されていくことが期待される。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

沖縄文化研究所において、「沖縄研究の中心的拠点としての地位を確立する」ことを、昨年度に引き続き中期的な戦略目標として掲げているのは妥当である。なお、内部質保証システムの構築に向けての対応としては、昨年度の段階では委員会を立ち上げるに至っていないとのこと、2015年度の実現が期待される。

なお、現状分析シートの「大学評価委員会の評価結果への対応」欄について、研究所の基本的な運営方針に関して記述するものとの認識から、2014 年度と同様の記述がなされている。この欄は評価結果に対し、改善に向けてどのような取り組みや検討がなされたのかについて記述することが求められており、次年度はこの点について具体的な記述をお願いしたい。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

短期であるか中長期であるかを問わず、「沖縄研究の中心的拠点としての地位を確立する」という戦略目標に変わりはない。2015 年度には、早稲田大学琉球沖縄研究所が閉鎖されたこともあり、外的状況として結果的にその目標は「達成」に近づいた。しかしこのことは同時に、当研究所の社会的責任がそれだけ増大したことを意味するとも認識している。

懸案の一つであった内部質保証委員会は、運営委員会の一部メンバー5 名からなる組織として 2015 年 7 月 28 日の運営委員会で発足を決定し、今年度の自己点検評価書の検討・作成及び承認など実質的活動を開始した。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- ・総合講座「沖縄を考える」（毎週開講、年間 28 回、4 単位）実施。受講学生約 500 名、一般市民聴講者毎回 50～70 名。
- ・沖縄映像祭 in TOKYO～終わらない戦後、NPO 法人「文化経済フォーラム」と共催。（2015 年 9 月 5～6 日開催）。参加者延べ約 250 名。
- ・日本映像民俗の会第 38 回大会 in TOKYO、日本映像民俗の会と共催。（2016 年 3 月 26～27 日）。参加者延べ 200 名。
- ・外間守善資料受け入れ。故・外間守善氏は法政大学名誉教授で本研究創設時の副所長。言語学を基盤とした広範な沖縄研究で知られた。受け入れは書籍約 300 冊、本人講演資料ファイルおよびアルバム類等多数。それらの整理は今後の課題であるが、同氏の著書を《外間守善文庫》として研究所に保存し、一部は開架図書として配架。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

- ・定期刊行物として『沖縄文化研究』43 号、『琉球の方言』40 号、「沖縄文化研究所所報」77 号および 78 号を刊行。
- ・叢書「沖縄を知る」シリーズの 1 冊として、屋嘉宗彦『沖縄自立の経済学』（七つ森書館）を刊行。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。

- ・いずれも 2015 年度末の刊行（「所報」を除く）であり、社会的評価が現れてくるのはこれからになると思われる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 恒常化された「沖縄研究関係研究所長会議」が 2015 年 7 月 18 日に那覇市で開催され、本研究所を含めて 6 大学が参集。相互に活動状況を報告し諸情報交換と相互評価を行った。法政大学沖縄文化研究所についてはおおむね好評価であった。また席上、文部科学省の「共同利用・共同研究拠点」への申請について、方法論としてどのようなアプローチがありうるかなどが話題になった。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。 ・科学研究費への応募状況は、所長・副所長・専任教員・兼任教員合計 8 名（総長および定年延長者を除く）のうち、継続 4 名、新規応募 4 名であった。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度科研費応募状況一覧

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・研究所事務部門の人件費支出増加（大学からの交付予算の実質的大幅削減）により、予定していた事業のうち実行不可能になったものがいくつかあった。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

本研究所の使命は、外部スタッフを巻き込んだ沖縄研究の推進、研究に有用な史資料の継続的受け入れと閲覧公開サービス、研究成果の学内外への公開・還元等々多岐にわたるが、それらを機能的・効率的に遂行するための人的ポテンシャル、特に専門的資料整理を含む事務部門のその貧弱さは、当事者としても目を覆うばかりの状況である。研究所が直面している組織的問題の所在は十分認識しているつもりであるが、現状では、創立以来半世紀近くにわたる当研究所の存在意義をいかに保持し続けるかに腐心しつつ、大学財政状況の好転を待つしかないのが率直なところである。

【この基準の大学評価】

2015 年度の研究・教育活動の実績として、沖縄文化研究所が毎週開講している総合講座「沖縄を考える」は履修学生約 500 名に加え、一般市民聴講者が毎回 50～70 名参加するなど、教育・啓蒙活動として高く評価される。さらに、「沖縄映像祭 in TOKYO～終わらない戦後」を NPO 法人「文化経済フォーラム」と、「日本映像民俗の会第 38 回大会 in TOKYO」を日本映像民俗の会と共催した。さらには、外間守善文庫の創設など、研究所の「資産」を増やす努力がなされている。 定期刊行物として『沖縄文化研究』43 号、『琉球の方言』40 号、「沖縄文化研究所所報」77 号および 78 号を、叢書「沖縄を知る」シリーズの 1 冊として屋嘉宗彦『沖縄自立の経済学』（七つ森書館）が刊行されていることは評価できる。これらの刊行物について今後社会的な評価がなされることを期待する。 8 名（うち新規 4 名）の研究者が科学研究費に応募していることは高く評価できる。
--

2 内部質保証

（１）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。
①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。
【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※簡条書きで記入。 適切に活動している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

沖縄文化研究所の課題の一つであった内部質保証委員会が、運営委員会の一部メンバー5名からなる組織として 2015 年 7 月 28 日の運営委員会で発足しており、評価できる。今後の活動に期待する。

【大学評価総評】

沖縄文化研究所の教育・研究活動は一定の水準を保っており高く評価される。自己点検・評価活動についても、新たに内部質保証委員会が発足したことは評価されるものの、その活動はまだ十分とは言えず、さらなる活動が望まれる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」に書かれている「沖縄研究の中心的拠点としての地位を確立する」という戦略目標は妥当である。「2015 年度には、早稲田大学琉球沖縄研究所が閉鎖されたこともあり、外的状況として結果的にその目標は『達成』に近づいた」との記述があるが、限られた専任所員数と予算の中での困難さを理解しながらも、沖縄文化研究所自体の活動でこの戦略目標の達成にさらに近づくことを期待したい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

スポーツ研究センターでは、これまでの自己点検・評価活動に対して、実現可能な目標に修正した上での確に事業を推進し、真摯に取り組んでいることがうかがわれ、この点は高く評価できる。今後は、内部質保証委員を拡充しながら、第三者評価も考慮し、チェック機能がよりよく働く仕組みを構築することを期待したい。さらに、このような実現可能な目標の設定と着実な実施を継続するとともに、社会的には、2020 年度のオリンピック・パラリンピックを控え、本領域に対する関係者・一般市民の関心が高まっていることから、外部資金の獲得等によって、よりその存在感が高められるよう、今後の社会的役割の向上にも期待したい。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

昨年度の評価において「外部資金の獲得等によって、よりその存在感が高められる」ことを期待する旨のコメントを受けた。そこで昨年度の科学研究費補助金の申請においては、センター所員が合同で申請する試みを実施した。また、「今後の社会的役割の向上にも期待したい」との助言に対し、2020 年のオリンピック・パラリンピックを見据えながら、本学体育会活動に対する積極的な情報提供・科学的サポート等の継続的な支援を今年度より新たに実施する予定である。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

2016 年 2 月 25 日、市ヶ谷キャンパスボナソワードタワー26F スカイホールに於いて、公開講座「オリンピックとメディア」を開催した。参加者は法政二中高、法政女子高、千代田区内の高校生、体育会、社会学部生、スポーツ健康学部生、自主マスコミ研究会、学者など約 80 名。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

・伊藤マモル

学会発表：「メンターの存在は大学生競技者を幸せにする一スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて」日本細菌学会（2016 年 3 月）

・荒井弘和

論文「Expected qualifications for external coaches in school-based extracurricular sports activities.」Journal of Educational and Social Research, 5, 53-60 (2015 年)

論文「The relationship between obtaining fecal occult blood test and beliefs regarding testing among Japanese.」Health Psychology and Behavioral Medicine, 3, 251-262. (2015 年)

論文「Potential external coaches' perceptions of facilitators and barriers for engaging in school-based extracurricular sports activities.」International Journal of Coaching Science, 10, 65-79. (2016 年)

論文「中高年期・高齢期を対象とした夫婦関係における効力感と主観的幸福感との関連」老年精神医学雑誌, 27, (2016 年)

論文「スポーツチームにおける「問題児」とのコミュニケーション」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 11-15. (2016 年)

論文「集団で楽しむエンターテイメントへの参加行動の変容ステージと参加に関する意志決定のバランスとの関連」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 17-23. (2016 年)

- 論文「ボート競技における艇のパフォーマンス向上のための声かけ方略」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 25-33. (2016 年)
- 論文「走運動における強度設定方法の相違が感情変化に与える影響」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 35-39. (2016 年)
- 論文「親が子どものスポーツ活動に参加することと地域におけるソーシャル・キャピタルとの関連—NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部の事例—」地域イノベーション, 8, 47-59. (2016 年)
- 論文「大学生を対象としたお土産購入に関連する要因の検討」地域イノベーション, 8, 61-73 (2016 年)
- 学会発表:「メンターの存在は大学生競技者を幸せにする—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて」日本体育学会 66 回大会 (2015 年 8 月)
- 学会発表:「交際相手のいる大学生競技者は幸せか?—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて—」日本健康心理学会第 28 回大会 (2015 年 9 月)
- 学会発表:「大学生競技者を支えるメンタリングとは?—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて—」日本スポーツ心理学会 42 回大会 (2015 年 11 月)
- ・ 林容市

学会発表「青年期の垂直跳びにおける調整力と各就 学年代の運動量との関係」日本体育測定評価学会 (2016 年 2 月)
 - ・ 山田快

論文「女子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 5-10. (2016 年 3 月)

論文「大学生における自身の体力に対する評価と運動実施に対する価値観並びに要求が定期的スポーツ実施の意思に及ぼす影響」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 41-50. (2016 年 3 月)
 - ・ 中澤史

論文「スポーツ演習による受講生の社会的スキル向上効果に関する検討」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 1-4 (2016 年 3 月)
 - ・ 吉田康伸

論文「女子バレーボールにおける攻撃パターンについての研究」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 5-10. (2016 年 3 月)

学会発表「スポーツ演習による受講生の社会的スキル向上効果に関する一考察—開講学期および性別に着目して—」日本体育学会第 66 回大会 (2015 年 8 月)

話題提供「エゴグラムを用いたアスリート理解と心理支援」第 44 回日本交流分析学会中央研修会 2016 春 (2016 年 2 月)
 - ・ 越智英輔

論文「Importance of both fatness and aerobic fitness on metabolic syndrome risk in Japanese children.」PLOS ONE, 10(5), e0127400 (2015 年 6 月)

論文「Relationship between performance test and body composition/physical strength characteristic in sprint canoe and kayak paddlers」Open Access Journal of Sports Medicine, 6, 191-197 (2015 年 6 月)

論文「Activation of AMP-activated protein kinase induces expression of FoxO1, FoxO3, and myostatin after exercise-induced muscle damage.」Biochemical and Biophysical Research Communications, 466(3), 289-294 (2015 年 8 月)

論文「Differences of activation pattern and damage in elbow flexor muscle after isokinetic eccentric contractions.」Isokinetics and Exercise Science, 23(3), 169-175 (2015 年 8 月)

論文「Repeated bouts of fast velocity eccentric contractions induce atrophy of gastrocnemius muscle in rats.」Journal of Muscle Research and Cell Motility, 36(4-5), 317-27 (2015 年 10 月)

論文「小学校高学年における運動習慣・睡眠の重要性」, 運動とスポーツの科学, 21(1), 13-20 (2015 年 12 月)

論文「Effects of combined β -hydroxy- β -methylbutyrate (HMB) and whey protein ingestion on symptoms of eccentric exercise-induced muscle damage」Journal of the International Society of Sports Nutrition, 13(7) (2016 年 2 月)

論文「Increases in M-wave latency of biceps brachii after elbow flexor eccentric contractions in women」European Journal of Applied Physiology, 116(5), 939-46 (2016 年 3 月)
 - ・ 神和住純

論文「テニス競技力向上とテニスにおける生涯スポーツと健康について」法政大学スポーツ健康学研究, 7, 45-61 (2016 年 3 月)

・永木耕介

論文「柔道選手における心理的スキルの様相：柔道選手が重視する練習形態・方法からの検討」武道学研究, 48 (1), 1-10 (2015 年 9 月)

論文「An Examination of Judo Practitioners' Aggression and Knowledge about the Purpose of Judo」日本スポーツ教育学会第 35 回記念国際大会プロシーディング, 111 (2015 年 9 月)

学会発表「「柔の原理」体感をねらいとした柔道指導法の研究-回る動きの学習-」日本体育学会第 66 回大会・体育科教育学専門領域 (2015 年 8 月)

・山本浩

著作「スポーツアナウンサー～実況の真髄～」岩波書店 (2015 年 10 月)

論文「スポーツ界にジャーナリズムは必要」NPO 放送批評懇談会 GALAC, 221, 18-19 (2015 年 9 月)

・泉重樹

論文「スポーツ鍼灸委員会の取り組み スポーツ疾患に対する鍼灸のエビデンス」全日本鍼灸学会雑誌, 65 (4), 271-272, (2015 年)

論文「米国 Boise State University アメリカンフットボールチームにおけるスポーツ鍼灸の経験」全日本鍼灸学会雑誌, 65 (4), 265-70, (2015 年)

論文「現在の米国の鍼治療の一例」医道の日本, 74 (8), 152-159, (2015 年)

論文「アスレティックリハビリテーションと鍼灸治療—体幹の機能評価を中心として 3」トレーニングジャーナル, 37 (1), 43-50 (2015 年)

論文「スポーツ鍼灸委員会の取り組み スポーツに鍼灸ムーブメントを起こすために」全日本鍼灸学会雑誌, 65 (2), 107-108 (2015 年 5 月)

論文「スポーツ鍼灸委員会の取り組み 第 64 回全日本鍼灸学会学術大会を終えて」全日本鍼灸学会雑誌, 65 (3), 203-204 (2015 年 8 月)

論文「What did I learn in Boise? A 2014 sabbatical report」Bulletin of Sports and Health Studies Hosei University, 6, 23-29 (2015 年 9 月)

学会発表「刺鍼時の感覚表現と刺鍼時の強度および快不快感との関連の検討 第二報」第 64 回全日本鍼灸学会 学術大会 (2015 年 5 月)

学会発表「腰痛を有するスポーツ選手に対する鍼治療に関する文献レビュー」第 64 回全日本鍼灸学会 学術大会 (2015 年 5 月)

学会発表「米国におけるスポーツ鍼灸の経験 Boise State University での活動」第 64 回全日本鍼灸学会 学術大会 (2015 年 5 月)

学会発表「Effectiveness of 4-week loaded movement or body weight training in improving the thickness of the deep and superficial abdominal muscles in collegiate students.」European College of Sports Science (2015 年 6 月)

学会発表「米国におけるアスレティックトレーナー教育の経験：Boise State University, Athletic Training Program の例」第 4 回日本アスレティックトレーニング学会学術集会 (2015 年 7 月)

学会発表「大学ラグビー選手のアスレティックリハビリテーション・コンディショニングに鍼治療を用いた例」埼玉県アスレチック・リハビリテーション研究会 (2015 年 10 月)

学会発表「Effects of Acupuncture Treatment on Sports Injury of Collegiate Athletes in Japan.」Society for Acupuncture Research. (2015 年 11 月)

学会発表「バイオメカニクスの観点から見た腰痛に対する鍼灸のアプローチ」関東鍼灸学会 (2015 年 11 月)

学会発表「サッカー選手の経験年数による股関節外転筋力・内転筋力の検討.」体力科学, 64 (6), 658, (2015 年 12 月)

講演「米国アスレティックトレーナー教育の経験—Boise State University を例にして—」筑波大学スポーツアソシエーションセミナー (2015 年 4 月)

講演「米国アスレティックトレーナー教育の経験—Boise State University の例—」静岡県アスレティックトレーナー協議会講演 (2015 年 5 月)

講演「ボクシング選手のトレーニングとコンディショニングの注意点」千葉県ボクシング連盟指導者講習会 (2015 年 8 月)

講演「米国におけるスポーツ鍼灸の実践—Boise State University での鍼治療を中心に—」臨床スポーツ鍼灸研究会セミナー (セイリン株式会社後援) (2015 年 9 月)

・林園子

論文「法政大学スポーツ健康学部教職課程の現状と課題－「教育実習」と「保健体育科教育法」の評価に着目して」法政大学スポーツ健康学研究, 7, 21-29 (2016 年 3 月) 論文「小学生における身体活動量と体力向上の関係性」東京家政大学 研究紀要人文社会科学, 56(1) (2016 年 3 月) 学会発表「身体表現の教育と 人間形成に関する研究 (3)」日本体育学会第 66 回大会 (2015 年 8 月) ・高見京太 論文「本学学生の初年時における体格・体力について－2015 年度体力・形態測定の結果－」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 51-56 (2016 年 3 月) 学会発表「幼稚園児の体力水準を考慮した身体活動と遊びの関連性：横断研究」第 70 回日本体力医学会大会 (2015 年 9 月) 学会発表「High-impact, low-repetition jump training is effective for preventing bone loss in postmenopausal regular swimmers.」Sports Medicine Australia(2015 年 10 月) ・杉本龍勇 論文「大学生における自身の体力に対する評価と運動実施に対する価値観並びに要求が定期的スポーツ実施の意思に及ぼす影響」法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 51-56 (2016 年 3 月) 学会シンポジスト 「オリンピックに向けた個人競技のブランディング」第 8 回日本スポーツマネジメント学会 (2015 年 12 月) 監修「フィジカルトレーニング」footies! vol.29-vol.32 (2015 年、2016 年)
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・荒井弘和：28 件 ・泉重樹：2 件 ・杉本龍勇：1 件
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 各所員が個々で学会に所属して精力的に研究活動を行っており、学術論文や学会発表への評価を通じ、本センターに対する客観的評価も高まっていると推察している。また、本センター運営委員会と全所員参加のメール審議を通じてセンターの活動に対する自己点検評価を行うことにより、包括的・多角的な意見を踏まえた組織運営に勤しんでいる。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 「2015 年度中に応募した科研費等外部資金」 ・2016（平成 28）年度科研費：17 件 「2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金」 ・2016（平成 28）年度科研費 基礎研究 C：1 件（240 万円） ・科研費継続課題：6 件
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

スポーツ研究センターでは教育・研究活動の一環として、2016年2月に市ヶ谷キャンパスのスカイホールで開催された公開講座「オリンピックとメディア」が学内外から多くの参加者を集め、スポーツ健康学分野に対する社会的な関心の高さを証明した。多くの所員の研究活動の成果は、論文や学会報告として対外的に公表され、また、その成果は社会的に評価されたものも多いことは高く評価される。また、これら研究活動を支える、科研費等の外部資金も獲得されている。ただ、組織評価に関しては、所員による自己点検・評価にとどまっていると思われ、他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながるものとする。

スポーツ研究センターのホームページが2015年10月6日を最後に更新がされておらず、兼担所員の一覧も2015年度のままとなっていたが2016年7月末までに当該ホームページの更新が予定され対応が見込まれる。ホームページは重要な対外的広報ツールであり、刷新も含め定期的な更新を行うよう改善が見込まれる。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2015年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。
①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。
【2015年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。 2015年度より、内規により原則として前所長が内部質保証委員を担当している。 年間3回程度開催される運営委員会と全所員間のメール審議を通じ、全所員が参画して自己点検評価を行っている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2015年度より、内部質保証委員を内規により制定した。	

【この基準の大学評価】

スポーツ研究センターでは年3回程度開催されている運営委員会と、メール審議を利用した全所員参加による自己点検・評価活動の実施、内部質保証委員会の内規制定、前所長の内部質保証委員担当など、内部質保証活動が進められていることは評価される。しかし、内部質保証委員会の組織、機能、活動方針などが不明確であり、学部、大学院とも連携しながら、内部質保証活動の整備強化を図られたい。内部質保証委員会の活動の活性化は、在学生・卒業生から高い評価を受けているスポーツ健康学教育・研究の内容を学内外に広く知らしめる契機となるものと思料する。

【大学評価総評】

スポーツ研究センターにおいては、2016年度には、継続課題を含めて計7件の科研費を獲得しているが、さらなる外部資金の獲得に向けて、センター所員が合同で科研費補助金の申請を行う試みを実施したことは高く評価され、継続した努力に期待したい。

また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、本学体育会活動に対する積極的な情報提供・科学的サポートなどの支援を本年度より新たに実施するとしており、具体的な成果に期待する。この際には、スポーツ・サイエンス・インスティテュート（SSI）の教育・研究に対する連携強化も視野に入れた取り組みを進めて欲しい。

さらに、2015年10月にスポーツ庁が設立され、国としてのスポーツ振興策が強化されたことなど、本学のスポーツ健

康学教育・研究を進める上で、追い風が吹いている社会情勢にある。

そのような情勢を積極的にとらえて、国のスポーツ政策との協調をも視野に入れつつ科研費等の公的な外部資金や、今後、拡大すると予想される民間研究資金の獲得に期待したい。スポーツ研究センターとしては、それらを有効に活用することで、スポーツ科学に関する調査・研究、スポーツ施設を利用した実践活動、地域に密着した社会貢献活動などの活性化を実現してほしい。

スポーツ研究センターの主たる目的は、「スポーツ科学の調査および研究」、「体育施設の運営に関する事項を実施すること」とあり、所員の研究活動促進およびサポートが主たる役割である。学部・大学院教育への関与は含まず、設置の目的および役割分担がスポーツ健康学部、スポーツ健康学研究科、スポーツ・サイエンス・インスティテュートとは明確に異なっているが、教育の目的、役割分担が外部からは分かり難い印象がある。今後は、より積極的にスポーツ研究センターの設置趣旨を踏まえた活動の促進、さらにはそれらの情報発信を促進して行く必要がある。また、学生のスポーツ活動、健康維持増進のための指導助言を行うために、相互が補完し合えるような連携を深めていくことも重要である。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

限られた資源の中で、外部資金を積極的に獲得しながら継続的に研究活動を展開しており、かつシンポジウムやセミナーなどを通して、研究成果の社会還元にも積極的に取り組まれており、評価できる。

ただ、現代法研究所内における未整備のもの、研究所に対する外部からの組織評価（第三者評価等）体制、質保証委員会の設置などは、できるだけ早く整備されることを期待している。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

引き続き、定期刊行物（叢書）の刊行を計画的におこない、現代法研究所の位置づけを確認し、シンポジウムやセミナーをふくめた活動内容等を積極的に内外に発信する施策等について運営委員会で検討し、HP のあり方をはじめとする発信体制整備等の実現に必要な人員の確保および予算の確保・配分をおこなっていきたい。

また今年度より運営委員会内に 3 名からなる所長から独立した質保証委員会を設置した。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

【2015 年度 研究プロジェクト】

- ・国際関係
「国境の内と外ーグローバル化時代における国際社会と国内社会の秩序形成をめぐる法・歴史・政治」
- ・社会法
「地方分権下における自治体議会」
- ・現代法システム
「一般社団法人および一般財団法人に関する法律の逐条研究」「現代社会における生命倫理の法制化をめぐる人権論の国際比較研究」「公的規制の法と政策ーネットワーク産業を中心に」「行政紛争の処理に関する適切な法の解明ー国家と個人の関係の現代的変容を背景として」
- ・都市法
「金融商品取引法の新潮流」「都市法改正に関する研究」「会社法と金融商品取引法との交錯とコーポレート・ガバナンス論の新展開」

【2015 年度セミナー】

於：法政大学 研究所会議室 3

- ・2015 年 4 月 18 日「独占禁止法の審査手続きの見直しに関する『内閣府懇談会報告書』及び公取委の対応について」
- ・2015 年 6 月 20 日「ガス事業の改革について」
- ・2015 年 9 月 14 日「内部統制に関する会社法と金商法の規制の交錯」
- ・2015 年 11 月 9 日「わが国における卵子提供体外受精の現状と問題点」
- ・2015 年 12 月 26 日「電波管理と競争政策」
- ・2016 年 1 月 27 日「生殖補助医療と人権」
- ・2016 年 2 月 18 日「第三者の関与する生殖医療ー医学的・倫理的側面」
- ・2016 年 3 月 24 日「電力・ガス取引等監視委員会の活動と課題」

【シンポジウム】

- ・2015 年 7 月 25 日～7 月 26 日

於：富士見坂校舎・外濠校舎 「市民と議員の条例づくり交流会議 議会改革の10年これまでとこれから、市民の視点・議員の論点」 ・2016年3月12日 於：日仏会館 「日仏における第三者の介入する生殖補助医療と法—誰の権利をどのように守るのか？」 ・2016年3月27日 於：BT26F A会議室 「市民と議員の条例づくり交流会議 議会を変える議員間討議」
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2015年度活動報告
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2015年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ・2015年度刊行 出版物 法政大学現代法研究所叢書第40号『境界線の法と政治』 中野勝郎 編著 発刊日：2016年3月15日 法政大学現代法研究所叢書第41号『金融商品取引法の新潮流』 柳明昌 編著 発刊日：2016年3月30日
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・法政大学現代法研究所叢書第40号『境界線の法と政治』 中野勝郎 編著 ・法政大学現代法研究所叢書第41号『金融商品取引法の新潮流』 柳明昌 編著
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して2015年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2015年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・刊行後まだ時間が経過していないこともあり、評価を定めることはできない。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400字程度まで）※2015年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 該当する組織評価はない。専任スタッフが充実した際に検討したい。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2015年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 ・2015年度 応募 科研費：10名 ・2015年度 採択 科研費：4名 ・2015年度 継続 科研費：13名
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・科研費応募状況一覧

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

現代法研究所の研究プロジェクトに関しては、国際関係、社会法、現代法システム、都市法に分かれて運営されており、概ね妥当である。また、セミナーは８件開催され、シンポジウムは２回開催されており、概ね妥当であると評価できる。

対外的に発表した研究成果として、法政大学現代法研究所叢書を定期的に発行する取り組みが挙げられる。刊行後まだ時間が経過していないこともあり、これまでのところ研究成果に対する社会的な評価は公にされていない。今後、研究成果への積極的な評価が寄せられることを期待したい。

研究所に対する外部からの組織評価はこれまでのところみられないが、今後専門スタッフが充実した際に行われることを期待したい。

科研費の応募・獲得状況については、応募は新規１０名、獲得は新規・継続をあわせて１７名にのぼる。評価できる状況といえる。

２ 内部質保証

（１）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

研究所の質向上については、運営委員会の規模や研究員、事務双方の組織体制の現状から個別の委員会を設けることはせずに、日常的に運営委員間の連絡を密にするとともに、３回の運営委員会で質向上について議論を重ねた。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

現代法研究所の内部質保証活動は、研究所の規模や組織体制の状況から個別の委員会は設けず運営委員会において行われていたが、2016 年度より独立した質保証委員会が設置されており、これは評価することができる。今後の活動に期待したい。

【大学評価総評】

現代法研究所における、2015 年度大学評価委員会による評価結果への対応状況については、定期刊行物の刊行、シンポジウム、セミナー等の活動を積極的に内外に発信したり、必要な人員の確保、予算の配分等が運営委員会において適切に検討されており、概ね妥当である。また今年度より、運営委員会から独立した質保証委員会を設置されたことも評価できる。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

能楽研究所が、学際的・国際的な能楽研究拠点にふさわしい体制を整えるために、定期的研究会の開催を始めとした研究成果の着実な蓄積、社会貢献の一環としてのデジタルアーカイブの資料群の整備や各種セミナーの開催などを含めて非常に意欲的な取り組みを日常的に続けている点は高く評価できる点である。こうした研究資源や研究活動の成果を、引き続き、国内、海外に積極的に発信していくことを大いに期待したい。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

研究所の日々の活動とその成果を十二分に評価していただけたことに感謝しつつ、2015 年度も研究拠点としての活動成果を国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で発信した。研究所単独ではなく、日本演劇学会と共催の「古典劇の現代上演」をテーマとする研究集会実施、国立能楽堂や慶應義塾大学ス道文庫との協力による相互に関連性のある展示など、広く外部と繋がる工夫をしている。ベルギーの演出家による英語の講演（通訳付き）の企画、建築学、音楽情報工学、ロボットデザイン等の研究者との研究協力など、新しい試みも始めている。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- 1) 英語版能楽事典編集のための国際研究集会 7 月 23、24 日 BT A 会議室（参加者のべ 59 名）
- 2) フランソワ・ラショウ教授講演「世界劇場—イエズス会士と日本の演劇に関する一考察」
7 月 24 日 BT A 会議室 能楽学会との共催。（参加者 44 名）
- 3) シンポジウム「わざ継承の歴史と現在—身体・記譜・共同体」9 月 13 日 S505（参加者 67 名）
- 4) 日本演劇学会秋の研究集会「古典劇の現代上演」 10 月 24、25 日 スカイホール
シンポジウム「古典演劇・伝統演劇の復元的上演はどこまで可能か」
パネルセッション「能の復元的上演の可能性—「能」を現代に蘇らせる手法—」
特別講演「バロック演劇における歌う身体」（以上、参加者のべ 204 名）
- 5) 資料展示「慶長文化の精華 光悦謡本の世界」 2 月 17 日～3 月 31 日 ※日・祝日休館
BT14 階 博物館展示室（参加者のべ 170 名）
- 6) 研究集会「縦断横断 光悦謡本」 2 月 27 日 スカイホール（参加者 80 名）
- 7) シンポジウム「近世大名の能道具が語るモノガタリ」 3 月 6 日 スカイホール（参加者 90 名）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ジャーナル 5 号

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

*研究所としての刊行物 <http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/>
<http://nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/nohgaku.html>

*専任所員の研究成果

山中玲子「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ」（『能楽研究』40 号）

「能〈通小町〉遡源」（『国語と国文学』93 巻 3 号）

「小書の呼称と池内信嘉」（『鍊仙』）

“Fraternizing with the Spirits in the Nō Plays Saigyō-zakura and Yamanba” (Ca’ Foscari, Japanese Studies *The Rethinking Nature in Japan: from Tradition to Modernity*) ほか

宮本圭造『能面を科学する』（共著、勉誠出版） 「面打井関考」（『能楽研究』40号） 「笛役者伊藤安中伝」（『国立能楽堂調査研究』10号） 「伏見稲荷大社御旅所の能舞台」（『朱』59号） 「一橋徳川家の能楽」（日本芸術文化振興会『一橋徳川家と能』）ほか
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・芸能史研究において最も権威ある学会誌『芸能史研究』の書評欄である「芸能史の書棚」に、2014 年度に研究所が刊行した三冊の能楽資料叢書『大蔵虎清問・風流伝書』『金春安住集』『秋田城介型付』が取り上げられ、「貴重な研究資料として学界に寄与する」として高く評価されているほか（2015 年 10 月刊の 211 号）、専任所員の 1 名が執筆した論文、およびシンポジウムの内容を収めた書籍が同誌の紹介欄に取り上げられている。個々の論文の引用状況は追いきれていないが、いくつか例を挙げるなら、ハンガリーのエトヴェシュ大学出版局で刊行された『Encontres with Japan』には、専任所員 1 名と兼担所員 1 名の著書がそれぞれ 1 本ずつ、ドイツで刊行された『Räume der Erscheinung und Transformation』には専任所員 2 名の論文がそれぞれ 3 本、1 本引用されている。また、国内では、日本美術史における最も権威ある学術誌『國華』の「特輯 能面」（上・下）（2015 年 1 月・6 月刊）には、専任 1 名の論文 7 本が引用されており、参照すべき業績として国内外で高く評価されていると言える。 ・日本経済新聞 2015 年 12 月 9 日朝刊「知の明日を築く」が能楽研究所を取り上げ、豊富な貴重資料や文理融合の所作研究、弘化勸進能の上演空間の再現、英語版能楽全書の編纂計画等を紹介している。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 外部評価は受けていないが、文部科学省の共同利用・共同研究拠点として毎年細かなチェックを受けている。特に 2015 年度にはアドバイザーの施設訪問があり、アドバイスを受けた。2013 年度からのスタートアップ支援の事後評価報告書を提出済みである。5 月中にヒアリングのうえ、評価が出る。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業～スタートアップ支援～」事後評価報告書
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 ・2015 年度中に応募した科研費等外部資金 学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開研究」（採択。140 万円＋学内予算 308 万円） 科研費基盤研究(B)「能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基礎研究」（研究代表者・山中玲子、採択。2016 年度 390 万円） 科研費基盤研究(A)「伝統芸能文楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究」（研究代表者・中川志信、採択。研究分担者・山中玲子ほか） ・2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金 科研費基盤研究(B)「能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究」（研究代表者・宮本圭造、2015 年度 220 万円）
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

能楽研究所は、2015 年度研究拠点の活動成果として、国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で国内外に発信したことは、そのプレゼンス向上にとって非常に有意義であり、高く評価できる。また、単独でなく各種の関係機関や団体、特に建築学、音楽情報工学、ロボットデザイン等の異分野の研究者と連携し、斬新な試みに意欲的にチャレンジしている点は、優れた取り組みであり今後の継続と進展を期待したい。

外部評価としては受けていないが、文部科学省の共同利用・共同研究拠点としてのチェックを毎年受けており適切である。

科研費等外部資金の応募・獲得状況において、関係者が科研費の基盤研究（A）、（B）を獲得しており、研究を推進する基盤とエネルギーになっていると考えられ、今後のさらなる研究の推進とその成果の国内外への発信を期待したい。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

専任所員と兼任所員は毎週研究遂行上の問題を話し合い、担当事務および研究開発センターとも密接な連絡をとりあって業務を進めている。

専任所員 2 名と 3 学部（文・デ工・国際文化）の教員から成る運営委員会（月 1 回開催）では、上記の研究活動や日常業務で生じる問題があれば報告し、対応策や改善策を討議している。また、外部機関との連携、社会還元等に関する取り組みやその成果についても報告をおこない、さらなる発展のためのアドバイス等を受けている。

2015 年度は、能楽研究所の「服部基金」の運用や基金取り崩しの可能性について、基金の委員会で決まった方針に対して研究所運営委員会から多くの疑義が出たため、再検討されることとなった。運営委員会が「質保証活動」の担い手として十分に機能していることを示す事例と考えている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所では運営委員会を月 1 回開催しており、研究所の運営に関する報告を行うとともにアドバイス等を受けており、適切に運営されている。「服部基金」の運用においても、運営委員会からの意見を踏まえ対策を審議しているのは評価できる。

【大学評価総評】

能楽研究所は、研究・教育活動実績として、国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で国内外に発信したことは、非常に有意義であり高く評価できる。各種関係機関や団体と連携し発表している研究成果は対外的に高く評価されている。また、芸能史研究や各種論文が学会誌や学術誌に掲載され高い評価を受けていることも優れた成果である。今後のさらなる発展を期待したい。

科研費等外部資金の応募・獲得状況は、関係者が科研費を獲得しており、高く評価できる。

質保証活動については、運営委員会を月 1 回開催しており適切に運営されている。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

日本統計研究所は官学連携の学側拠点組織として社会のニーズに沿った研究とその成果の還元に挑んでおり、小規模な組織であるが、十分な成果を上げ、社会貢献を果たしている。外部評価制度の継続的な活用により、さらなる飛躍を期待する。

なお、昨年度の指摘に基づき、現状分析シートにおいてワークショップやセミナーの実施状況について詳細に報告いただいたが、研究成果に対する社会的評価や外部からの組織評価などについても現状分析シートの記述をより具体的にしていただくと貴研究所のプレゼンスがさらに向上するのではないかとと思われる。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

国際ワークショップや自治体職員を対象とした統計セミナーについては、開催テーマも含めて開催情報を記載した。また、各研究所員（兼担）による公刊論文やそれぞれの所属学会等での報告については多岐・多数にのぼるため本シートでは研究所の刊行物による公開分にとどめている。なお、本研究所は、「統計分野での官学連携の学側の拠点」施設として研究活動を展開していることから、通常の査読雑誌への掲載点数による活動業績の評価よりは、研究成果を現実の政府統計の質の向上、統計システムの機能の改善に直接反映することを社会的貢献と位置づけている。研究成果については、近年世界の統計の新たな潮流として注目されている調査結果に含まれる欠損情報のデータ補間による統計データの質の改善や位置情報の統計活用に向けての政府統計側での取り組みに直接反映されている。また、学術的な引用ではないが公刊論文については地方自治体や日本経団連等の団体からも注目され、セミナー等への所員の派遣により、統計分野での専門研究所として実質的な意味で社会的に評価されている。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

(1) 国際ワークショップ

第 8 回 The Statistical System of the US Census and American Community Survey

2015 年 6 月 5 日 ボアソナード・タワー 25 階研究所会議室 5 （参加者 15 名）

第 9 回 Learn from the experience of US Economic Census

2015 年 12 月 7 日 ボアソナード・タワー 25 階研究所会議室 5 （参加者 23 名）

第 10 回 The Survey Methodology of US Population Census and American Community Survey

2016 年 3 月 17 日 ボアソナード・タワー 25 階研究所会議室 4 （参加者 16 名）

なお各回のワークショップ開催の前日（翌日）に総務省統計局において本研究所と共催による講演会を開催（毎回 50～60 名参加）、

(2) 自治体統計セミナー

第 2 回 自治体におけるオープンデータの取り組みと課題

2015 年 8 月 5 日 ボアソナード・タワースカイホール （参加者 53 名）

第 3 回 自治体における行政情報の統合利用と統計（総務省統計局・経済統計学会との共催）

2015 年 9 月 13 日 北海学園大学 （参加者 41 名）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

(1)『研究所報』 No. 46「19 世紀ドイツ営業統計史研究」2015. 8 No. 47「地方統計と GIS をめぐる現状と課題」2016. 1 (2)『統計研究参考資料』 No. 116「企業判断の情報特性と期待形成モデルの比較」2015. 8 (3)『オケージョナルペーパー』 No. 48「国勢調査町丁字データによる鉄道沿線駅のクラスタリングー常磐新線（つくば EX）を事例としてー」2015. 4 No. 49「鉄道新線開業の沿線人口への影響についてー平成 12、22 年国勢調査小地域（町丁字）データを用いた空間再集計ー」2015. 5 No. 50「経済センサスと国勢調査の統合データから見た地域の労働供給力と労働需要力についてー八王子市を事例とした町丁字別労働需給能力の計測ー」2015. 5 No. 51「『事業所統計調査試験調査報告（昭和 22 年 5 月 於千葉県木更津市）』について」2015. 9 No. 52「90 年代以降の人口の都心回帰に関する一考察ー人口移動 OD データによる地域特性分析ー」、2015. 9 No. 53「首都圏人口の都心回帰に見られる地域的特徴について」2015. 9 No. 54「人口の都心回帰期における都区人口移動の特徴についてー平成 12、22 年国勢調査の移動人口からー」2015. 11 No. 55「東京都区部への国内人口移動に見られる地域的特徴」2015. 11 No. 56「首都圏への国内移動に見られる移動元と移動先との地域的關係について」2015. 12 No. 57「東京 50 キロ圏から都区部への移動者の移動先選択に見られる規則性について」2016. 1 No. 58「小地域データから見た東京 23 区への移動者による移動先選択について（1）ー東京都の市郡部から都区部への移動ー」2016. 2 (4)『ディスカッションペーパー』 No. 8「産業別労働需給力から見た地域特性についてー経済センサスと国勢調査の統合データを用いた産業別従業者率の地域比較ー」2015. 6 No. 9「業務統計の作成論理から見たその構造」2015. 8 No. 10「地域レベル別人口移動データから見た都区部の地域特性」2015. 12 (いずれも Web で公開 http://www.hosei.ac.jp/toukei/syuppan.html) この他にも、研究所員は各自の研究成果を所属する学会において報告を行ない、海外のジャーナルも含め各学会誌等で公開している。	【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）	
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 研究所の出版物については論文等の参照の際の報告を特に義務づけてはいない。そのため具体的な引用件数は研究所では把握を行っていない。本研究所では、各兼担所員個人の制度化された業績の蓄積よりも、学界に対しては統計関連学会の新たな研究分野展開の契機となるような研究、報告、セッションの提案、またわが国の政府統計機関に対しては国際水準の統計データを作成、提供できるようなシステム構築や技術面での対応に関する各種助言を政府委員会等で行うことで研究成果を現実の統計行政へ反映させる活動を中心的に行っている。後者の近年の特筆すべき成果としては、政府統計調査の基盤情報としての事業所母集団データベース（日本版ビジネス・レジスター）の統計局による構築（平成 25 年度供用開始）などがある。	
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・本研究所の所員の具体的な社会貢献についての詳細は年次活動報告Ⅱ（7）を参照	
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）	
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 本研究所では 2 名の外部評価委員による外部評価をいただいている。 ・研究所で開催している国際ワークショップ、自治体職員を対象とした統計セミナー、研究所員の政府委員会等での学術専門委員としての政府統計の改善への参画、自治体等で開催されるセミナーでの報告といった研究成果の対外発信について高い評価 ・学内への統計情報の提供サービス面での貢献	

詳細は、下記根拠資料を参照されたい。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・外部評価委員による評価報告の詳細については年次活動報告Ⅴ（３）を参照
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 所員が研究代表者である科学研究費のみを記載 ①平成 27 年度日本学術振興会科学研究費（基盤(C) 課題番号 50287033)「経済センサスの情報充実及び精度向上のための技法開発」 320 万円 ②平成 27 年度日本学術振興会科学研究費（挑戦的萌芽 課題番号 90565300)「OTC 医薬品の広告表現が近くリスクを通して意思決定過程に与える影響」 260 万円 ③平成 28 年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究 B 交付内定)「開発途上国の持続的発展を支えるインフラストラクチャーの役割に関する経済理論研究」 兼但所員全員が科研費申請を行った。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2015（平成 27）年度法政大学公的研究費採択者一覧、2016（平成 28）年度公布内定一覧

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
社会的にも高く評価されている研究所としての活動を展開してきた。然しそれが査定に反映されず 2016 年度は他の付置研究所と比較しても特に大幅な割合での予算削減を求められることとなった。それに対する研究所活動面での見直し並びに新たな対応が求められている。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

限られた予算という厳しい制約の中で、業務を改めて洗い直し最大限の对外情報発信を行うことのできる方策を模索したい。
--

【この基準の大学評価】

日本統計研究所の研究活動として、3 回の国際ワークショップ、総務省統計局との共催による講演会 3 回、2 回の自治体統計セミナーや年 2 巻の『研究所報』などの出版物の刊行、所員が研究代表者である外部研究資金の獲得など、兼担所員 1 名が退職し現在 6 名の小規模組織であるものの、十分なプレゼンスを発揮していると言える。特記事項に、2016 年度大幅な予算削減が行われ、それに対する研究活動面での見直し並びに対応が求められているとある。すでに見直しをしている活動もあるようだが、具体的に研究活動にどのような影響があるのかを明らかにするとともに、それらを反映した重点事業の設定や外部研究資金の獲得などの対応策の検討が求められる。
--

2 内部質保証

（１）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。
①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。
【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】 ※箇条書きで記入。 ・本研究所は兼担所員 6 名という小規模組織であるため特に質保証委員会等の組織を設けてはいないが、運営委員会での討議を通じて研究活動内容の質保証をはかっている。 ・外部評価報告書において指摘された事項を研究の質保証に反映している。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

日本統計研究所は 2 名の外部評価委員による外部評価で、研究成果の対外発信について高い評価を得ており、研究活動についての客観的な評価を行っている点は優れた点であると判断される。

【大学評価総評】

日本統計研究所は、小規模な組織ではあるものの、国際ワークショップや講演会、自治体統計セミナー、出版物の刊行など、十分なプレゼンスを発揮していると言える。2016 年度大幅な予算削減にともない、八王子市を対象とするデータ購入経費を中心に大幅な見直しを行うなど、研究活動面での見直し並びに対応を行いつつある。厳しい財政状況の下、研究活動への影響は大きいものがあると思うが、公的資金による研究との積極的な連動など、効率化に努めていることは評価できる。重点事業の設定や外部研究資金の獲得など、対応策のさらなる検討を期待したい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

比較経済研究所に対しては、大学評価委員会からは特段の指摘はなされていない。2014 年度も、国内外の学会発表や国際査読付雑誌論文への掲載など、研究活動が積極的に行われており、評価できる。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

概ね高い評価を得ており、引き続き国際雑誌と国際学会を通じて研究活動の公表を積極的に進めるとともに、シンポジウムやセミナーなどの対外発信を続けたい。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

① 研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

【研究プロジェクト関連コンファレンス等】

・比較経済研究所国際コンファレンス

開催日：2015 年 11 月 15 日-16 日、開催場所：法政大学市ヶ谷キャンパス、参加者 25 名

テーマ：Asian Economy at the Crossroad: China, India, and ASEAN

コーディネーター：絵所孝紀（法政大学）、胥鵬（比較経済研究所所長）

招待討論者：石上悦朗（福岡大学）、丸川知雄（東京大学）加藤篤史（青山学院大学）

発表者：Hongzhong LIU 氏（Liaoning University）、田村晶子（法政大学）、胥鵬、武智一貴（法政大学）、藤田麻衣（ジェトロアジア経済研究所地域研究センター）、Nguyen Anh Thu（VNU University of Economics and Business）、渡邊真理子（学習院大学）、近藤章夫（法政大学）

・『国際競争力を高める企業の直接投資戦略と貿易』プロジェクト中間報告コンファレンス

開催日：2016 年 3 月 12 日、開催場所：法政大学市ヶ谷キャンパス、発表者 8 名、参加者 20 名。

・『金融市場における規制・制度の役割』プロジェクト中間報告コンファレンス

開催日：2016 年 3 月 12 日、開催場所：法政大学市ヶ谷キャンパス、発表者 4 名、参加者 15 名。

【講演会・セミナー等】

・第 32 回比較研公開講演会、

開催日：2016 年 6 月 16 日、開催場所：法政大学多摩キャンパス、参加者 100 名

比較研シリーズ「都市空間と産業集積の経済地理分析」出版記念

テーマ：東北地方における新産業の集積形成－航空機産業と医療機器産業を事例にして－

講演者：山本匡毅氏（山形大学人文学部）

・第 33 回比較研公開講演会

開催日：2016 年 10 月 21 日、開催場所：法政大学多摩キャンパス、参加者 120 名

テーマ：ポンコツだけど楽しいテレビの作り方～“弱者の競争戦略”の理論と実際…テレビ東京の場合～

講演者：高橋弘樹氏（株式会社テレビ東京）

・第 30 回比較研サロン

開催日：2015 年 6 月 19 日、開催場所：法政大学比較経済研究所、参加者 12 名

報告者：濱秋純哉（経済学部）

テーマ：「Intra-family division of inherited property and bequest motives: Empirical evidence from a survey on Japanese households（我が国の世帯内の遺産分割と遺産動機：アンケート調査を用いた実証分析）」

・第 31 回比較研サロン

開催日：2015 年 12 月 18 日、開催場所：法政大学比較経済研究所、参加者 15 名

報告者：酒井 正（経済学部） テーマ：「Informal Care and Working hours: A Meta-Regression Approach」 ・八王子市学園都市大学（いちょう塾） 開催日：2015 年 11 月 11 日、会場：学園都市センター 第 1 セミナー室 テーマ：「ライフサイクルにおける金融資産選択～年齢に応じた金融資産の選び方～」 講 師：高橋秀朋（比較研専任研究員） 【その他】 ・各共同研究プロジェクトにおいて実施されている研究会の詳細については、比較経済研究所「年次活動報告 2015 年度（平成 27 年度）」を参照のこと。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・比較経済研究所「年次活動報告 2015 年度（平成 27 年度）」 ※ホームページ上にて公表（http://www.hosei.ac.jp/ices/study/04.html）
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ・図書（共同研究比較研シリーズプロジェクトの成果）の刊行 法政大学比較経済研究所・馬場敏幸編『金型産業の技術形成と発展の諸様相：グローバル化と競争の中で（法政大学比較経済研究所 研究シリーズ 30）』日本評論社、2016 年 3 月 31 日刊。 ・英文ジャーナルの発行…比較研の英文紀要 “Journal of International Economic Studies”、No. 30、発行日：2016 年 2 月。6 本の論文を収録（特集論文 5 本、テーマ：Industry Studies and Economic Geography in East Asia、査読論文 1 本収録）。 ・各共同研究プロジェクトにおいて公表した研究成果については、比較経済研究所「年次活動報告 2015 年度（平成 27 年度）」を参照のこと。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・比較経済研究所「年次活動報告 2015 年度（平成 27 年度）」 ※ホームページ上にて公表（http://www.hosei.ac.jp/ices/study/04.html）
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・書評：法政大学比較経済研究所・近藤章夫編『都市空間と産業集積の経済地理分析』日本評論社（2015 年 2 月刊）、『経済地理学年報』Vol. 61、No. 4、pp. 132-136。 同書は『日経ビジネス』2015 年 8 月 10 日号でも取り上げられた。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・経済地理学会『経済地理学年報』Vol. 61、No. 4、pp. 132-136。 ・日経 BP 社『日経ビジネス』2015 年 8 月 10 日号、85p。
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 ・外部評価は隔年で実施しており、2015 年度に外部評価委員会を 2015 年 12 月 11 日ならびに 18 日に開催した。外部評価委員は小塚壮一郎氏（学習院大学法学部）と花枝英樹氏（中央大学総合政策学部）に依頼し、比較研の研究成果（書籍、英文ジャーナル）、年次活動報告、公的研究費採択状況の各資料をもとに、比較研中期目標・年度目標の達成状況について評価していただいた。すべての評価基準で A 以上の評価を受けた。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 ・2015 年度の科学研究費補助金への応募、4 件。採択 2 件。 ・2015 年度の科学研究費補助金の採択、12 件（研究所研究員が代表者のみ）。

内訳：基盤研究 B（一般）2 件（交付額 630 万円）、基盤研究 B（海外学術研究）3 件（交付額 1360 万円）、基盤研究 C 5 件（交付額 560 万円）、若手研究 B 2 件（交付額 120 万円）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・学内資料「2015（平成 27）年度法政大学公的研究費採択者一覧」

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

比較経済研究所では、コンファレンス・講演会・セミナー等が、定期的に開催され、特に講演会では多数の出席数を確保している等、活発な活動が見られるので、ホームページでそれらの内容（要約）の紹介を検討してはどうか。また、英文紀要が年度末に継続して発行されており、アジア諸国への適切な情報発信が行われていると評価できる。これらの成果に対し、書評による社会評価もなされている。

外部評価の取り組みについては、2 年に 1 度、第三者評価を適切に実施、高い評価を得ている。

外部資金については、科研費に 12 件採択されており、研究内容・方針が適切なことが評価されている。

以上の研究活動を通して、国内外の大学・研究機関との交流と大学院生など若手研究者の育成に寄与することが期待される。

2 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・内部質保証委員会：運営委員メンバー3 名——絵所（委員長）、近藤、胥
- ・質保証委員会によるプロジェクトに対する評価を運営委員会で報告・議論し、研究所の運営や専任所員と兼担プロジェクトの実施に反映させています。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

比較経済研究所では、運営委員会メンバー3 名により質保証委員会が構成されている。小規模の研究所では運営委員会メンバーと兼務せざるを得ないが、運営委員会と質保証委員会が相互に審議することにより、PDCA サイクルが機能するよう期待したい。

【大学評価総評】

比較経済研究所は国際比較の研究・調査をテーマに 30 年を超えた歴史のある研究機関として、国際専門誌・シンポジウム・セミナー等の研究は安定した高い評価を得ている。研究領域については、国内はもとより東アジア・東南アジアの諸

国を対象として、独創的な研究を進めてきている。

法政大学のグローバル化においてもアジア諸国からの留学生の増強を意図しており、海外研究機関ネットワークの拡充、研究活動・研究成果のより対外的な情報発信、大学院生・若手研究者の育成などを、より進めるよう望みたい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

イノベーション・マネジメント研究センターは、多くの所員が科研費を獲得し、質の高い研究活動と成果の公表が行われている点は、高く評価される。関係各省庁や民間団体からの外部資金の獲得による研究環境のさらなる充実を図り、研究助成金をも活用した国際シンポジウムやセミナーの開催、継続的な図書や資料の充実と公開など、継続的に社会に貢献していくことが期待される。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

1. 研究活動として行っている個人研究プロジェクトは一定の評価を得ており、今後も本プロジェクトを元に積極的に外部資金の獲得を目指す。なお、2015年度は民間企業から受託研究を獲得している。
2. シンポジウムやセミナーの開催及び学術雑誌や叢書の刊行等で外部に研究成果を積極的に公表していく。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

1 研究プロジェクト 15 件

- ①「産業クラスターの知的多様性とグローバリゼーション ―集合知経営の構築―」 洞口 治夫
- ②「ミクロ流通研究会（Ⅲ）」 矢作 敏行
- ③「環境マネジメント手法に関する研究」 北田 皓嗣
- ④「スタートアップ企業の創立、およびその後の発展プロセスにおける影響要因」 福田 淳児
- ⑤「地域活性化研究会」 木村 純子
- ⑥「日仏労働市場の比較」 奥西 好夫
- ⑦「企業家史研究会」 長谷川 直哉
- ⑧「CSR 研究会（企業と NP0 の協働―歴史、計量、事例による実証分析―）」 長谷川 直哉
- ⑨「スポーツチーム・マネジメント研究会」 荒井 弘和
- ⑩「ブランド・マネジメント研究会」 小川 孔輔
- ⑪「Where do Innovations Come From? A Case Study of Biopharmaceuticals」 シャオ・ジャ・イヨ
- ⑫「ロジスティクス・クラスター研究会」 李 瑞雪
- ⑬「プロスポーツ観戦者におけるチームとの関係性に関する研究」 井上 尊寛
- ⑭「事象アプローチによる会計ディスクロージャーの拡張」 坂上 学
- ⑮「消費者行動とマーケティング戦略研究会」 新倉 貴士

2 シンポジウム、セミナー等 8 件

①国際セミナー「日本の育種を世界へもっと発信しよう」【共催】

2015 年 6 月 16 日 法政大学 ボアソナード・タワー26 階 スカイホール

②「Startup Weekend HOSEI（起業体験イベント）」

2015 年 7 月 3 日～5 日 法政大学 ボアソナード・タワー26 階 スカイホール

③日本自動車工業会 大学キャンパス出張授業 2015【協力】

「自動車産業に従事して思うこと～経営トップが語る自動車産業の魅力～」

2015 年 10 月 22 日 法政大学 外濠校舎 4 階 S405 教室

④「Startup Weekend HOSEI uni2015 After Event」

2015 年 11 月 7 日～8 日 法政大学 ボアソナード・タワー25 階 研究所会議室 5

⑤国際セミナー「シンキング・プリファレンス ―リーダーシップへの影響とビジネスにおける

重要性ー」 Individual Thinking Preferences:Impact on Leadership and Why That Matters in Business 2015 年 12 月 21 日 法政大学 ボアソナード・タワー25 階 研究所会議室 5 ⑥国際シンポジウム「グローバル化するアカデミック・スピノフ」 2015 年 12 月 26 日 法政大学 ボアソナード・タワー26 階 スカイホール ⑦JFMA 新春セミナー・賀詞交換会 お花屋さん活性化セミナー 「農と食の流通を変える～花き流通は？」【共催】 2016 年 1 月 11 日 法政大学 ボアソナード・タワー26 階 スカイホール ⑧倉本長治・初夫文庫開設記念公開セミナー「店は客のためにある」 2016 年 3 月 18 日 法政大学 外濠校舎 6 階 薩埵ホール 3 公開講座 「企業家・教育者活動でたどる日本の学校経営一人づくりの先駆者に学ぶー」 2015 年 10 月 17 日、2015 年 11 月 14 日、2015 年 12 月 12 日 計 3 回 法政大学 ボアソナード・タワー25 階 研究所会議室 5
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 以下のサイトを参照。 ①研究プロジェクト (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/project.html) ②シンポジウム、セミナー等 (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/symposium-2.html) ③公開講座 (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/lecture.html)
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 1 学術雑誌 1 冊 イノベーション・マネジメント No.13 2 研究叢書 2 冊 ①企業家活動でたどるサステイナブル経営史ーCSR 経営の先駆者に学ぶー ②事象アプローチによる会計ディスクリージャーの拡張 3 ワーキングペーパー 10 件 ①No.162 ラインマネジャーの人事管理機能に関する研究レビュー ー英国等における人事管理のラインへの委譲に関する研究文脈に着目してー 佐野 嘉秀 15.04.01 ②No.163 理事会の計画機能と監視機能 梅津 亮子 15.05.28 ③No.164 Equilibrium Equity Price with Optimal Dividend Policy under Jump-Diffusion Processes Akira Yamazaki 15.07.09 ④No.165 楠 兼敬 オーラル・ヒストリー 松島 茂 編 15.07.14 ⑤No.166 高橋清八 オーラル・ヒストリー 松島 茂 編 16.02.08 ⑥No.167 小森 治 オーラル・ヒストリー 松島 茂 編 16.03.04 ⑦No.168 石井完治 オーラル・ヒストリー 松島 茂 編 16.03.22 ⑧No.169 市川英治 オーラル・ヒストリー 宇田川勝・四宮正親・真保智行 編 16.03.24 ⑨No.170 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター国際シンポジウム 「グローバル化するアカデミック・スピノフ」講演録 法政大学イノベーション・マネジメント研究センター 編 16.03.31 ⑩No.171 Collective Activities among Individual Agents for Cluster Development under the Hierarchical Business Structure Kyosuke Inagaki 16.03.31
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 以下のサイトを参照。 ①学術雑誌 (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html) ②研究叢書 (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/publication.html) ③ワーキングペーパー (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/working_paper.html)

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。 1. シリーズ公開講座『企業家・教育者活動でたどる日本の学校経営一人づくりの先駆者に学ぶ』には、有料ながら内外の研究者や大学院生の参加を得た。 2. 所員による研究書籍は、学会、学術雑誌等で書評を得ている。なお、確認できただけで、学会発表を含め 55 件に引用されている。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 特に第三者評価は受けていない。年 5 回の運営委員会を実施し、適正な運営を行う。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。 所員の科研費の応募は、定年延長者等の特段の事情を除き専任教員に義務付けている。2015 年度に応募した 2016 年度の科研費の獲得は、分担者、基金、補助金を含め所員 33 人中 24 人であり、40 件であった。 また、民間企業から受託研究を 1 件獲得した。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

法政大学として平成 26 年度に採択されたスーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」に基づき、当センターでも以下のような国際性の高い事業等に取り組む。 1. 英語による国際セミナーや国際シンポジウム等の実施。また、毎年実施しているビジネスプランコンテストでは、学生の英語による発表を行う。 2. 外国人客員研究員を受け入れ、研究報告会やセミナー等を実施する。
--

【この基準の大学評価】

イノベーション・マネジメント研究センターは 2015 年度、15 件の研究プロジェクト、8 件のシンポジウム・セミナー等、1 件の公開講座など多くの研究・教育活動実績があり、出版物や学会発表、書評等社会的評価なども十分である。また科研費等の外部資金の獲得状況は所員 33 名中 24 名により 40 件あり、質と量ともに高く評価できる。 今後は国際性の高い事業を企画するなど、大学のグローバル化への対応に配慮しながら社会に貢献していくことが期待される。
--

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

当センター独自のシステムではないが、大学から示された各種方針に基づき、年 5 回開催される運営委員会において内部質保証に関するシステムとして、自己点検・評価活動を履行している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

大学から示された各種方針に基づき、年間 5 回開催される運営委員会内で内部質保証に関する自己点検・評価活動が履行されていると記載されている。しかしながら、資料提出してもらった運営委員会の議事次第では、第 1 回と第 5 回に項目があるのみである。さらに充実した内部質保証活動が期待される。

【大学評価総評】

イノベーション・マネジメント研究センターは、多くの所員が科研費等の外部資金を獲得し、質や量ともに高い研究活動と成果の公表が行われている点で高く評価できる。今後は、国際性の高い事業を企画するなど、法政大学のグローバル化への対応に配慮しながら、より一層社会に貢献していくことが期待される。

また内部質保証についても、研究所運営主体とは異なった関係者による内部質保証を充実させ、より厳格な PDCA サイクルを機能させる取り組みにも期待したい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

地域研究センターは、大学付置研究所として外部資金獲得の努力が真摯に行われ、設立当初より各種の研究活動が継続的・積極的に行われてきたことは評価できる。2015 年度は私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の最終年度にあたり、これまでの研究成果の公刊が最重要目標となっている。これまでの諸活動の成果に基づき、充実した結果が期待される。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

地域研究センターでは、2014年度に引き続き、2015年度も運営委員会を年5回(4月、6月、9月、11月、2月)開催し、その中で質保証のための議論を行った。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 【シンポジウム及びセミナー】 a 地域創生シンポジウムの開催（2015 年 12 月 4 日） b 第 13 回国際シンポジウムの開催（2016 年 1 月 29 日） 【その他】 a 自治体トップ交流会の実施（2015 年 11 月 17 日） b 「社会貢献・課題解決教育」の授業実施（最終成果報告会：2016 年 2 月 2 日）
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ http://www.hosei-hurin.net/ へ掲載および各事業チラシ
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 a 紀要「地域イノベーション」Vol.8（2016 年 3 月発行） b 第 12 回国際シンポジウム報告書（2016 年 3 月発行） c 2014 年度社会貢献・課題解決教育成果報告集（2015 年度 9 月発行） d 2015 年度社会貢献・課題解決教育成果報告集（2016 年度 3 月発行） e 本研究センターの各研究員による出版物や学会発表
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・各冊子
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 検証プロセスとしては、年度初めと年度末に運営委員会にて議論しており、また年度途中においても、大きな企画を計画するときは、研究所の目的に沿ったものであるかどうかの検討がなされている。今後は評価される研究計画を提案して

外部資金を獲得する予定である。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・運営委員会議事録

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

- a 環境省「レジリエントシティ政策モデル」の開発とその実装化に関する研究
2013 年度～2015 年度、2015 年度事業額：9,642 千円
- b 文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「地域活性化のメカニズムと政策の研究」
2011 年度～2015 年度、2015 年度事業額：11,000 千円
- c 文部科学省 「気候変動適応技術社会実装プログラム」
2015 年度～2019 年度、2015 年度事業額：49,620 千円
- d 台東区 中小企業コンサルティングネットワーク
2015 年度受託額：178,200 円
- e 戸田市 共同研究「戸田市におけるクリエイティブ都市の可能性に関する研究」
2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日、受託額 1,300 千円
- f 広島県熊野町 事業協力に関する覚書締結
2016 年 1 月 19 日～2016 年 3 月 31 日、受託額 200 千円
- g 三鷹市 「民学産公」共同研究事業
2015 年 7 月 15 日～2016 年 2 月 12 日、受託額 200 千円（上限額）
- h 岡山県鏡野町 業務委託契約
2015 年 4 月 29 日～2015 年 12 月 25 日、受託額 5,000 千円
- i 北海道室蘭市 事業協力に関する協定書および覚書締結
2015 年 9 月 7 日～2016 年 3 月 31 日、受託額 400 千円
- j 「千代田学」事業
2015 年 4 月 1 日～2016 年 3 月 31 日、受託額 400 千円

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・各契約書・覚書等

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
昨年度は戦略的研究基盤形成支援事業の最終年度であったため、これまでの研究成果の総まとめを重要目標とした。そのための一つである出版物の刊行作業は順調に進んでいる。	1.1 ②

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

現在の内閣で「地域創生」が叫ばれているが、これは地域活性化に他ならない。当センターの持っている知財を投入し、地域活性に役立てたい。同時に、その間の研究成果を発表したい。
また、さらなる外部資金の獲得を行いたい。

【この基準の大学評価】

地域研究センターは、2015 年度に 2 件のシンポジウムおよびセミナー、2 件の関連する交流会や成果報告会を実施している。また紀要をはじめ 5 冊の研究成果報告を発行している。研究成果の社会的評価は明確ではないが、10 件の受託研究費等の外部資金を獲得している点は評価できる。研究センターに対する外部からの第三者評価は行われていないものの、外部資金の獲得状況から判断すると、評価は高いものと考えられる。

地域創生が叫ばれる現状では、今後は当該研究センターの持つノウハウや知的・人的財産などこれまでの成果等を十分

に活用しながら、より一層社会へ貢献していくことが期待される。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

運営委員会前に副所長ならびに所長との事前打合せを行い運営委員会の速やかな運営を実施し、また規程に基づき定期的に運営委員会を開催している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

地域研究センターでは、定期的開催される運営委員会の前に、所長と副所長が事前の打ち合わせを行い、規程に基づいたその後の運営委員会の中で、大学から示された各種方針に基づき、内部質保証に関する自己点検・評価活動が適切に実施されている。

【大学評価総評】

地域研究センターは、受託研究費等の外部資金を獲得しており、積極的に研究成果の公表が行われている点で評価できる。地域創生が叫ばれる現状では、今後とも当該研究センターの持つノウハウや知的・人的財産など、これまでの成果等を十分に活用しながら、より一層社会へ貢献していくことが期待される。また外部からの第三者評価を実施するなど、より厳格な PDCA サイクルを機能させる取り組みにも期待したい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

国際日本学研究所では、現在科研費プロジェクトを中心に各種研究活動が活発に行われており、また研究会やシンポジウムなども比較的高い頻度で開催されるなど、研究所として社会的役割を十分に果たしていると評価できる。他方で、科研費プロジェクトの中には、それらのテーマを客観的に見る限り、研究所の目的である「国際日本学の構築」とは関係が希薄と思われるものがあり、これらのプロジェクトが研究所の理念・目的をどの程度反映しているのかが必ずしも明確ではない。2014 年度の報告書の総評で、「個々のプロジェクトベースでの総括としてではなく、国際日本学研究所という組織を母体として展開される研究活動について、いわば第三者的な視座から検討されること」と指摘されたように、研究所の理念・目的に沿う研究プロジェクトを意識的に立ち上げる必要があるのではないかと。今後、当大学で研究所の更なる発展に向けて、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業や科研費基盤研究(A)クラスで国際日本学に密接な関連性を持った研究プロジェクトが立ち上がることを期待したい。最後になるが、SGU 採択を受け、本学の構想名である「サステナブル社会を構想する」ような研究プロジェクトを本研究所からも積極的に推進されることを期待する。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

大学評価委員会からは、各種研究活動が活発に行われている点は高く評価していただいたが、それらが必ずしも研究所の使命である「国際日本学の構築」と密接に関わっていないのではないかという指摘がなされ、研究所全体としてより大きなプロジェクトを立ち上げてほしいとの希望がだされた。また本学の基本的構想である「サステナブル社会を構想する」プロジェクトも期待されている。これをうけて本研究所としては、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に代わる私立大学研究ブランディング事業への対応を中心に、あわせて「法政大学憲章」にも沿った形での新たなプロジェクトの企画に取り組んでいる。具体的には「自然」「環境」「風土」「脱中心・地方創生」をキーワードにした総合プロジェクトで、エコ地域デザイン研究センターや地域研究センター等と連携しながら、まさに憲章にいう「地域から世界まで」を対象に、地球規模での「自然」「環境」をめぐる諸問題の解決を目指す実践知形成に取り組んでいる。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- ・公開講演会『欧州コレクションにおける日本の宗教画と「おふだ」が伝える江戸時代の信仰』。2015 年 7 月 28 日（火）法政大学九段校舎 3 階 第一会議室。チューリッヒ大学附属民族学博物館が所蔵するヴィルフリート・シュピンナー・コレクションを中心に、バジル・ホール・チェンパレンとベルナル・フランクによる日本の仏教美術品の収集の特徴が検討されるという、初の国際共同研究の成果公表の試みとなった。
- ・国際シンポジウム “Buddhist Japonisme: Negotiating the triangle of religion, art and nation”。2015 年 9 月 18 日（金）、19 日（土）。ジュネーブ民族学博物館（スイス）。本研究所公開のデータベース JBAE が欧州で有効に活用されていることが紹介されるとともに、在欧日本仏教美術コレクションの由来がこれまで以上に明らかにされ、今後の在欧日本仏教美術研究の新しい地平が示された。
- ・国際シンポジウム〈中心と周縁—搾取に抗う環境・自然〉。2015 年 11 月 21 日（土）－11 月 23 日（月）。アルザス・欧州日本学研究所。近現代の日本が自然との関係で直面する多様な問題を、日欧アジアからの 11 名の発表者の提題を軸に、学際的かつ国際的に論じた。
- ・環境・自然研究会ワークショップ。2016 年 3 月 22 日（火）、16 時 00 分から 18 時 00 分。法政大学研究所会議室 6。犬塚悠氏研究発表会〈環境とリズム：和辻哲郎の倫理学を手掛かりに〉。和辻哲学の環境概念の発展が詳細に跡づけられた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1406/Default.aspx (および成果をまとめた出版物あり) ・ http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1413/Default.aspx (および成果をまとめた出版物あり) ・ http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1427/Default.aspx ・ http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1440/Default.aspx
②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等)
※2015年度に刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者、内容等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等)の詳細を箇条書きで記入。 [出版物] ・ 本研究所の紀要に当たる研究成果報告集『国際日本学』13を2015年12月に刊行した。国際日本学に関する一般的な研究成果報告3本、前の戦略基盤形成事業の総括に当たる特集「〈日本意識〉の過去・現在・未来」に論文9本、小特集「日本意識と女性性」に論文2本、本研究所が公募している若手研究者論文採用研究1本、本研究所内の各研究アプローチ活動報告5本を掲載した。 ・ 『人文地理学への招待』(2015年5月、伊藤達也、環境問題への地理学のかかわりを概説した) ・ 『唐代史研究』18(2015年8月、小口雅史「在欧吐魯番出土文字資料の断片接続から見えるものーヘルシンキ・マンネル・ヘイム断片コレクションを主たる素材として」。国際日本学の手法で日本を相対化するとき必要な中国を中心とした東西交渉史を明らかにする資料を新たに学界に提供した。 ・ 『文学』16-6、2015年11月に、本研究所兼担所員による江戸時代の日本観に深く関わる4論文、1翻訳を掲載。(米家志乃布) 近世日本図の北辺・「蝦夷地」表象、(小林ふみ子) 近世日本の異国絵本の愉楽と陥穽、(横山泰子) 小人島はどこにあるのか、(田中優子) 異国の日本化、(小林ふみ子訳) 瀧和亭の花鳥画における日本表象 ロジーナ・バックランド。 ・ [学会発表] (“La médecine moderne et la pensée japonaise - le problème de la transplantation des organes”(2016年3月11日、コートジボワール、フェリックス・ウフエ・ボアニ大学、安孫子信の講演会で、現代医学と日本の思想について臓器移植の問題を中心に論じた)。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ 出版物本体および学会配布資料
③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)
※研究所の刊行物に対して2015年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2015年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)の詳細を箇条書きで記入。 ・ Dernieres Nouvelles d'Alsace 紙2015年12月5日付に、本研究所がアルザス・欧州日本学研究センターで開催した国際シンポジウム〈中心と周縁―搾取に抗う環境・自然〉についての安孫子信氏へのインタビュー記事が掲載された。 ・ 田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか 江戸から見る自意識の変遷』に対して、以下の書評ないし紹介記事が公表された。 『日本文学』2015年9月号書評掲載(評者井上泰至)。 月刊『地理』2015年8月号書評掲載(評者上杉和央)。 『歴史群像』No.131(2015.6)に紹介記事。 『出版ニュース』2015.5下旬号「ブックガイド」に紹介記事。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ 原紙および刊行物本体。
④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)
(～400字程度まで) ※2015年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 本研究所では、大規模プロジェクトであるCOE終了後は実施していない。その代替措置として内部評価の充実をはかってきた。ただし所員の負担を考え、新しい組織を作るのではなくて、毎月の運営委員会で相互評価・批判の学術的議論が行われるように工夫してきている。そこでは各研究チーム代表からなされる研究報告・研究成果報告に対して、毎回、その検証評価の議論を、議題上も別途明記して行っている。この方式は以前の大学評価委員会からも認めていただいたので引き続き充実させていきたい。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・ 運営委員会議事録。
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

・ 2015 年度中応募分（すべて科研費、7 件）

基盤研究 (A)、菱田雅晴、腐敗の政治経済学—中国腐敗の特質剔出と一般分析ツールの開発をめざして

基盤研究 (B)、小林ふみ子、江戸狂歌の地方展開と異分野交渉—代表的判者鹿都部真顔からみる

基盤研究 (B)、王敏、治水神・禹王信仰の日本及び東アジアにおける現存形態の総合的研究と現代的価値の考察

基盤研究 (B)、山中玲子、能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究

基盤研究 (C)、安孫子信、西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する

基盤研究 (C)、星野勉、人間と自然の関係態としての「風土」

若手研究 (B)、大塚紀弘、資料調査に基づく日本中世における印刷文化の基礎的研究

・ 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（すべて科研費、本研究所兼担所員を代表とするもの 11 件）

基盤研究 (B)、河内祥輔（代表）・小口雅史（分担）、古文書学的手法の創造による日本・西欧の社会秩序と封建制移行過程の比較研究、2,300,000 円

基盤研究 (B)、JOSEF KREINER（代表）・小口雅史（分担）、在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信、3,500,000 円

基盤研究 (C)、星野勉、異文化理解へ向けての「間の解釈学」の構築、500,000 円

基盤研究 (C)、米家志乃布、19 世紀におけるフロンティアの地域像に関する日露比較研究、900,000 円

基盤研究 (C)、川村湊、中南米日系移民および韓国系移民による文学に関する総合的研究、1,100,000 円

若手研究 (B)、大塚紀弘、日本中世前期における版本文化の基礎的研究、600,000 円

基盤研究 (B)、宮本圭造(代表)・山中玲子(分担)、能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究、2,200,000 円

基盤研究 (B)、小口雅史、物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究、4,000,000 円

基盤研究 (B)、小口雅史、諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史科学の革新、4,900,000 円

基盤研究 (C)、山本真鳥、太平洋現代芸術の人類学的研究—ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に、1,000,000 円

若手研究 (B)、鈴村裕輔、戦前の民間組織による対外的情報発信とその影響：英語版『東洋経済新報』を例として、800,000 円

・ 同上（すべて科研費、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするもの 6 件）

基盤研究 (B)、安孫子信、バルクソン『物質と記憶』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の確立、340,000 円

基盤研究 (S)、小口雅史、木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集、300,000 円

基盤研究 (A)、菱田雅晴、中国抗議型維権活動拡大のメカニズム：認知の解放・支配方式の転換・動員手段の多様化、500,000 円

基盤研究 (B)、山中玲子・宮本圭造、観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究、60,000 円

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ 研究開発センター提供資料による

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・ 第 2 回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞の公募・審査・顕彰	1.1 ①

(3) 現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・ 大型プロジェクト実施のための資金獲得…すでに 2015 年度大学評価委員会の評価にもあるとおり、本研究所構成メン

バーの研究活動は極めて活発で、科研費獲得額も標準を大きく超えているように思われる。ただしそれらを総合した国際日本学の構築は、なお道半ばの感がある。法政大学憲章を踏まえて、2017 年度の私立大学研究ブランディング事業への応募が強く求められているので、それに応じた態勢をしっかりと固めていきたい。

【この基準の大学評価】

国際日本学研究所は国際シンポジウムでの 2 度にわたる発表、環境・自然研究会のワークショップ開催に加え、初の国際共同研究成果公表の試みとなった公開講演会を開催するなど、高く評価される研究活動実績を残した。研究成果の公表も多く、それらに対する社会的な評価も高い。さらに科研費については、2015 年度中に 7 件の新規応募がなされ、継続分を含め本研究所兼担所員を代表とするものが 11 件、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするものが 6 件採択されるなど、構成員による外部資金獲得は極めて活発で、敬意に値する。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・質保証に関する委員会としては毎月開催される研究所の運営委員会を宛てている。
学際的・国際的と言う研究様態そのもの、そしてそれに依拠し形成されている研究組織そのものが質保証のシステムであるといえる。具体的には、研究組織内では、アプローチ代表が、研究会等の報告を運営委員会で行い、別のアプローチ代表や兼担所員より、指摘やアドバイス等を受けるといった形式がとられている。また年度末には、文科省採択研究事業の総括の会を実施している。
また毎月の運営委員会、年度末の総括の会の形で、各教員が積極的に参加して機能するように工夫している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・第 1 回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞の創設および記念講演会の実施。 この賞は、ヨーゼフ・クライナー博士の学問的業績を顕彰すると同時に、海外での優れた日本学研究者を奨励し、「国際日本学」の発展に資することを目的として設けたものである。幸い多数の論文の応募があり、本研究所の世界における知名度をより高めることができた。また受賞者には田中総長より直接賞状を手渡ししていただき、記念講演も開催できた。この記念講演には国内外各界からの聴講者も多数あった。	2.1 ①

【この基準の大学評価】

国際日本学研究所では第三者評価への代替措置として、内部評価の充実をはかってきたことが、実質的な質保証活動となっている。毎月の運営委員会で、各研究チーム代表からなされる研究報告・研究成果報告に対して、相互評価・批判の学術的議論が行われるように工夫している点は評価できる。国際日本学研究所規程第 2 条にある「国際日本学研究所の構築と推進」について、さらに議論、検討を深めることを期待したい。

【大学評価総評】

国際日本学研究所の研究員が、総じて個々の専門的な研究活動を積極的に行っている点は極めて高く評価されるが、必ずしも「国際日本学研究所の構築と推進」という規程に掲げられている目標に直接結び付いていないように思われる。

「2015 年度大学評価結果総評」にある「研究所の理念・目的に沿う研究プロジェクトを意識的に立ち上げる必要があるのではないか」という指摘に対して、「2015 年度大学評価委員会の結果への対応状況」で「新たなプロジェクトの企画に取り組んでいる」と回答している。『(法政大学) 憲章にいう「地域から世界まで」を対象に、地球規模での「自然」「環境」をめぐる諸問題の解決を目指す実践知形成に取り組んでいる』という方向性の中で『国際日本学』をどう位置付けるのかを検討し、プロジェクトを早急に立ち上げるにより、研究所の理念・目的に沿う研究がさらに推進されることを期待し

たい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターでは、2013 年 6 月に採択された事業の遂行に向けて、量的・質的に活発な研究が進められていることは高く評価できる。外部からの組織評価について、現在は受けていないが、プロジェクトや研究成果がメディアに取り上げられるなど、研究活動は高い社会的評価を受けている。教育研究等環境において、「主要設備の老朽化がみられるので、競争的外部資金獲得により設備の充実を図る必要がある」との指摘があるが、科研費への積極的な応募がなされており、資金獲得の努力は評価できる。大学評価委員会の評価結果に対し、ホームページの改訂、新聞・テレビの取材対応など、迅速な対応がなされており、評価できる。組織の認知度の向上については、引き続き留意されたい。質保証の観点からも外部評価を受けることを強く希望する。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

当センターで実施している私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」の第 3 年度における研究を進めた。研究発表は、論文 45 件、著書 2 件、学会発 171 件となり、過去 5 年間の水準を維持した（詳細は、「1.1②対外的に発表した研究成果」に記述した）。教育研究環境を整備するため、外部資金獲得にも積極的に取り組んでいる（詳細は、1.1⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況）。グリーンテクノロジープロジェクト開始から 3 年経過し、2016 年度初頭に文科省の中間評価を受けることになっている。この中間評価に先立ち、2016 年 3 月に外部評価委員による第三者評価を受けた（詳細は、1.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等））。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

・プロジェクト

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」（2013 年度～）の第 3 年度の研究を実施した。

・グリーンテクノロジーセミナー

プロジェクト主催の基本テーマ横断セミナー。プロジェクト構成員の担当研究テーマの進捗状況の発表、およびその関連トピックに関する外部講師による講演と討論を行うことにより、プロジェクト構成員の相互理解を深め、また研究成果の相互検証を行っている。

第 5 回グリーンテクノロジーセミナー

日時：2015 年 4 月 22 日（水） 15：30～17：15

場所：法政大学小金井キャンパス 西館地下階 マルチメディアホール

講演者と題目：

講演 1 固体表面の水を操る

中島 章（東京工業大学大学院 理工学研究科 材料工学専攻 教授）

講演 2 長寿命の排ガス浄化触媒の開発を目指して

明石 孝也（法政大学 生命科学部 環境応用化学科 教授／

マイクロ・ナノテクノロジー研究センター 兼任研究員）

参加者数：67 名

第 6 回グリーンテクノロジーセミナー

日時：2015 年 8 月 21 日（金） 15：00～17：00

場所：法政大学小金井キャンパス 西館 2 階 W202

講演者と題目：

講演 1 電磁レオロジー流体とその先進テクノロジー

中野 政身（東北大学 流体科学研究所 流動創成研究部門 教授）

講演 2 MEMS 技術による電界共役流体マイクロ液圧源の開発と応用

金 俊完（東京工業大学 精密工学研究所 セキュアデバイス研究センター 准教授）

参加者数：50 名

第 7 回グリーンテクノロジーセミナー

日時：2015 年 11 月 18 日（水） 15：30～17：30

場所：法政大学小金井キャンパス 西館地下 1 階 マルチメディアホール

講演者と題目：

講演 1 マイクロマシニング技術が実現する膜輸送体の超高感度機能解析

渡邊 力也（東京大学大学院 工学系研究科 応用化学専攻 講師）

講演 2 細菌がもつ回転ナノマシンの作動機構解明を目指して

曾和 義幸（法政大学 生命科学部 生命機能学科 准教授／

マイクロ・ナノテクノロジー研究センター 兼任研究員）

参加者数：33 名

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ホームページ・セミナーのお知らせ（<http://www.hosei.ac.jp/nano/seminar.html>）

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

・学術雑誌掲載論文

緒方 啓典

- 1) Z. Wang, H. Ogata, S. Morimoto, M. Fujishige, K. Takeuchi, Y. Hashimoto, M. Endo, “High temperature-induced growth of graphite whiskers from fullerene waste soot”, Carbon, **90** (2015)154-159.
- 2) Z. Wang, H. Ogata, S. Morimoto, M. Fujishige, K. Takeuchi, H. Muramatsu, T. Hayashi, Josue Ortiz-Medina, Mohd Zamri Mohd Yusop, Masaki Tanemura, Mauricio Terrones, Yoshio Hashimoto and Endo Morinobu, “Microwave plasma-induced graphene-sheet fibers from waste coffee grounds”, J. Mater. Chem. A, **3** (2015) 14545-14549.
- 3) Z. Wang, H. Ogata, S. Morimoto, J. Ortiz-Medina, M. Fujishige, K. Takeuchi, H. Muramatsu, T. Hayashi, Mauricio Terrones, Yoshio Hashimoto, Morinobu Endo, “Valorizing Rice Husks to Synthesize Nanocarbons by Microwaves Plasma Irradiation: From Graphene and Carbon nanotube to Graphenated Carbon Nanotubes”, Carbon **94** (2015) 479–484.
- 4) 緒方 啓典, 王 志朋, 森本 信吾, 橋本 佳男, “マイクロ波プラズマ CVD 法によるバイオマスを原料としたナノカーボンの合成”, Nanotech Japan Bulletin, **8**(2015)252-256.

水澤 直樹

- 1) Nagatomo, S., Nagai, Y., Aki, Y., Sakurai, H., Imai, K., Mizusawa, N., Ogura, T., Kitagawa, T., Nagai, M., “”, PLoS One, 10:e0135080, 2015 Aug 5.
- 2) Endo, K., Mizusawa, N., Shen, J.R., Yamada, M., Tomo, T., Komatsu, H., Kobayashi, M., Kobayashi, K., Wada, H., “Site-directed mutagenesis of amino acid residues of D1 protein interacting with phosphatidylglycerol affects the function of plastoquinone Q_B in photosystem II.”, Photosynth. Res., 2015 Apr 29.

曾和 義幸

- 1) Yamamoto, K., Tamai, R., Yamazaki, M., Inaba, T., Sowa, Y., Kawagishi, I. “Substrate-dependent dynamics of the multidrug efflux transporter AcrB of *Escherichia coli*.” Scientific Reports 6, Article number: 21909 (2016) doi:10.1038/srep21909.

栗山 一男

- 1) T. Nakamura, K. Kamioka, K. Kuriyama, K. Kushida, Q. Xu, M. Hasegawa, “Compensation Mechanism of DX-like Center in Neutron Transmutation Doped –GaN”, Solid State Communication, **205**, 1-3 (2015).
- 2) T. Yamashita, S. Kuwano, K. Kuriyama, K. Kushida, “Optical band gap of Li₈SiN₄ with disordered structure as a cathode material of lithium secondary batteries, Optical Band Gap and Bonding Character of Li₅SiN₃”, Physica Status Solidi (C), **12**, 845-848 (2015).
- 3) K. Kushida, K. Kuriyama, “Crystallization mechanism of sol-gel synthesized spinel LiMn₂O₄”, Physica Status Solidi (C), **12**,

549-552 (2015).

- 4) A. Shinkawa, Y. Shibasaki, T. Nishimura, C. Tanuma, and K. Kuriyama, Hydrogen ion-implantation induced low resistive layer in KNbO_3 bulk single crystal: Evaluation by elastic recoil detection analysis, Nucl. Instrum, Method Phys. Res. B, in press (2015). <掲載決定>
- 5) Y. Takeuchi, T. Yamashita, K. Kuriyama, and K. Kushida, Synthesis and charge-discharge performance of Li_5SiN_3 as a cathode material of lithium secondary batteries, J. Solid State Electrochemistry, in press (2016). Published online:28 January 2016. <掲載決定>

明石 孝也

- 1) 明石孝也, 勝山陽介, 松嶋景一郎, 「ポリマー支援ゾル-ゲル法と超臨界乾燥による多結晶 SiC 基板への HfO_2 多孔質厚膜の形成」耐火物, **67**, 276-280 (2015).
- 2) 明石孝也, 炭化ケイ素の高温酸化挙動と高温耐酸化性向上のための酸化物被覆, 耐火物, **67** 410-416 (2015).
- 3) 明石孝也, 中根貴行, 安藤祐人, 佐々木健太, 川島健, 「国内産鉱石および都市鉱山からの炭素熱還元-酸化法を用いた酸化ガリウムの分離・回収」, J. Soc. Inorg. Mater., Jpn., **22**, 295-300 (2015).
- 4) K. Kobayashi, K. Hirai, T.S. Suzuki, T. Uchikoshi, T. Akashi, Y. Sakka, “Sinterable powder fabrication of lanthanum silicate oxyapatite based on solid-state reaction method”, J. Ceram. Soc. Jpn., **123**, 274-279 (2015).
- 5) K. Kobayashi, T. Ikeda, S. Mihara, K. Hirai, T. Akashi, Y. Sakka, “Room-temperature synthesis of $\text{Bi}_4\text{Ge}_3\text{O}_{12}$ from aqueous solution”, Jap. J. Appl. Phys., **54**, 06FJ03 (2015).

中村 徹

- 1) T. Oikawa, Y. Saijyo, S. Kato, T. Mishima, T. Nakamura, “Formation of definite GaN p-n junction by Mg-ion implantation to n—GaN epitaxial layers grown on a high-quality free-standing GaN substrate”, Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B : Beam Interactions with Materials and Atoms, Vol.365, Part A, pp.168-170 , (2015).
- 2) H. Ohta, N. Kaneda, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Mishima, T. Nakamura, “Vertical GaN p-n Junction Diodes With High Breakdown Voltages Over 4 kV”, IEEE Electron Device Letters, VOL. 36, NO. 11, pp. 1180-1182, NOVEMBER 2015.
- 3) K. Nomoto, B. Song, Z. Hu, M. Zhu, M. Qi, N. Kaneda, T. Mishima, T. Nakamura, D. Jena, H. Xing, “1.7 kV and $0.55 \text{ m}\Omega \cdot \text{cm}^2$ GaN p-n Diodes on Bulk GaN Substrates with Avalanche Capability”, DOI .1109/LED.2015.2506638, IEEE Electron Device Letters, (2015).

佐藤 勉

- 1) M. L. Arrieta-Ortiz, C. Hafemeister, A. R. Bate, T. Chu, A. Greenfield, B. Shuster, S. N. Barry, M. Gallitto, B. Liu, T. Kacmarczyk, F. Santoriello, J. Chen, C. D. Rodrigues, T. Sato, D. Z. Rudner, A. Driks, R. Bonneau, P. Eichenberger, “An experimentally supported model of the *Bacillus subtilis* global transcriptional regulatory network”, Mol. Syst. Biol., **11**, 839 (2015).

山本 兼由

- 1) Yamamoto, K., Nakano, M., Ishihama, A., “Regulatory role of transcription factor SutR (YdcN) in sulfur utilization in *Escherichia coli*”, Microbiology, **161**(Pt 1):99-111(2015). (Editor’s choice)
- 2) Shimada, T., Takada, H., Yamamoto, K., Ishihama, A., “Expanded roles of two-component response regulator OmpR in *Escherichia coli*: genomic SELEX search for novel regulation targets”, Genes Cells, **20**(11):915-31. doi: 10.1111/gtc.12282 (2015).
- 3) Kinoshita-K., E., Kinoshita, E., Eguchi, Y., Yanagihara, S., Edahiro, K., Inoue, Y., Taniguchi, M., Yoshida, M., Yamamoto, K., Takahashi, H., Sawasaki, T., Utsumi, R., Koike, T. Functional characterization of the receiver domain for phosphorelay control in hybrid sensor kinases. PLoS One, **10**(7):e0132598. doi:10.1371/journal.pone.0132598(2015).
- 4) Yoshida, M., Ishihama, A., Yamamoto, K., “Crosstalk in promoter recognition between six NarL-family response regulators of *Escherichia coli* two-component system”, Genes Cells, **20**(7):601-12. doi: 10.1111/gtc.12251(2015).
- 5) Sakamoto, A., Terui, Y., Yoshida, T., Yamamoto, T., Suzuki, H., Yamamoto, K., Ishihama, A., Igarashi, K., and Kashiwagi, K., “Three Members of Polyamine Modulon under Oxidative Stress Conditions: Two Transcription Factors (SoxR and EmrR) and a Glutathione Synthetic Enzyme (GshA)”, PLoS One, **10**(4):e0124883. doi:10.1371/journal.pone.0124883(2015).
- 6) Urano, H., Umezawa, Y., Yamamoto, K., Ishihama, A., and Ogasawara, H., Cooperative regulation of the common target genes between hydrogen peroxide-response YedVW and copper-response CusSR in *Escherichia coli*”, Microbiology, **161**(Pt 4):729-38. doi: 10.1099/mic.0.000026 (2015).

田中 豊

- 1) 田中豊, ”IFPEX2014 油圧セミナー「油圧の魅力とその可能性に迫る」”, フルードパワーシステム (日本フルードパワーシステム学会誌), **46**, 20-22 (2015).
- 2) S. Sakama, Y. Tanaka, H. Goto, “Proposal on Mathematical Model for Bulk Modulus of Hydraulic Oil Containing Air Bubbles”,

Proceedings of the 6th International Conference on Manufacturing, Machine Design and Tribology (ICMDT2015), pp.482-483, (2015).

- 3) H. Kambe, S. Sakama, T. Togawa, Y. Tanaka, “Design of ER Braking Device for Micro-robot in Micromouse Contest”, Proceedings of the 6th International Conference on Manufacturing, Machine Design and Tribology (ICMDT2015), pp.480-481, (2015).
- 4) H. Harada, Y. Tanaka, “Stimulation Actuator for Walking Support: Two-point Threshold on Planta Pedis”, Sensors and Materials, **27**, 309-316 (2015).
- 5) 田中 豊, 油圧システムにおける省エネルギー技術の展望, ターボ機械, **43**, 303-307 (2015).
- 6) X. Fan, S. Sakama, T. Togawa, Y. Tanaka, “Design and Fabrication of ER Braking Device for Micromouse”, Proceedings of the 7th International Conference on Fluid Power and Mechatronics (FPM2015), IEEE No.CFP1599K-USB, 729-733 (2015). (Best Paper Award)
- 7) Sayako Sakama, Hiroyuki Goto, Yutaka Tanaka, Influence of Entrained Air on Effective Bulk Modulus of Hydraulic Fluid, Proceedings of 2015 Autumn Conference on Drive and Control, International Session A4-3, pp.87-92, 2015-10.
- 8) 田中 豊, 坂間清子, 回転形電磁モータとフルードパワーモータの性能比較, フルードパワー (日本フルードパワー工業会誌), **29** 巻、第 **4** 号、pp.7-10, 2015-10.
- 9) Sayako Sakama, Yutaka Tanaka, Hiroyuki Goto, Mathematical model for bulk modulus of hydraulic oil containing air bubbles, Bulletin of the JSME, Mechanical Engineering Journal, Vol.2, No.6, 2015-12.

御法川 学

- 1) 西口誠人, 井土久雄, 御法川学, 合流角度および分岐配管径が合流配管の流動励起振動に与える影響, 日本機械学会論文集, **81**(823), [DOI: 10.1299/transjsme.14-00413] 1-17 (2015) .
- 2) T. Hirano, K. Takahashi, G. Minorikawa, “Study on Performance Evaluation of Small Axial Fan”, Proceeding of the 13th Asian international conference on fluid machinery (AICFM13), No.052 (2015) .
- 3) T. Otsuya, J. Honda, K. Shiomi, G. Minorikawa, Y. Hamanaka, “Performance Evaluation of Passive Secondary Surveillance Radar for Small Aircraft Surveillance”, Proceedings of EuRAD2015 (2015).

辻田 星歩

- 1) T. Hirano, M. Takano, H. Tsujita, “Effect of double air injection on performance characteristics of centrifugal compressor”, Journal of Thermal Science, **24**, 10-16 (2015).
- 2) M. Kaneko, H. Tsujita, “Numerical Investigation of Influence of Tip Leakage Flow on Secondary Flow in Transonic Centrifugal Compressor at Design Condition”, Journal of Thermal Science, **24**, 117-122, 2015.
- 3) M. Kaneko, H. Tsujita, “Mechanism of Blockage Generation in Transonic Centrifugal Compressor at Design and Off-design Conditions”, Proceedings of ASME Turbo Expo 2015, GT2015-43126, (2015).
- 4) M. Kaneko, H. Tsujita, “Influences of Tip Leakage Flows on Flow Behavior in Transonic Centrifugal Compressor with Splitter Blade at Design Condition”, Proceedings of International Gas Turbine Congress 2015 Tokyo, 174, 2015-11.
- 5) A. Yonemura, M. Kaneko, H. Tsujita, “Numerical Analysis of Flow in Ultra Micro Centrifugal Compressor (Influence of Hub Configuration at Impeller Inlet)”, Proceedings of The 13th Asian International Conference on Fluid Machinery, AICFM13-076, 2015-9.

安田 彰

- 1) Y. Watanabe, S. Saikatsu, M. Yoshino, A. Yasuda, “Delta-sigma DAC with jitter-shaperreducing jitter noise”, Analog Integrated Circuits and Signal Processing (On line), DOI 10.1007/s10470-015-0600-5 (2015).
- 2) Haruka Matsuo, Yoshiki Motoyama, Akira Yasuda, 2015 IEEE International Future Energy Electronics Conference (IEEE IFEEEC 2015), Realization of High Precision Multi-Coils-Motor, 290214, Nov. 2015.

・図書

山本 兼由

- 1) 山本兼由, “大腸菌による高濃度のレアメタル回収”, バイオベース元素戦略—都市鉱山・海底鉱山に眠る貴金属・レアメタル回収技術— (小西康裕監修) (2015).

石垣 隆正

- 1) 石垣隆正, “プラズマ合成酸化チタンナノ粒子の液中分散性評価”, 粉体・微粒子分析 テクニック事例集, p.p.184-185, 技術情報協会(2015).

・学会発表

緒方 啓典

<招待講演>

- 1) 緒方 啓典, “有機バルクヘテロ接合太陽電池の活性層の局所構造の添加剤効果”, 第 25 回日本 MRS 年次大会, 横浜, 2015 年 12 月 9 日.

<一般講演>

- 1) 横倉瑛太、片岡洋右、緒方啓典, “分子動力学法による単層カーボンナノチューブに内包されたアルカリハライドの構造と物性評価”, 日本コンピュータ化学会 2015 年春季年会, 東京工業大学, 2015 年 5 月 29 日.
- 2) 佐藤豊、片岡洋右、緒方啓典, “分子動力学シミュレーションによるカーボンナノチューブに内包されたカルコゲンの構造および物性評価”, 日本コンピュータ化学会 2015 年春季年会, 東京工業大学, 2015 年 5 月 29 日.
- 3) 門間英毅、守吉佑介、緒方啓典、岡村達也、川島健, “ドロマイトー石灰水溶液系反応”, 無機マテリアル学会第 130 回講演会, 日本大学生産工学部, 2015 年 6 月 4 日.
- 4) H. Ogata, S. Maruyama, E. Inami, D. Katayama, H. Morikawa, “Characterization and properties of methyl ammonium lead halide perovskite films on mesoporous silica (MCM-41)”, The 5th International Symposium on Organic and Inorganic Electronic Materials and Related Nanotechnologies(EM-NANO 2015), TOKI MESSE Niigata Convention Center, Niigata, 2015 年 6 月 19 日.
- 5) H. Ogata, S. Kawano, “The Effect of Solvent Additives on the Phase Separation and Crystallinity in Organic Bulk Heterojunction Films Studied by Solid-State NMR”, Eighth International Conference on Molecular Electronics and Bioelectronics (M&BE8), Tower Hall Funabori, Tokyo, 2015 年 6 月 23 日.
- 6) Z. Wang, H. Ogata, S. Morimoto, M.Z.M. Yusop, M. Tanemura, Y. Hashimoto, M. Endo, “Synthesis of electrical characterization of coffee ground-derived graphene-sheet fibers by microwave plasma irradiation”, The Sixteenth International Conference on the Science and Application of Nanotubes, Nagoya University, Nagoya, 2015 年 6 月 29 日.
- 7) Y. Sano, H. Ogata, “Preparation and properties of the composites of hydroxylated single-walled carbon nanotubes and fullerenols”, The Sixteenth International Conference on the Science and Application of Nanotubes, Nagoya University, Nagoya, 2015 年 6 月 30 日.
- 8) E. Yokokura, Y. Kataoka, H. Ogata, “Local structure and properties of the alkali halide crystals encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations”, The Sixteenth International Conference on the Science and Application of Nanotubes, Nagoya University, Nagoya, 2015 年 6 月 30 日.
- 9) Y. Sato, Y. Kataoka, H. Ogata, “Structure and properties of the chalcogens encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations”, The Sixteenth International Conference on the Science and Application of Nanotubes, Nagoya University, Nagoya, 2015 年 6 月 30 日.
- 10) H. Yoshitake, E. Inami, Z. Wang, H. Ogata, “Electrocatalytic activities of Pt-based nanoparticles on carbon nanomaterials by one-step electrodeposition”, The Sixteenth International Conference on the Science and Application of Nanotubes, Nagoya University, Nagoya, 2015 年 7 月 2 日.
- 11) S. Kawano, H. Ogata, “Solid-State NMR Studies on the Aggregated Structures of Organic Bulk Heterojunction Solar Cells with Solvent Additives”, The 49th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Kitakyushu International Conference Center, Kokura, 2015 年 9 月 7 日.
- 12) Y. Sano, H. Ogata, “Structure and solid state properties of hydroxylated single-walled carbon nanotubes and related materials”, The 49th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Kitakyushu International Conference Center, Kokura, 2015 年 9 月 9 日.
- 13) Y. Sato, Y. Kataoka, H. Ogata, “Molecular structure of chalcogen encapsulated single-walled in carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations”, The 49th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Kitakyushu International Conference Center, Kokura, 2015 年 9 月 9 日.
- 14) E. Yokokura, Y. Kataoka, H. Ogata, “Molecular structure of the Alkali Halide encapsulated in single-walled carbon nanotubes by molecular dynamics simulations”, The 49th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Kitakyushu International Conference Center, Kokura, 2015 年 9 月 9 日.
- 15) H. Yoshitake, E. Inami, Z. Wang, H. Ogata, “Effects of electrodeposition conditions on the states of Pt-Ru nanoparticles on nanocarbon materials and their electrocatalytic activities for methanol oxidation(II)”, The 49th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Kitakyushu International Conference Center, Kokura, 2015 年 9 月 9 日.
- 16) 磯部朋香、森川弘理、稲見栄一、緒方啓典, “ $\text{HC}(\text{NH}_2)_2\text{PbI}_3$ を用いたハロゲン化鉛系ペロブスカイト型太陽電池への添加剤効果”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 13 日. (*1)

- 17) 佐野喜章, 緒方啓典, “固体 NMR 分光法による水酸化カーボンナノチューブのプロトンダイナミクスに関する研究”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 13 日.
- 18) 藤林真衣歩, 森川弘理, 稲見栄一, 緒方啓典, “ZnO ナノ構造体を電子輸送層に用いたペロブスカイト型太陽電池の作製および特性評価”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 13 日.
- 19) 稲見栄一, 森川弘理, 藤林真衣歩, 石垣隆正, 緒方啓典, “五酸化ニオブを用いたペロブスカイト太陽電池の下地層の作製条件と特性評価”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 13 日.
- 20) 吉竹晴彦, 稲見栄一, 王志朋, 緒方啓典, “One-step 電着法によるナノカーボン材料への Pt-Ru ナノ粒子の担持状態および電極触媒特性評価(II)”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 14 日.
- 21) 森川弘理, 藤林真衣歩, 稲見栄一, 緒方啓典, “二酸化ジルコニウムをドーブ材料として活用したペロブスカイト型太陽電池の下地層の作成”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 15 日. (*1)
- 22) 緒方啓典, 稲見栄一, 森川弘理, “有機金属ハロゲン化物ペロブスカイト薄膜における欠陥構造と分子運動性の分光学的研究”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 15 日.
- 23) 河野紗希, 緒方啓典, “固体 NMR 分光法によるバルクヘテロ接合有機薄膜太陽電池への添加剤効果の解析(III)”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 名古屋国際会議場, 2015 年 9 月 15 日.
- 24) 緒方啓典, 大塚祐一郎, 中村雅哉, “ピロン環を有する植物系バイオマス由来分子を用いた新規錯体の開発”, 第 9 回分子科学討論会 2015, 東京工業大学, 2015 年 9 月 19 日.
- 25) 桑名良明, 高橋りえ, 蛭子絵野, G.F. Gagabe, 稲見栄一, 大塚祐一郎, 中村雅哉, 緒方啓典, “ピロン環を有する植物系バイオマス由来分子を用いた電荷移動塩の構造と物性-(I)”, 第 9 回分子科学討論会 2015, 東京工業大学, 2015 年 9 月 19 日.
- 26) 蛭子絵野, 桑名良明, 高橋りえ, 井上和美, 稲見栄一, 大塚祐一郎, 中村雅哉, 緒方啓典, “植物系バイオマスを用いたピロン誘導体の合成と物性”, 第 9 回分子科学討論会 2015, 東京工業大学, 2015 年 9 月 19 日.
- 27) 高橋りえ, 桑名良明, 蛭子絵野, G.F. Gagabe, 稲見栄一, 大塚祐一郎, 中村雅哉, 緒方啓典, “ピロン環を有する植物系バイオマス由来分子を用いた電荷移動塩の構造と物性-(II)”, 第 9 回分子科学討論会 2015, 東京工業大学, 2015 年 9 月 19 日.
- 28) 王 志朋, 緒方 啓典, Gan Jet Hong Melvin, 森本 信吾, 藤重 雅嗣, 竹内 健司, 橋本 佳男, 遠藤 守信, “Synthesis and characterization of nanocarbons from waste sources by microwave plasma irradiation”, 第 42 回炭素材料学会年会, 関西大学千里山キャンパス, 大阪, 2016 年 12 月 2 日.
- 29) 横倉 瑛太, 片岡 洋右, 緒方 啓典, “単層カーボンナノチューブに内包されたヨウ化セシウムの局所構造および物性評価”, 第 25 回日本 MRS 年次大会, 横浜, 2015 年 12 月 9 日.
- 30) Hironori Ogata, Yuichiro Otsuka, Masaya Nakamura, “Development of new functional materials using a metabolic intermediate of lignin, 2-pyrone-4,6-dicarboxylic acid”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, , Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 15 日.
- 31) Yoshiaki Sano and Hironori Ogata, “Properties and dynamics in fullerene based-composites studied by solid-state NMR”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 16 日.
- 32) Saki Kawano and Hironori Ogata, “Solid-State NMR Studies on the Aggregated Structures of Organic Bulk Heterojunction Solar Cells with Solvent Additives”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 16 日.
- 33) Yoshiaki Kuwana, Rie Takahashi, Kaino Hiruko, Gene, Frederick, Gagabe, Yuichiro Otsuka, Masaya Nakamura and Hironori Ogata, “Structures and physical properties of charge-transfer complexes using a metabolic intermediate of lignin, 2-pyrone-4,6-dicarboxylic acid”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 16 日.
- 34) Rie Takahashi, Yoshiaki Kuwana, Kaino Hiruko, Yuichiro Otsuka, Masaya Nakamura and Hironori Ogata, “Structure and Electronic Properties of the Charge Transfer Complexes Based on 2-Pyrone-4,6-Dicarboxylic Acid and Similar Molecules”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 16 日.
- 35) Kaino Hiruko, Yoshiaki Kuwana, Rie Takahashi, Kazumi Inoue, Yuichiro Otsuka, Masaya Nakamura and Hironori Ogata, “Synthesis and Evaluation of 2-Pyrone-4,6-Dicarboxylic Acid Derivatives”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 16 日.
- 36) Eita Yokokura, Yousuke Kataoka and Hironori Ogata, “Local structures and properties of the alkali halide crystals encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations and solid-state NMR”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 17 日.

- 37) Yutaka. Sato, Yosuke Kataoka and Hironori. Ogata, “Structures and properties of chalcogen encapsulated carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 17 日.
- 38) Haruhiko Yoshitake, Eiichi Inami, Wang Zhipeng and Hironori. Ogata, “Electrocatalytic properties of Pt or Pt-Ru alloy nanoparticles on modified carbon nanomaterials by electrodeposition methods”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 18 日.
- 39) Hirotoshi Morikawa, Maiho Fujibayashi, Eiichi Inami and Hironori. Ogata, “Effect of the addition of ZrO₂ to compact-TiO₂ layer in the perovskite solar cells”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 19 日.
- 40) Maiho Fujibayashi, Hirotoshi Morikawa, Eiichi Inami and Hironori. Ogata, “Fabrication and properties of zinc oxide based perovskite solar cells”, The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2015, Honolulu, Hawaii, 2015 年 12 月 19 日.
- 41) Yoshiaki Sano and Hironori. Ogata, “Solid properties in hydroxylated carbon materials studied by ¹H NMR”, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, The University of Tokyo, Tokyo, 2015 年 2 月 21 日.
- 42) Saki Kawano and Hironori. Ogata, “Solid-State NMR Studies on the Aggregated Structures of Organic Bulk Heterojunction Solar Cells with Solvent Additives (III)”, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, The University of Tokyo, Tokyo, 2015 年 2 月 21 日.
- 43) Yutaka Sato, Eita Yokokura, Yosuke Kataoka and Hironori. Ogata, “Molecular structure of chalcogen encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations and First-Principles DFT calculations”, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, The University of Tokyo, Tokyo, 2015 年 2 月 21 日.
- 44) Eita Yokokura, Yutaka Sato, Yosuke Kataoka and Hironori. Ogata, “Local structure and properties of the cesium iodide crystals encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by molecular dynamics and First-Principles DFT calculations”, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, The University of Tokyo, Tokyo, 2015 年 2 月 21 日.
- 45) Haruhiko Yoshitake, Eiichi Inami, Zhipeng Wang and Hironori. Ogata, “Electrocatalytic properties toward methanol oxidation of Pt-based nanoparticles on surface-modified carbon nanomaterials”, The 50th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, The University of Tokyo, Tokyo, 2015 年 2 月 21 日.
- 46) 河野 紗希, 緒方 啓典, “固体 NMR 分光法によるバルクヘテロ接合有機薄膜太陽電池への添加剤効果の解析(IV)”, 第 63 回応用物理学会春季学術講演会, 東京工業大学, 東京, 2016 年 3 月 19 日.
- 47) 藤林 真衣歩, 稲見 栄一, 緒方 啓典, “ZnO ナノ構造体を電子輸送層に用いたペロブスカイト型太陽電池の作製および特性評価(II)”, 第 63 回応用物理学会春季学術講演会, 東京工業大学, 東京, 2016 年 3 月 19 日.
- 48) 稲見 栄一, 森川 弘理, 藤林 真衣歩, 石垣 隆正, 緒方 啓典, “ペロブスカイト太陽電池における光生成キャリア輸送特性の下地層依存性”, 第 63 回応用物理学会春季学術講演会, 東京工業大学, 東京, 2016 年 3 月 21 日.
- 49) 横倉 瑛太, 片岡 洋右, 緒方 啓典, “単層カーボンナノチューブに内包されたヨウ化セシウムの局所構造および物性評価”, 第 63 回応用物理学会春季学術講演会, 東京工業大学, 東京, 2016 年 3 月 21 日.
- 50) 吉竹 晴彦, 稲見 栄一, 王 志朋, 緒方 啓典, “ラジオ波酸素プラズマ処理により表面修飾されたナノカーボン材料上の担持 Pt ナノ粒子のメタノール酸化活性評価”, 第 63 回応用物理学会春季学術講演会, 東京工業大学, 東京, 2016 年 3 月 21 日.
- 51) 緒方 啓典, 稲見 栄一, “有機金属ハロゲン化物ペロブスカイト薄膜における欠陥構造と分子運動性の分光学的研究(II)”, 第 63 回応用物理学会春季学術講演会, 東京工業大学, 東京, 2016 年 3 月 22 日.
- 52) 緒方 啓典, 稲見 栄一, 森川 弘理, 藤林 真衣歩, “有機金属ハロゲン化物ペロブスカイト太陽電池を構成するヘテロ接合薄膜の欠陥構造と電子特性”, 日本化学会 第 96 春季年会 (2016), 同志社大学京田辺キャンパス, 京都, 2016 年 3 月 26 日.
- 53) 稲見 栄一, 森川 弘理, 藤林 真衣歩, 石垣 隆正, 緒方 啓典, “五酸化ニオブを下地層に用いたペロブスカイト太陽電池の特性向上”, 日本化学会 第 96 春季年会 (2016), 同志社大学京田辺キャンパス, 京都, 2016 年 3 月 26 日.

水澤 直樹

＜一般講演＞

- 1) Nagai, M., Nagai, Y., Sakurai, H., Mizusawa, N., Nagatomo, S., Yamamoto, Y., “Circular dichroism of cavity mutant hemoglobins (F8His→Gly) in either α or β subunits”, 15th International conference on chiroptical spectroscopy, P12, 2015 年 8 月 (北海道大学, 札幌市).

- 2) Nagatomo, S., Nagai, Y., Aki, Y., Sakurai, H., Imai, K., Mizusawa, N., Ogura, T., Kitagawa, T., Nagai, M., “Roles of Fe-His bonds of α and β subunits for cooperativity of human adult haemoglobin”, RIKEN Symposium “Metals in Biology” in Wako, P18, 2015 年 6 月 (理化学研究所, 和光市).
- 3) M. Nagai, Y. Nagai, H. Sakurai, N. Mizusawa, S. Nagatomo, Y. Yamamoto, “Circular dichroism of cavity mutant hemoglobins (F8His→Gly) in either α or β subunits”, 15th International conference on chiroptical spectroscopy, P12, (2015 年 8 月 30 日～9 月 3 日, 北海道大学コンファレンスホール, 札幌).

曾和 義幸

<招待講演>

- 1) 曾和義幸, “細菌べん毛モーターの顕微解析”, 日本顕微鏡学会-微生物の超微形態解析研究部会主催 2015 年研究会, 帝京平成大学池袋キャンパス (東京), 2015 年 11 月 20 日
- 2) 曾和義幸, “高性能バイオナノマシンの解析”, 第 28 回 HF-PPE シンポジウム, 富士通川崎 工場内岡田記念ホール (神奈川), 2015 年 9 月 25 日
- 3) 曾和義幸, Dynamics of the nano-rotary motor of bacterial flagella, 第 53 回日本生物物理学会年会, 金沢大学 (石川), 2015 年 9 月 13 日
- 4) 曾和義幸, “細菌べん毛モーターの 1 分子機能解析”, 日本顕微鏡学会第 71 回学術講演会, 京都国際会議場 (京都), 2015 年 5 月 15 日

<一般講演>

- 1) 曾和義幸, “細菌べん毛モーターの 1 分子機能解析”, 日本顕微鏡学会第 71 回学術講演会, 2015 年 5 月 15 日 (国立京都国際会館, 京都市).
- 2) 荒居謙太, 高橋優嘉, 伊藤政博, 曾和義幸, “2 種類のイオンで駆動するべん毛モーターのエネルギー変換機構の解析” 第 12 回 21 世紀大腸菌研究会, 2015 年 6 月 琵琶湖グランドホテル (滋賀).
- 3) 曾和義幸, “Dynamics of the nano-rotary motor of bacterial flagella”, 第 53 回日本生物物理学会年会, 2015 年 9 月 13 日 (金沢大学, 金沢市).
- 4) 荒居謙太, 高橋優嘉, 伊藤政博, 曾和義幸, “Analysis of bacterial flagellar rotation driven by dual ion” 第 53 回日本生物物理学会年会, 金沢大学 (石川), 2015 年 9 月.
- 5) 梅村徹, 曾和義幸, 川岸郁朗, “Identification of multimeric forms of FliG, a flagellar motor component for torque generation”, 第 53 回日本生物物理学会年会, 金沢大学 (石川), 2015 年 9 月.
- 6) 笠井大司, 曾和義幸, “光ピンセットを用いたべん毛モーター固定子ユニットの組み込み過程の解析”, 第 41 回 日本生体エネルギー研究会討論会, 2015 年 12 月 東京大学医学部一号館 (東京).
- 7) 笠井大司, 曾和義幸, “バクテリアべん毛モーターの固定子ユニット組み込み過程の解析, 生体運動班会議 2016, 2016 年 1 月 キャンパスプラザ京都 (京都).

栗山 一男

<一般講演>

- 1) Y. Takeuchi, T. Yamashita, K. Kuriyama, K. Kushida, “Synthesis and charge-discharge performance of Li_5SiN_3 as a cathode material of lithium secondary batteries”, 8th International Conference on Materials for Advanced Technologies, 2015 年 7 月 (Singapore).

明石 孝也

<一般講演>

- 1) 志村祐紀, 小林清, 明石孝也, 目義雄, 「酸化マグネシウムをドーピングしたオキシapatite 型ランタンシリケートの焼結体製造と電気伝導」, 粉体粉末冶金平成 27 年度春季大会, 2015-5, 早稲田大学 (東京都).
- 2) K. Hirai, K. Kobayashi, T.S. Suzuki, T. Uchikoshi, T. Akashi, Yoshio Sakka, “Fabrication process on highly sinterable powder of lanthanum silicate oxyapatite”, 14th International conference European Ceramic Society, Toledo, Spain, 2015-7.
- 3) 小倉知也, 明石孝也, 「 H_2O - H_2 - O_2 -Ar 混合ガス雰囲気中における Ni-YSZ 燃料極/YSZ 電解質界面抵抗のガス分圧依存性」, 日本セラミックス協会 関東支部, 長野市 (長野県), 2015-9.
- 4) 明石孝也, 中根貴行, 安藤祐人, 佐々木健太, 川島健, 「炭素熱還元-酸化法による国内産鉱石および都市鉱山からの酸化ガリウムの分離・回収」, 資源・素材 2015 (松山), 愛媛大学 (愛媛県), 2015-9.
- 5) T. Akashi, K. Kobiyama, “Preparation of SiC - ZrSiO_4 porous composites and its high temperature oxidation behavior”, Unified International Technical Conference on Refractories (UNITECR 2015), Vienna, Austria, 2015-9.
- 6) 志村祐紀, 小林清, 明石孝也, 目義雄, 「酸化マグネシウムをドーピングしたオキシapatite 型ランタンシリケートの焼結体製造と電気伝導」, 日本セラミックス協会第 28 回秋季シンポジウム, 2015-9, 富山大学 (富山県)

- 7) 平井拳也, 小林清, 鈴木達, 打越哲郎, 明石孝也, 目義雄, 「高配向性オキシアパタイト型ランタンシリケートの作製とその異方特性評価」, 日本セラミックス協会第 28 回秋季シンポジウム, 富山大学 (富山県), 2015-9.
- 8) 山口 拓人, 渡辺 博道, 明石 孝也, “カーボンナノチューブ黒体の開発”, 第 36 回日本熱物性シンポジウム, C141, (2015 年 10 月 19-21 日, 東北大学 片平キャンパス, 宮城県) .
- 9) K. Hirai, K. Kobayashi, T.S. Suzuki, T. Uchikoshi, T. Akashi, Y. Sakka, “Fabrication of c-axis oriented ceramics of lanthanum silicate oxyapatite by slip casting under strong magnetic field using highly sinterable powder”, STAC-9 & TOEO-9, 1PS-2, (2015/10/19-21, Epochal Tsukuba, Ibaraki, Japan)
- 10) Y. Shimura, K. Kobayashi, T. Akashi, K. Hirai, Y. Sakka, “Fabrication of the dense ceramics and the electrical conductivity of MgO-doped lanthanum silicate oxyapatite”, STAC-9 & TOEO-9, 1PS-2, (2015/10/19-21, Epochal Tsukuba, Ibaraki, Japan)
- 11) T. Ogura, T. Akashi, “Oxygen and water vapor partial pressure dependences of interface resistance at Ni-YSZ cermet anode/YSZ electrolyte”, STAC-9 & TOEO-9, 2PS-38, (2015/10/19-21, Epochal Tsukuba, Ibaraki, Japan)
- 12) 染谷直登, 明石孝也, 打越哲郎, “CeO₂/La_{0.7}Sr_{0.3}MnO₃ヘテロ凝集体からの多孔質電極の作製と YSZ 電解質との界面抵抗評価”, 第 54 回セラミックス基礎科学討論会, (2016 年 1 月 7-8 日, アバンセ グランデはがくれ, 佐賀県) .
- 13) 鈴木翔太, 明石孝也, 酒井裕香, “窒素気流中での炭素熱還元－酸化による 窒化ガリウムからの酸化ガリウム分離・回収”, 第 54 回セラミックス基礎科学討論会, (2016 年 1 月 7-8 日, アバンセ グランデはがくれ, 佐賀県) .

中村 徹

<招待講演>

- 1) T. Mishima, K. Nomoto, T. Nakamura, “Evaluation of GaN Epitaxial Layers Grown on Free-Standing GaN Substrates by Fabrications of p-n Diodes”, 2015 MRS Spring Meeting, San Francisco, DD6.11, CC2.01, (2015).
- 2) M. Yoshino, F. Horikiri, H. Ohta, T. Furuya, T. Mishima, Y. Yamamoto, T. Nakamura, “CeO₂ Dielectrics Passivation for GaN Diode with a Field Plate Termination”, E-MRS 2015 Fall Meeting, 2015年9月 (ワルシャワ, ポーランド) .

<一般講演>

- 1) Y. Saijo, H. Tsuge, S. Kato, T. Oikawa, T. Nishimura, T. Mishima, T. Nakamura, “Evaluation of highly Mg-ion-implanted GaN layers grown on free-standing GaN substrates”, 22nd International Conference on Ion Beam Analysis, IBA2015-Book-of-Abstracts-0612 PB-33, June, (2015).
- 2) 西城祐亮, 柘植博史, 加藤茂樹, 西村智明, 三島友義, 中村徹, “Mg イオン注入 GaN 層の微視的評価”, 第 76 回応用物理学会秋季学術講演会, 15a-4C-9, (2015).
- 3) 小田惟巧, 金田直樹, 山口世力, 大平圭介, 三島友義, 中村徹, “p 型 GaN 層の SiNx パッシベーション膜の検討”, 第76 回応用物理学会秋季学術講演会, 15a-4C-10, (2015).
- 4) 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 太田博, 三島友義, 中村徹, “自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードの初期耐圧不良解析 (1)”, 第76回応用物理学会秋季学術講演会, 16a-4C-4, (2015).
- 5) 成田好伸, 堀切文正, 吉田丈洋, 太田博, 三島友義, 中村徹, “自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードの初期耐圧不良解析 (2)”, 第76回応用物理学会秋季学術講演会, 16a-4C-5 (2015).
- 6) 太田博, 金田直樹, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, 中村徹, “4.7 kV 耐圧を有する自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオード”, 第76回応用物理学会秋季学術講演会, 16a-4C-6 (2015).
- 7) 金澤翔, 太田博, 金田直樹, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 三島友義, 中村徹, “GaN 基板上縦型 p-n 接合ダイオードにおけるメササイズの検討”, 第76回応用物理学会秋季学術講演会, 16a-4C-7 (2015).
- 8) Y. Shiina, T. Nishimura, T. Nakamura, “P - type Graphene on Ion - Implanted 4H - SiC by CF₄ Plasma Treatment”, International Conference on Silicon Carbide and Related Materials 2015, Th - P - 57, (2015).
- 9) K. Nomoto, M. Zhu, B. Song, Z. Hu, M. Qi*, R. Yan, V. Protasenko, E. Imhoff, J. Kuo, N. Kaneda, T. Mishima, T. Nakamura, “GaN-on-GaN p-n Power Diodes with 3.48 kV and 0.95 mΩ·cm²: A Record High Figure-of-Merit of 12.8 GW/cm²”, International Electron Devices Meeting, (Power and Compound Semiconductor Devices Advanced Compound RF and Power Devices 9.7), Washington DC, December 2015.
- 10) Yusuke Shiina, Tomoaki Nishimura, T. Nakamura, “P - type Graphene on Ion - Implanted 4H - SiC by CF₄ Plasma Treatment”, International Conference on Silicon Carbide and Related Materials 2015, 2015年10月 (ジャルディーニ・ナクソス, イタリア) .

佐藤 勉

<招待講演>

- 1) 佐藤勉, 安部公博“プロファージによる遺伝子再構築”, 第 38 回日本分子生物学会・第 88 回日本生化学会合同大会, (1W12-p-5), 神戸ポートピアアイランドホテル, 神戸, 2015 年 12 月 1 日.

<一般講演>

- 1) K. Abe, T. Takamatsu, Y. Kawano, K. Iwamoto, P. Eichenberger, T. Sato, “Rearrangement of *spsM*, aspoore polysaccharide synthesis gene in *Bacillus subtilis*, is mediated by the SPβ site-specific recombination factors, SprA and SprB”, 8th International Conference on Gram-Positive Microorganisms (2015 年 6 月 22 日, Italy) .
- 2) K. Abe, K. Tsuda, K. Iwamoto, T. Takamatsu, Y. Kawano, P. Eichenberger, T. Sato, “Developmentally-regulated prophage excisions reconstitute genes required for sporulation in spore-forming bacteria”, 8th International Conference on Gram-Positive Microorganisms (2015 年 6 月 23 日, Italy) .
- 3) K. Abe, Y. Kawano, K. Iwamoto, K. Arai, Y. Maruyama, T. Takamatsu, P. Eichenberger, T. Sato, “SPβ prophage-mediated DNA rearrangement is required for spore envelope polysaccharide synthesis in *Bacillus subtilis*”, Molecular Genetics of Bacteria and Phages Meeting (2015 年 8 月 6 日, University of Wisconsin-Madison USA).
- 4) 岩本敬人, 稲井貴志, 井之口紫苑, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌孢子最外層の役割”, グラム陽性菌ゲノム機能会議 (2015 年 8 月 27 日, 大津).
- 5) 高松拓夫, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌染色体上に存在する SPβ プロファージの integration/excision 機構”, グラム陽性菌ゲノム機能会議 (2015 年 8 月 27 日, 大津).
- 6) 津田嵩平, 安部公博, 佐藤勉, “有孢子細菌における遺伝子再構築機構の多様性”グラム陽性菌ゲノム機能会議 (2015 年 8 月 27 日, 大津).
- 7) 岩本敬人, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌孢子最外層の構築と役割”, 微生物研究会, (50) (2015 年 10 月 31 日, 明治大学, 生田).
- 8) 高松拓夫, 河野裕太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌 SPβ の integration/excision を担う LSR の機能解析”, 微生物研究会, (51) (2015 年 10 月 31 日, 明治大学, 生田).
- 9) 津田嵩平, 安部公博, 佐藤勉, “*Bacillus cereus* *gerE* の孢子形成期における再構築”, 微生物研究会, (52) (2015 年 10 月 31 日, 明治大学, 生田).
- 10) 後藤夏完, 岩本敬人, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌孢子的改良による水質管理”, 微生物研究会, (53) (2015 年 10 月 31 日, 明治大学, 生田).
- 11) 安部公博, 岩本敬人, 小林優生, 井之口紫苑, 佐藤勉, “枯草菌孢子ポリサッカライド層の解析”, 日本ゲノム微生物学会 (2016 年 3 月 4 日, 東京工業大学, すずかけ台).
- 12) 高松拓夫, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌 SPβ の Integration/Excision 機構および site-specific recombinase の機能解析”, 日本ゲノム微生物学会 (2016 年 3 月 4 日, 東京工業大学, すずかけ台).
- 13) 津田嵩平, 北村友美, 安部公博, 佐藤勉, “セレウス菌の孢子形成期における *gerE* 遺伝子の再構築”, 日本ゲノム微生物学会 (2016 年 3 月 4 日, 東京工業大学, すずかけ台).
- 14) 橋口優, 平島翔太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌孢子形成期における *sigK* 再構築に関与する *skr* 遺伝子”, 日本ゲノム微生物学会 (2016 年 3 月 4 日, 東京工業大学, すずかけ台).

山本 兼由

<招待講演>

- 1) Yamamoto, K., “Regulation of genome expression in *Escherichia coli*. India Institute of Science Seminar”, Bangalore, India, 2015.
- 2) 山本兼由 細菌の金属恒常性に関わるゲノム機能を用いた応用研究 第 14 回微生物研究会, 生田, 平成 27 年 10 月

<一般講演>

- 1) Yamanaka, Y., Winardhi, R. S., Yan, J., Kenney, L. J., Ishihama, A., Yamamoto, K., “Silencing of the Gad cluster genes by H-NS in *Escherichia coli*.”, BLAST XIII, Arizona, (Jun., 2015, USA) .
- 2) 近藤雄大, 大越芽生, 山本兼由, 杉山賢次, “リビング重合合法による PS-PCL-PS トリブロック共重合体の合成と生分解性評価”, 第 64 回高分子討論会 (平成 27 年 9 月, 仙台).
- 3) 山中幸, Yan Jie, Linda J Kenney, 石浜明, 山本兼由 細菌ゲノムの段階的高次構造形成”, 日本農芸化学会 2015 年度関東支部大会 (平成 27 年 9 月, 東京).
- 4) 吉多美祐, 石浜明, 山本兼由, “大腸菌二成分制御系レスポンスレギュレーター間の転写制御におけるクロストーク”, 第 14 回微生物研究会 (平成 27 年 10 月, 生田).
- 5) 小川綾乃, 小駒大輝, 小島文歌, 吉多美祐, 石浜明, 山本兼由, “大腸菌転写因子 *fimZ* による細胞形態変化とその制御”, 第 14 回微生物研究会 (平成 27 年 10 月, 生田).
- 6) 新野つばさ, 沼田理恵子, 吉多美祐, 小島溪晃, 石浜明, 山本兼由, “ビフィズス菌による大腸菌遺伝子発現制御”, 第 14 回微生物研究会 (平成 27 年 10 月, 生田).
- 7) 中村聖吾, 山中幸, 今関友哉, 山内えりか, 石浜明, 山本兼由, “大腸菌 H-NS による段階的核様体形成機構”, 第 14 回

微生物研究会（平成 27 年 10 月，生田）。

- 8) 小川綾乃，小駒大輝，石浜明，山本兼由，“大腸菌転写因子 FimZ による細胞形態変化とその制御機構”，第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会・合同大会（BMB2015）（平成 27 年 12 月，神戸）。
- 9) 新野つばさ，石浜明，山本兼由，“ビフィズス菌との相互作用で誘導される大腸菌遺伝子の同定と発現誘導機構”，第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会・合同大会（BMB2015）（平成 27 年 12 月，神戸）。
- 10) 木下恵美子，木下英司，江口陽子，吉多美祐，山本兼由，内海龍太郎，小池透，“ハイブリッドセンサーキナーゼのリン酸基リレー情報伝達機構におけるレシーバードメインの制御機能”，第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会・合同大会（BMB2015）（平成 27 年 12 月，神戸）。
- 11) 白土明子，伊藤貴弘，黒田阿友美，島本尚人，山本兼由，石浜明，中西義信 大腸菌二，“成分制御系 EnvZ-OmpR の宿主内持続感染と宿主傷害性における役割”第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会・合同大会（BMB2015）（平成 27 年 12 月，神戸）。
- 12) Yamanaka, Y., Winardhi, R.S. Yan, J., Kenney, J.L. Ishihama, A., Yamamoto, K., “Role of the linker between oligomerization and DNA-binding domains of H- NS in gene silencing.”, Asian Conference on Transcription 14 (ACT-14) (Dec., 2015, Singapore) .
- 13) Yoshida, M., Yamamoto, K., Ishihama, A., “. Cross-talk in transcriptional regulation between response regulators of *Escherichia coli* two- component system”, Asian Conference on Transcription 14 (ACT-14) (Dec., 2015, Singapore) .

石垣 隆正

<招待講演>

- 1) Takamasa Ishigaki, Asuka Watanabe, Tetsuo Uchikoshi, “Synthesis of Titanium oxide nanoparticles by laser ablation in aqueous solutions”, The 6th international symposium on plasma nanosciences, 26PM-2 (2015 年 8 月 28 日，北京大学，北京)。
- 2) 石垣隆正，中田祐介，米澤朋典，辻本吉廣，張晨寧，打越哲郎，“高温熱処理により可視光活性を示すニオブ添加酸化チタン光触媒”，第 54 回セラミックス基礎科学討論会，1A07 (2016 年 1 月 7 日，アバンセ，佐賀市)。

<一般講演>

- 1) F.Z. Dahmani, Y. Okamoto, D. Tsutsumi, T. Ishigaki, H. Koinuma, M. Sumiya, “Development of apparatus supplying hydrogen radical remotely to decompose SiCl₄ source”, The 5th Asia-Arab Sustainable Energy Workshop, 12p-PO-17 (2015 年 5 月 12 日，筑波大学，つくば市)。
- 2) D. Tsutsumi, M. Sumiya, Y. Okamoto, F.Z. Dahmani, T. Ishigaki, “Development of remote-type hydrogen radical generator by inductively coupled plasma to decompose SiCl₄ source”, The 5th Asia-Arab Sustainable Energy Workshop, 12p-PO-19 (2015 年 5 月 12 日，筑波大学，つくば市)。
- 3) 中田祐介，石垣隆正，辻本吉廣，張晨寧，打越哲郎，“プラズマ合成高濃度ニオブ含有酸化チタン微粒子の熱処理による可視光活性な光触媒”，無機マテリアル学会第 130 回学術講演会，(24) (2015 年 6 月 5 日，日本大学生産工学部，習志野市)。
- 4) 金丸峻士，大石晟子，石垣隆正，“三塩化チタンを原料とした酸化チタン微粒子の水熱合成”，無機マテリアル学会第 130 回学術講演会，(25) (2015 年 6 月 5 日，日本大学生産工学部，習志野市)。
- 5) Takamasa Ishigaki, Yusuke Nakada, Yoshihiro Tsujimoto, Chenning Zhang and Tetsuo Uchikoshi, “High-temperature heat-treatment of two kinds of highly Nb-doped TiO₂ nanoparticles prepared by sol-gel and thermal plasma methods”, The 13rd International Sol-Gel Conference, P11-3 (2015 年 9 月 11 日，メルパルク京都，京都市)。
- 6) 稲見栄一，森川弘理，藤林真衣歩，石垣隆正，緒方啓典，“五酸化ニオブを用いたペロブスカイト太陽電池の下地層の作製条件と特性評価”，第 76 回応用物理学会秋季学術講演会，13p-2V-9 (2015 年 9 月 13 日，名古屋国際会議場，名古屋市)。
- 7) 堤大耀，岡本裕二，石垣隆正，角谷正友，“誘導結合型プラズマを用いて発生させた水素ラジカルによるクロロシラン系原料の分解”，第 76 回応用物理学会秋季学術講演会，15p-PB2-51 (2015 年 9 月 15 日，名古屋国際会議場，名古屋市)。
- 8) 志田守，Sharif Abdullah Al Mamun，石垣隆正，打越哲郎，“pH を変化させた水溶液中のレーザーアブレーションによる Y₂O₃ ナノ粒子の合成”，日本セラミックス協会第 27 回秋季シンポジウム，1G20 (2015 年 9 月 16 日，富山大学，富山市)。
- 9) Shunji Fujita, Ayumu Yamasaki, Takamasa Ishigaki, Tetsuo Uchikoshi, “Fabrication of Textured Ti-doped Hematite Ceramics through a Slip Casting in a Strong Magnetic field”, 9th International Conference on the Science and Technology for Advanced Ceramics, 2PS-4 (2015 年 10 月 20 日，筑波国際会議場，つくば市)。
- 10) Kei Tsunoda, Takeo Ohsawa, Benjamin Dierre, Sergey Grachev, Hervé Montigaud, Takamasa Ishigaki, Naoki Ohashi, “Electronic Transports in Polarity-Controlled ZnO Thin Films Grown Under External Electric Bias during a Radio-Frequency

Magnetron Sputtering”, 9th International Symposium on Transparent Oxide and Related Materials for Electronics and Optics, IPT-7 (2015 年 10 月 19 日, 筑波国際会議場, つくば市)。

- 11) 則道子, 石垣隆正, 打越哲郎, “Fe あるいは Al ドープした ZnO 微粒子の均一沈殿法による合成”, 無機マテリアル学会第 131 回学術講演会, (37) (2015 年 11 月 6 日, ウィンクあいち, 名古屋市).
- 12) 石井沙耶花, 石垣隆正, 打越哲郎, “酸化亜鉛微粒子の水熱合成における添加物効果”, 第 54 回セラミックス基礎科学討論会, 1A02 (2016 年 1 月 7 日, アバンセ, 佐賀市).
- 13) 志田守, Sharif Abdullah Al Mamun, 石垣隆正, 打越哲郎, 角谷正友, “pH を変化したレーザーアブレーションによる $Y_2O_3:Eu^{3+}$ 蛍光体ナノ粒子の合成”, 第 54 回セラミックス基礎科学討論会, 1A03 (2016 年 1 月 7 日, アバンセ, 佐賀市).
- 14) 藤田俊二, 石垣隆正, 打越哲郎, “高磁場配向プロセスによる Ti ドープヘマタイト配向焼結体の作製と評価”, 第 54 回セラミックス基礎科学討論会, 1A04 (2016 年 1 月 7 日, アバンセ, 佐賀市).

杉山 賢次

<一般講演>

- 1) 近藤雄大, 杉山賢次, “リビング重合法による PS-PCL-PS トリブロック共重合体の合成と生分解性評価”, 第 64 回高分子討論会 (2015 年 9 月 15 日, 東北大学, 仙台市)。

田中 豊

<一般講演>

- 1) 坂間清子, 鈴木, 田中豊, “気泡除去装置の流れ解析 (気泡径の違いによる比較)”, 平成 27 年春季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp.94-96, 2015-5-29. (機械振興会館・東京)
- 2) 朴重濠, 尹蘇南, 咸永福, 田中豊, “遠心分離を用いた水中溶存空気の捕集器に関する研究”, 平成 27 年春季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp.28-30, 2015-5-29. (機械振興会館・東京)
- 3) 坂間清子, 田中豊, “リニアアクチュエータの特性比較と評価”, 日本機械学会 2015 年度年次大会講演論文集 DVD, No.15-1, S1140104, 2015-09-14. (北海道大・札幌)
- 4) 五嶋裕之, 坂間清子, 田中豊, “コリオリ流量計を用いた油中気泡量の測定”, 日本機械学会 2015 年度年次大会講演論文集 DVD, No.15-1, S1150302, 2015-09-14. (北海道大・札幌)
- 5) 五嶋裕之, 坂間清子, 舟知亮介, 田中豊, “油中気泡量の測定によるキャビテーションの評価”, 日本機械学会山梨講演会講演論文集, pp.74-75, 2015-10-17. (山梨大・甲府)
- 6) 坂間清子, 鈴木, 田中豊, “混入気泡径の違いを考慮した気泡除去装置の設計法”, 平成 27 年秋季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp.23-25, 2015-11-26. (ジェイドガーデンパレス・鹿児島市)
- 7) 五嶋裕之, 舟知亮介, 坂間清子, 田中豊, “ハイスピードカメラによるキャビテーション噴流の可視化”, 平成 27 年秋季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp.98-100, 2015-11-27. (ジェイドガーデンパレス・鹿児島市)

御法川 学

<一般講演>

- 1) G. Minorikawa, T. Yamaguchi, “Study on Evaluation Method of Tonal Noise for Small Fan”, Proceedings of the 22nd international congress on sound and vibration (ICSV22), No.236 (2015)。
- 2) Y. Kato, G. Minorikawa, “Study on Design and Prototyping of Small Low Noise Wind Tunnel”, Proceedings of Internoise2015, No.551 (2015).
- 3) T. Nakanishi, T. Aihara, T. Sakai, G. Minorikawa, “Sound Quality Analysis of Cymbals”, Proceedings of Internoise2015, No.349 (2015).
- 4) I. Kimizuka, G. Minorikawa, T. Nakayama, M. Miyahara, “Development of Noise and Vibration Measurement Method Based on the Actual Point of Operation of Small Cooling Fan Installed in Electronic Equipment”, Proceedings of Internoise2015, No.918 (2015)。
- 5) 小村健人, 秋山峻太郎, 内野泰伸, 岩原光男, 御法川学, 相原建人, “機能モデルによるモータの運動解析”, 日本機械学会 No.15-7 Dynamics and Design Conference 2015 USB 論文集, No.627 (2015)。
- 6) 吉田優介, 御法川学, “小型航空機の操縦特性に関する評価法”, 第 53 回飛行機シンポジウム, No. 3D11, 2015 年 11 月。

辻田 星歩

<一般講演>

- 1) 榊達郎, 辻田星歩, “トランスピレーショ冷却を有する直線タービン静翼列内の流れ数値解析 (二次流れが冷却効率に及ぼす影響)”, 第 43 回日本ガスタービン学会 定期講演会 (米子) 講演論文集, C-8, 2015 年 9 月 (米子コンベンションセンター, 米子市)。

- 2) 高倉健介, 辻田星歩, ”超高負荷タービン直線翼列内の流れに関する研究 (翼端間隙の影響)”, 日本機械学会 2015 年度年次大会論文集, J052010, 2015 年 9 月(北海道大学, 札幌市).
- 3) 武田賢太, 辻田星歩, ”曲がりダクトによる軸流タービン翼列内の二次流れと損失生成機構の解明 (曲がり角と流路幅変化率の影響)”, 日本機械学会 2015 年度年次大会論文集, J0520202, 2015 年 9 月(北海道大学, 札幌市).
- 4) 小林洋一, 廣瀬陽一, 辻田星歩, ”超高負荷軸流タービン円環翼列の空力性能に関する実験的研究”, 日本機械学会東北支部第 51 期総会・講演会, 2016 年 3 月 (東北大, 仙台市) .
- 5) 山瀬英之, 中島友稀, 辻田星歩, 岩上玲, 木村太治, “吹込みノズルによる遠心圧縮機のサージングの制御 (ノズル開口幅の影響)”, 日本機械学会東北支部第 51 期総会・講演会, 2016 年 3 月 (東北大, 仙台市) .

安田 彰

<一般講演>

- 1) 松尾 遥, 本山 佳樹, 曾我美 泰隆, 西勝 聡, 安田 彰, マルチコイルモータのモデルに関する一提案, 平成27年電気学会部門大会, GS13-1、8月28日 (金), 2015年.
- 2) 松尾 遥, 本山 佳樹, 曾我美 泰隆, 西勝 聡, 安田 彰, マルチコイルモータのモデルに関する一提案, 平成27年電気学会部門大会, GS13-1、8月28日 (金), 2015年.
- 3) 中村智寛, 松尾 遥, 本山佳樹, 安田 彰, 吉野理貴, マルチコイルモータ駆動回路の非導通動作の検証, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-10, 9月, 2015年, (宮城県仙台市).
- 4) 本山佳樹, 松尾 遥, 中村智寛, 安田 彰, マルチコイルモータのシミュレーションによる電流高調波特性の検討, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-9, 9月, 2015年, (宮城県仙台市).
- 5) 松尾 遥, 本山佳樹, 中村智寛, 赤松雄貴, 安田 彰, マルチコイルモータを用いた回転速度の振動低減法, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-8, 9月, 2015年, (宮城県仙台市).
- 6) 曾我美泰隆, 松尾 遥, 安田 彰, 吉野理貴, デジタル直接駆動型スピーカの指向性へのツリー構造NSDEMの応用, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-6, 9月, 2015年, (宮城県仙台市). (*11)
- 7) 吉田知朗, 西勝 聡, 吉野理貴, 安田 彰, AB級出力段に用いるコモンモードフィードバック機能を有するV-I変換レベルシフタに関する一提案, 電気学会, 電子回路研究会, ECT-016-013, 1月, 2016年 (福岡県).
- 8) 黄 弋, 西勝 聡, 春海 豪, 安田 彰, ノイズシェーピング構成とミスマッチシェーパーを用いたバックグラウンドキャリブレーション型パイプラインADC, 電気学会, 電子回路研究会, ECT-016-011, 1月, 2016年 (福岡県).
- 9) 戸賀崎悠介, 星野裕也, 吉野理貴, 安田 彰, 差動注入トランジスタを用いた広同期範囲5GHz帯注入同期型分周器, 電子情報通信学会全国大会, C-12-3, 3月, 2016年, (福岡県福岡市).
- 10) 戸野村厚樹, 高橋壮佳, 安田 彰, 吉野理貴, 西勝 聡, デジタル直接駆動技術を用いたパラメトリックスピーカの高効率駆動, 電子情報通信学会全国大会, A-5-14, 3月, 2016年, (福岡県福岡市). (*11)
- 11) 高橋壮佳, 戸野村厚樹, 安田 彰, 吉野理貴, 5V駆動大電力デジタルスピーカ用ドライバの試作, 電子情報通信学会全国大会, A-5-13, 3月, 2016年, (福岡県福岡市).
- 12) 川部嵩永, 渡邊裕紀, 春海 豪, 峯村亮佑, 西勝 聡, 吉野理貴, 安田 彰, $\Delta\Sigma$ DACの高精度化, 電子情報通信学会全国大会, A-1-16, 3月, 2016年, (福岡県福岡市).

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・掲載誌の目次、学会開催資料。

③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や 2015 年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等) の詳細を簡条書きで記入。

学会賞の受賞 : 2 件

- ・日本機械学会機素潤滑設計部門 業績賞受賞
田中豊、受賞理由: アクチュエータシステム技術分野, 特にフルードパワーシステムの省エネルギー化や高機能化・高性能化に関する長年にわたる研究開発と部門運営への貢献に対して (2015 年 4 月).
- ・日本機械学会環境工学部門 研究業績受賞
御法川学、受賞理由: 高流速に伴い発生する合流配管における流体励起振動に関する一連の研究ならびに流体騒音、送風機騒音の低減に関する貢献に対して (2015 年 7 月).

学術誌掲載の優秀論文賞 : 2 件

- ・耐火物技術協会・若林論文賞
明石孝也、勝山陽介、松嶋景一郎、“ポリマー支援ゾル-ゲル法と超臨界乾燥による多結晶SiC基板へのHfO₂多孔

質厚膜の形成”、耐火物、67、276-280 (2015).

- ・日本化学会 欧文誌 BCSJ Award 論文 (表紙掲載論文)

Tatsuya Sugimoto, Keisaku Kimura, “Stability of Graphene Oxide Film to Electron Beam Irradiation and Possible Thickness Dependence of Electron Attenuation”, Bull.Chem.Soc.Jpn.86 (2013) 333-338.

研究成果の新聞掲載：3 件

- ・“大腸菌が多剤耐性を獲得するメカニズムを発見 薬に合わせポンプ交換”、日刊工業新聞、および化学工業日報 (2016 年 2 月 29 日掲載)
- ・“パワー半導体窒化ガリウムでエネルギー損失 1/7 に 法政大学開発のパワーデバイスで世界最高の絶縁破壊耐圧を記録”、日経産業新聞 (2015 年 9 月 16 日掲載)
- ・“廃 LED 照明のリサイクルシステムの構築”、日刊産業新聞 (2016 年 3 月 4 日掲載)

研究発表が優秀発表賞を受賞：国際学会：2 件、国内学会：1 件

- ・Xiangxiang Fan, Sayako Sakama, Takahiro Togawa, Yutaka Tanaka, “Design and Fabrication of ER Braking Device for Micromouse”, 7th International Conference on Fluid Power and Mechatronics (2015 年 8 月 7 日、哈爾濱、中国).
- ・Silver poster award; Kei Tsunoda, Takeo Ohsawa, Benjamin Dierre, Sergey Grachev, Hervé Montigaud, Takamasa Ishigaki, Naoki Ohashi, “Electronic Transports in Polarity-Controlled ZnO Thin Films Grown Under External Electric Bias during a Radio-Frequency Magnetron Sputtering”, 9th International Symposium on Transparent Oxide and Related Materials for Electronics and Optics, IPT-7 (2015 年 10 月 19 日、筑波国際会議場、つくば市).
- ・松尾遙、本山佳樹、曾我美泰隆、西勝聡、安田彰、平成 27 年電気学会 優秀論文発表 A 賞 (IEEJ Excellent Presentation Award)、”GS13-1：マルチコイルモータのモデルに関する一提案“(2015 年 8 月 31 日、長崎大学、長崎市).

学会における招待講演：12 件

(詳細は、「1.1②対外的に発表した研究成果」に記述した。)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・表彰学会の HP、論文掲載誌、掲載新聞の紙面、学会開催資料。

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

(～400 字程度まで) ※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

当センターで実施している私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」に対して、2016 年 3 月に外部評価委員による第三者評価を受けた。

評価委員（敬称略）：

落合勇一（千葉大学／名誉教授・グランドフェロー）、河村富士夫（立教大学／名誉教授）、北條春夫（東京工業大学／精密工学研究所長）。

評価報告のまとめ：

1. 「選定時」に付された留意事項、「基本テーマ間の連携が見えず、統一性に課題が残るので留意すること」への対応：よく考えられた対応をとっており、基本テーマ間の情報共有が連携の意識を向上させており、今後より良い成果を導き出せるものと期待できる。
2. マネジメント・実施体制（研究組織、基本テーマ間連携、外部との共同研究の有効性）：研究の効率向上に対してよく考慮されており、的確な組織と良好な実施体制が構築されている。進捗状況も、運営委員会とセミナーにより確認できる体制となっている。外部機関等との協力は、常時意識し続けるよう期待する。
3. アウトプット（論文、学会発表等の直接の成果）：平均的水準より優れたアウトプットであり、質・量ともに十分な報告がなされている。グローバルな議論を高めるために、主要国際論文誌への投稿を増やすさらなる努力が望まれる。
4. 総合評価（研究全体に対する総合的な所見）：プロジェクト前半の結果は総合的に優れており、目標は十分に達成されると考えられる。現段階のシーズ研究をさらに発展させて、トータルの「エネルギー変換システム」が見通せる方向性を、今後の成果の中に期待したい。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各評価委員からの外部評価報告シート

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。

- ・2015 年度に応募した科研費申請 15 件

・2015 年度中に採択を受けた外部資金 - 科研費 13 件、計 1,530 万円 - 未来のあるべき社会・ライフスタイルを創造する技術イノベーション事業 5,272 万円 - 環境研究総合推進費補助金 2,543 万円 - その他（民間会社との共同研究・民間会社からの委託研究） 13 件
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・研究開発センター登録データ

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・当センターで実施している私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」に対して、2016 年 3 月に外部評価委員による第三者評価を受け、今後の活動の指針とした。	1.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

第三者評価の報告を受け、プロジェクト後半の留意点を次のようにまとめ、実現をめざしている。 ・連携の意識を持ち続けて、プロジェクトを推進する。 ・より高度な内容の成果をめざして、外部機関等と協力しながら研究を進める。 ・国際的なアウトプットとするために、引き続き主要国際論文誌への投稿を増やす努力をする。 ・連携による成果を反映した論文を発表する。 ・プロジェクトのタイトル、新たな「エネルギー変換システム」を実現するための方向性を見いだす。

【この基準の大学評価】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターでは、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業における研究活動として、グリーンテクノロジー・セミナーを 3 回開催し、安定した参加者を集めており、研究・教育活動を適切に実行していると評価できる。論文発表や講演などは海外での業績があるため、国内のセミナーにおいても、海外からゲストスピーカーを招くなど、グローバル化に向けた取り組みも期待したい。 研究成果については、国内外の学会・学術誌に精力的に論文発表を行い、質・量ともに充実している。特に海外での招待講演 4 件は高く評価できる。さらに、学会賞・優秀論文などの受賞が相当数あり、研究成果が学界から高く評価されている証拠と考えられる。 外部評価については、外部評価委員 3 名による第三者評価委員会より、概ね高い評価を受けている。また、第三者評価委員会の評価結果を受け、より高い目標を掲げられており、今後の活動も期待したい。 外部資金の応募も活発で、採択件数も相当数であり努力が認められる。
--

2 内部質保証

（１）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。
①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。
【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。 ・研究センターの運営委員会が内部質保証推進の役割を担っている。運営委員会の中に年報編纂、ホームページ更新のためのワーキンググループを設置して、PDCAサイクル整備と内部質保証のためのシステムを構築している。 ・年報編纂、ホームページ更新のためのデータ収集作業を通じて、各年度の研究成果をチェックしている。 ・プロジェクト主催の基本テーマ横断セミナーである「グリーンテクノロジーセミナー」において、発表・討論を行うことにより、プロジェクト参加者の研究成果の相互検証につとめている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターでは、運営委員会が内部質保証に関する役割を担い、PDCA サイクル整備などのシステムを構築しており、適切と評価できる。各プロジェクトの横断的な検討により、幅広い見地からの質保証を機能させることを期待したい。

【大学評価総評】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターにおいては、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に基づいて研究を進めており、その研究業績は高い水準にある。

外部評価委員による第三者評価を受け、概ね高い評価を得ている。さらに改善の姿勢が見られることは高く評価できる。

科研費を始め、外部資金獲得に対して積極的な姿勢が見られる。大型の外部資金の獲得に向けて、研究プロジェクトの方向性を定めることが、大きな課題と言えよう。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】

サステイナビリティ研究所は、環境サステイナビリティの実現の政策に関する研究を行うことを目的として設置された。研究員の確保や外部資金獲得などの課題はあるものの、国際シンポジウムの共催や刊行物の発行が行われ、活発な研究活動が行われていることは評価できる。2013 年 7 月設置の新しい研究所であり、現時点では社会的評価は明確でないため、研究成果と社会貢献をさらに蓄積されることが望ましい。また、サステイナビリティ研究所では多数の RA が活動しており、研究倫理の浸透に向けた取り組みを検討されたい。さらに、外部資金獲得に向けた努力、組織の認知度向上に向けた一層の取り組みを期待する。

【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

船橋晴俊・副所長の急逝を受け、5 つのアプローチのそれぞれについて取り組む具体的な課題と方法を精選し、各アプローチの代表者と連携をとりながら運営を進めている。すべてのアプローチについて研究会・作業チームが組織されており、本研究所の研究員が代表者として管理・運営を行っている。またそれぞれの組織は、研究員とリサーチ・アシスタントによって構成されており（全体で研究員 12 名[専任 1 名、兼担 6 名、客員 5 名]およびリサーチ・アシスタント 8 名）、研究能力の維持・向上に努めるとともに、若手研究者の育成、とりわけ公刊論文の執筆および博士論文の作成に向けた指導を強化している。また、公的研究費を受ける研究者が受講する「コンプライアンス研修会」の資料を全ての R・A に送付し、理解度アンケートを実施するなど研究倫理の浸透に向けた取り組みも行った。外部資金獲得については、今後も努力して行く所存である。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- ・映像系環境アーカイブスおよび環境デジタルアーカイブスの構築・公開（東日本大震災についての網羅的映像アーカイブスの継続および「むつ小川原開発」に関する歴史資料を整理・目録作成・デジタル化して、Website 上で一般公開を達成）
- ・2 つの国際会議の共催（「気候変動時代における再生可能エネルギーの促進政策と課題・展望（日本と韓国）」国際ワークショップ〔韓国・済州島・2015 年 11 月 18 日；参加者 140 名〕および「第 5 回東アジア環境社会学国際シンポジウム」〔仙台・東北大学・2015 年 10 月 30 日～11 月 1 日；参加者は日本人 67 名、外国人 25 名、合計 92 名〕。前者にあわせて、日韓住民意識調査を実施した（現在、分析結果を論文に取りまとめ作業が進行中）
- ・新しい 2 つの研究会の組織化（「原発事故被災地再生研究会」と「再生可能エネルギー導入による地域社会に構造的再生研究会」）
- ・「原発事故被災地再生研究会」の中間的とりまとめとして、外部研究者の参加も得て公開研究会を開催（2016 年 2 月 3 日、参加者 22 名）
- ・「再生可能エネルギー導入による地域社会の構造的再生研究会」は、長野県飯田市を対象に、さらに滋賀県湖南市を比較対象として調査し、市民共同発電事業の全市的展開の詳細調査を実施
- ・2013 年 12 月に本研究所が共催した国際シンポの成果が間もなく出版される（『脱原発と再生エネの「エネルギー転換」—ドイツの現在、未来の日本』法政大学出版局、2016 年 7 月刊行予定）。それに加えて、ドイツにおける調査研究の成果の編集作業が進行中である
- ・カーネギー・カウンスルとの連携によるワークショップの共催（Global Ethics: Nuclear Energy, Technology, and Risk; 2015 年 6 月 12 日、法政大学市ヶ谷キャンパス；参加者 28 名）。本研究所の研究員 2 名が福島原発事故をめぐって議論をし、その成果は外国人記者クラブにおける記者会見で発表された
- ・自然エネルギーの事業化推進アプローチにおける調査研究の進展（東北 6 県を対象に、地域に根ざした個々の再生可能

エネルギー事業をとりまく全体的状況と地域金融の活用ポテンシャルを調査) ・地域社会レベルでの再生可能エネルギー政策への転換の支援(「一般社団法人えこえね南相馬研究機構」および「一般社団法人大磯エネシフト」の設立過程では、本研究所 R. A. が書記としての役割を担い、議論の経緯を追跡可能な詳細な議事録の蓄積を得た)。特に「大磯エネシフト」および大磯町での条例制定支援は、条例の制定・施行に結実したという意味で大きな成功を収めた
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・ http://www.sal.tohoku.ac.jp/soc/isesea-5/download.html#mess ・ http://www.hosei.ac.jp/koho/photo/2015/150626.html
②対外的に発表した研究成果(出版物、学会発表等)
※2015 年度に刊行した出版物(発刊日、タイトル、著者、内容等)や実施した学会発表等(学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等)の詳細を箇条書きで記入。 【本研究所の出版物】 ・『サステナビリティ研究』第 6 号(2016 年 3 月) ・「ニューズレター」第 7 号(2016 年 3 月) ・2014 年 7 月に刊行した <i>A General World Environmental Chronology</i> のフォローアップ作業として、本研究所 Website に『正誤表』(A4 判 30pp.)を掲載して公開した 【本研究所関係者による研究成果(抜粋)】 ・堀川三郎(2015)「年表による問題構造の把握——『環境総合年表』の試み」佐藤寛・浜本篤史・佐野麻由子・滝村卓司編『開発社会学を学ぶための 60 冊』明石書店 ・長島怜央(2015)『アメリカとグアム——植民地主義、レイシズム、先住民』有信堂高文社 ・山本薫子・高木竜輔・佐藤彰彦・山下祐介(2015)『原発避難者の声を聞く——復興政策の何が問題か』(岩波ブックレット NO. 927)岩波書店 ・Onoda, Shinji, & Kai Schlegelmilch (2015) “Policy changes on Ecological Tax Reform/Carbon Tax in Germany and Japan.” <i>Critical Issues in Environmental Taxation</i>, Volume XV, Edward Elgar. ・白井信雄・鷲田豊明・青柳みどり(2015)「地方自治体の環境政策」『環境を担う人と組織』(環境政策の新地平第 8 巻), 岩波書店 【本研究所関係者による学会報告(抜粋)】 ・Horikawa, Saburo, “An Introduction to the Session: The Life and Contributions of Prof. Harutoshi Funabashi.” The 5th International Symposium on Environmental Sociology in East Asia (ISESEA-5) at Tohoku University, Sendai, Japan, 2015 年 10 月 ・白井信雄・壽福眞美・谷口信雄「再生可能エネルギーの導入による地域社会の構造的再生に関する理論的枠組みの設定と事例分析」環境科学会 2015 年会, 大阪大学, 2015 年 9 月 ・西田善行「『史資料』としてのテレビ報道——環境報道アーカイブの取り組みから」社会政策学会第 130 回大会分科会, 御茶ノ水女子大学, 2015 年 6 月 ・佐藤彰彦「原発事故後の復興政策の現実——帰還・自立の阻害要因と構造」関西社会学会大会, 立命館大学, 2015 年 5 月
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価(書評・論文等)
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や 2015 年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)の詳細を箇条書きで記入。 ・韓国の環境社会学会長の具 度完(KU Dowan)氏は、日韓の環境問題史・草の根交流史を概観する論文のなかで、「重要な成果は、船橋晴俊が主導して 2014 年に出版された <i>A General World Environmental Chronology</i> であり」、「世界で初めて環境問題の年表を整理した記念碑的な著作」(「韓国と日本の環境運動と知識の交流」、磯崎・李編『日韓関係史 1965-2015』[第 3 巻 社会・文化], 東京大学出版会, 2015 年, pp. 206-207)と高く評価している。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・磯崎・李編『日韓関係史 1965-2015』[第 3 巻 社会・文化], 東京大学出版会, 2015 年
④研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)
(~400 字程度まで) ※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、

現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

外部評価は、次の専門家による評価報告書でなされている。寺西俊一（一橋大学大学院経済学研究科特任教授：環境経済学）、寺田良一（明治大学文学部教授：環境社会学）、堀尾正朝（東京農工大学名誉教授：環境学）。①総合的に優れている点として、豊富な研究成果が生み出されていること、英文発表により国際的な議論にとって有意義であること、重要テーマである「エネルギー戦略シフトによる地域再生」という基本的な政策課題を総合的調査・研究活動を行っていること、とくに情報拠点にとどまらず、地域に根差した内発的発展の将来像を探索していること、が指摘されている。②今後への期待として、より体系的・一般的なモデルの提言、および英文発表を質的・量的に高め、世界的な拠点を目指すこと、が指摘されている。三者ともに総合評価で「A」をつけている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・外部評価委員の報告書

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。

・特になし

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

2015 年度より、サステナビリティ実践知研究機構という組織が新設され、サステナビリティ研究所もその組織に統合された。外部資金の獲得については、その組織の中で検討していきたい。

【この基準の大学評価】

サステナビリティ研究所は、環境サステナビリティ実現の政策、特にエネルギー政策の転換及びそれに伴う地域再生に関する研究を目的とし、エネルギー政策の転換では、映像系を含めたデジタルアーカイブを作成し、一般公開も行っている。2つの国際会議や国際ワークショップの共催及び開催のみならず、具体的な日韓住民意識調査も実施されており、研究活動の実績も評価できる。地域再生エネルギーの導入や再生可能なエネルギー政策への転換においても調査・支援が行われており、それらに関する報告書の作成、研究成果の発表及び学会報告も行われている。研究成果に対する社会的評価は、日韓の環境問題史を概観する論文でも高評価であり、今後の成果についても期待される。第三者による外部評価においては、豊富な研究成果が今後の国際的な議論に有意義であることや「エネルギー戦略シフトによる地域再生」の研究内容も高評価となっている。外部資金の応募・獲得については、サステナビリティ実践知研究機構での十分な検討のもと、早急な外部資金獲得に向けた対応をお願いしたい。

2 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2015 年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※簡条書きで記入。

・サステナビリティ研究所の質保証は、所長・専任研究員・兼任研究員による運営委員会において討議されている。教員は運営委員会の構成として質保証活動に参加している。

・2015 年度から外部評価委員による評価を取り入れて、内部質評価制度を充実させた。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

サステイナビリティ研究所の質保証活動については、所長・専任研究員・兼担研究員による運営委員会において、運営及び事業、所員等人事、各種委員会の設置及び運営、予算及び決算等に関する検討が行われている。所長は、学術支援本部担当理事が兼務する体制となっており、運営委員会が必要と認めた場合には、運営委員以外の者を運営委員会に出席させることも可能であり、内部質保証の観点からも恒常的な評価が期待される。また、外部評価制度も専門家（3 名）による評価体制が実施されており、適切な質保証活動が実施されていると判断する。

【大学評価総評】

サステイナビリティ研究所では、事業目的の達成のため、研究所としての具体的な課題と方法について 5 つのアプローチの観点から、アプローチ代表者と連携を図りながら運営が行われている。研究員（12 名）及び R・A（8 名）の研究能力の維持・向上、若手研究者の育成（公刊論文の執筆および博士論文作成に向けた指導）や研究倫理に向けた取り組みの一環として、「コンプライアンス研修会」の資料配付等もすべての R・A に対して行われている。また、社会的評価は、一部の出版物においてすでに高評価が得られており、今後の多くの蓄積が期待される。継続性のある研究・教育活動（国際シンポジウム、国際ワークショップの共催及び新しい研究会の組織化、「原発事故被災地再生研究会」・「再生可能エネルギー導入による地域社会の構造的再生研究会」）が実行され、今後の各種提言による地域再生に関する拠点としての社会的役割の一端も担いつつある。第三者による外部評価が継続的に行われており、高く評価できる。全体的な事業目的も達成されているが、外部資金獲得については、組織統合の問題もあるが、継続的な指摘事項でもあるため、今後のサステイナビリティ実践知研究機構での十分な検討のもと、組織的な取り組みをお願いしたい。

I 2015 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015 年度大学評価結果総評】 ・該当なし
【2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】 （～400 字程度まで） ・該当なし

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2015 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2015 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 【シンポジウム及びセミナー】 ・「法政大学エコ地域デザイン研究所 2015 年度報告会・シンポジウム」 開催日：法政大学市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール 場 所：2016 年 2 月 28 日 参加者：約 50 名 内 容：第 I 部 「エコ地域デザイン研究所、本年度研究活動報告」 第 II 部 シンポジウム 1「水系エコミュージアムとしての法政大学の立地」 第 III 部 シンポジウム 2「水系からみた東京の再生：2020 年に向けた課題と展望」 ・エクハルト・ハーン先生講演会（ドルトムント大学名誉教授）「グリーンインフラの展開と都市づくり」 開催日：法政大学市ヶ谷校舎 ポアソナードタワー 25 階 B 会議室 場 所：2015 年 10 月 19 日（月） 参加者：約 50 名 内 容：グリーンインフラ（GI）は、日本においてもこの 8 月に国土形成計画に盛り込まれ、国策となった。アメリカや EU 諸国からは立ち遅れたものの、急速な盛り上がりを見せつつある。しかし、身近な自治体計画レベルでの展開の姿はまだ見えてこない。ハーン先生の来日を機に、ドイツや EU における GI がどのように都市計画に反映されているか、お話を伺い、日本の取り組みについて意見交換を行った。 ・石川道政（前美濃市長岐阜女子大学客員教授、岐阜県率森林文化アカデミー客員教授）講演会「自然・歴史・伝統産業を活かしたオンリーワンの「美しいまち」づくり-岐阜県美濃市での実践を通して-」 開催日：法政大学市ヶ谷田町校舎 511 教室 場 所：2015 年 5 月 21 日（木） 参加者：約 60 名 内 容：日本全国の自治体の市長のなかでも最も著名な人物の一人、元美濃市長の石川道政氏を招き、長年にわたるまちづくりの豊かな経験を思う存分、語っていただく。石川氏が 1 年半前まで市長を務めた岐阜県的美濃市は、長良川沿いに位置し、豊かな自然環境に恵まれると同時に、舟運を活用しながら、和紙の伝統産業を育み（昨年世界遺産への登録実現）、その富の蓄積で素晴らしい町並みを形成してきた。卯建をもつ特徴あるその町並みは、重要伝統的建造物群に指定され、美しい都市景観を誇っている。自然、歴史、伝統産業・文化を現代に活かすまちづくりは、日本の地方都市が目指すべき方向性であり、それを最先端で実現しているのが美濃市、それを牽引してきたのが石川氏である。氏のハード、ソフトの両面に渡る幅広い視点からの講演は、建築、都市計画、まちづくりを学ぶ学生ばかりか、教員にとっても大きな刺激を与えてくれるものと期待される。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2015 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を簡条書きで記入。 【出版物・報告書】 ・陣内秀信・稲益祐太＋法政大学陣内研究室『アマルフィ海岸の地域構造ー海と山を結ぶテリトリーオの視点からー』2015 年 7 月 31 日発行 ・法政大学デザイン工学部建築学科・陣内研究室編『「米国北東部の水都」調査報告書 速報版』2015 年 9 月 30 日発行 ・法政大学デザイン工学部建築学科・陣内研究室編『「米国北東部の水都」調査報告書』2016 年 1 月 12 日発行 ・樋渡 彩＋法政大学陣内秀信研究室編『ヴェネツィアのテリトリーオ——水の都を支える流域の文化』鹿島出版会、2016 年 3 月 20 日発行 ・出口清孝・森田喬 『フランスの交通輸送インフラ整備における地形的要因の指標化』2016 年 3 月 31 日発行 ・出口清孝・森田喬 『GIS(Geographic Information System)を用いたフランスの気候と農作物マップ』2016 年 3 月 31 日発行 ・陣内秀信・稲益祐太＋法政大学陣内研究室編『プーリア都市の発展過程と構成原理ーコンヴェルサーノを事例としてー』2016 年 3 月 31 日発行 ・法政大学デザイン工学部建築学科岡本哲志研究室『三陸の浜に刻まれた集落空間の仕組みを読み解く～雄勝・女川・牡鹿の 67 浜を対象に調査を重ねて』2016 年 2 月 24 日発行 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所の刊行物に対して 2015 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2015 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。 ・特になし 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2015 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 2015 年度は、引き続きいくつかの実践的な研究を中心に、堅実な成果をあげることができた。「水都に関する研究」（＝「水都学」）を前面に押し出し、主な研究対象となる東京を地理的、空間的に二つのエリアに分け、＜武蔵野・多摩プロジェクト＞と＜東京都心プロジェクト＞を軸に、活動を進めてきた。 ＜武蔵野・多摩プロジェクト＞では、日野において児童生徒たちと水辺の案内プロジェクトづくりのワークショップを、旧蚕糸試験場日野桑園第一蚕室（桑ハウス）では文化財登録に向けた取り組みを実施。その他にも、「源流プロジェクト」「府中・多摩川プロジェクト」を実施。 ＜東京都心プロジェクト＞では、「千代田学」の研究助成を得て「千代田区デジタルアトラスの活用～歴史文化と賑わいの可視化」についての調査・研究、さらに「外濠市民塾」と、「まちふねみらい塾」の活動を実施。今後ともさらにエコ研の水都研究に関する活動を発展させていく所存である。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2015 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2015 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。 ・千代田学「千代田区デジタルアトラスの活用～歴史文化と賑わいの可視化～」2015 年 4 月～2016 年 3 月、2015 年度事業額：927,000 円 ・境港市「水木しげるロードリニューアル検討模型製作」2015 年 9 月 1 日～2016 年 3 月 11 日、015 年度事業額：921,175 円 ・境港市「水木しげるロードリニューアルの検討（完成イメージ、パース制作）」2016 年 2 月 1 日～2016 年 5 月 31 日、2015 年度事業額：862,920 円

- ・水都日野・水田保全検討会（都市農地活用支援センター）委託「水・緑の景観エコロジカルネットワーク等の市民への普及啓発手法等検討」2015年9月16日～2016年2月25日、2015年度事業額：1,890,000円

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・＜武蔵野・多摩プロジェクト＞では、東京の西側ゾーンをその源流域である小管にまで新規に視点を広げ、「水都」の発想を拡大、深化させていくエコ研独自の研究に取り組んだ。 ・＜東京都心プロジェクト＞では、「外濠市民塾」から派生して、外濠周辺の町会、大学、企業が一堂に会し、地域づくりに取り組む「外濠懇談会」を組織、第一回の開催に漕ぎ着けた。 ・地元との繋がりという点で意味のある活動として、地元のタウン誌『かぐらむら』の編集部から依頼され、その79～83号に、陣内秀信・岡本哲志・高道昌志・石神隆・宮下清栄・福井恒明の面々でリレーエッセイを執筆。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・日野プロジェクトでは、これまでの成果を生かしながら、養蚕・絹をテーマに外部資金を獲得し、実践的な活動を伴いながら、より一層盛り上げていくことが必要。 ・外濠プロジェクトもエコ研の柱として据えていく。全国の城下町との比較や、地方城下町を水都の視点（水利、産業、遊び）から評価し、全国的な活動へと繋げていく。 ・次のステップを目指して、新しい構想と意味づけ、そして普遍性を備えた切り口を開拓していくことが求められる。 ・海外との比較は引き続き継続。
--

【この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、「環境の時代」を切り開く真の「都市と地域の再生」のための方法の研究を目的として、研究所の理念目的に則した、シンポジウム1回、講演会2回が開催され、また、出版物・報告書も関連研究室編の報告書も含めて定期的に発行されており、高く評価できる。科研費等外部資金も事業内容に合わせ獲得されており、事業全体としてのアクティビティーも感じられる。研究成果に対する社会的評価及び外部からの組織評価については、研究センターとしての具体的な記述が一部不足しているが、プロジェクトの遂行状況および研究対象となる地域との連携も図られており、十分評価対象となっていると判断される。特に、2015年度は継続的な「水都に関する研究」（＝「水都学」）を前面に取り上げ、＜武蔵野・多摩プロジェクト＞及び＜東京都心プロジェクト＞を基軸とした活動は、地域からの評価を含め、今後のさらなる発展が期待される。これらの観点から、点検・評価項目に対する事業遂行内容は、概ね良好である。

2 内部質保証

（１）点検・評価項目における2015年度の現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・内部質保障に関する各種委員は、運営委員会において適切に活動している。
- ・運営委員会の構成委員は所長・副所長を含め10名の教員であり、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。運営委員会では各委員からの報告を受け、それに応じて広く議論を行い、質の向上に努めている。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
----	---------

・特になし	
-------	--

【この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターは、兼担研究員、兼任研究員、研究生、兼担研究員（海外）及び事務局から構成されている。内部質保証に関する各種委員は、所長・副所長を含め 10 名の教員が担当し、必要に応じて内部質保証に関する委員会が開催されている。また、内部質保証の議題に応じて、オブザーバーの参加も規定上認められており、質保証の質向上の観点から評価できる。また、各委員会からの報告を踏まえた、議論による質保証への取り組みも実践されており、適切であると判断する。

【大学評価総評】

エコ地域デザイン研究センターの理念・設置の目的に基づき、国内のみならずドイツや EU におけるグリーンインフラの都市計画への反映状況や、日本での自然、歴史、伝統産業・文化を現代に活かすまちづくり等の日本の地方都市が目指すべき方向性を明示するシンポジウムやセミナーも開催し、研究成果及び外部資金の応募獲得実績も良好であり、評価できる。研究成果に対する社会的評価は、外部からの組織評価でも十分行われている。本研究センターの特色の 1 つである水都研究に関する活動を充実させ、一層の社会への発信力の向上に向けた地域性のある国内外への取り組みが期待される。また、新規外部資金の獲得により、新規分野での発展性への期待も多く、今後の内部質保証のさらなる充実のための検討も併せてお願いしたい。